

言葉

と
その周辺を

きわめる

活動報告書

言葉

と
その周辺を

きわめる

活動報告書

目次

…・＊◆————◆＊・…

まえがき	高垣敏博	
日本語と似て非なる言語 ～ビルマ語～	岡野賢二	1
国語になっていない公用語 ～ガリシア語～	川上茂信	25
マダガスカル語でもない、フランス語でもない、 日本手話とも違う、独自の混成言語 マダガスカル手話の世界	箕浦信勝	45
様々な“文字”をめぐる ～ナシ語～	黒澤直道	69
フィールドワークと言葉の語彙 ～パミールの言語・ワヒー語～	吉枝聡子	91
トルコ語とチュルク諸語	菅原 睦	113
講座概要		

まえがき

東京外国語大学語学研究所では 1994 年からほぼ毎年 19 回にわたって公開講座を実施してきました。2011 年度には東京外国語大学オープンアカデミーのプログラムとして本学本郷サテライトで『外語大の教師が熱中するもうひとつの言語』と題した公開講座を行い、その内容を受講者だけではなくできるだけ多くのみなさんに共有していただこうとブックレットとして刊行することにしました。2012 年度は『言葉とその周辺をきわめる』をタイトルとして新たに 6 名の講師による講座を開催いたしました。

本ブックレットは当日の講演内容（ビルマ語、ガリシア語、マダガスカル手話、ワヒー語、トルコ語とチュルク諸語）を文字起こししたものを基に原稿にいただいたもので、当日話された内容をできるだけ忠実に文字化していますが、講演内容を基に書き下ろした原稿（ナシ語）も含まれております。各章末にはコラムや講師が薦める言語や文化に関する文献が紹介されていますので、それぞれの研究者が情熱を傾ける言語やその文化背景、またそれらに取り組む知的興奮などをさらに味わっていただければ幸いです。

語学研究所長

高垣敏博

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる』

2012 年 10 月 9 日 第 1 回

「日本語と似て非なる言語 ～ビルマ語～」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

岡野 賢二

みなさん、こんばんは。第一回目は、私、岡野が担当いたします。東京外国語大学でビルマ語を教えております。今回皆さんにお話したいのは、タイトル「日本語と似て非なる言語～ビルマ語～」ということで、似た言語とはいったいどういうことなのか、ということです。私は言語学という学問をやっておりますので、言語学的に見たときに、似てるってどういうことなのか、恐らく皆さんが言語に対して持っている思い込みが意外と違うだろうこと、そういうことをお話してみたいと思います。日本語に似ている言語というと朝鮮語が有名です。勉強されている方は多いと思います。朝鮮語が日本語と似ている、というような話がよくされるようですが、それは本当に似ていると言っているのか、一緒に考えてみましょう。

それからもう一つ、ビルマ語のデータを見ていただき、外国語を勉強している間にはたと行き当たるもの、ちょっと足元をすくわれそうなところ、そういったものを 2～3 ご紹介したいと思います。本日集まっていた方の中にビルマ語を勉強された方が一名いらっしゃるということですが、恐らくその習った中で、今日お話しすることは多分入っていなかったろうと思います。

「ビルマ語」という呼称について

話に入る前に「ミャンマー」あるいは「ビルマ語」という呼称について若干説明しておこうと思います。ここでは「ビルマ語」と呼んでいますが、ビルマとはミャンマーの古い名であって、現在は原語に基づいてミャンマーに変更されたのだから「ミャンマー語」と言うのが相応しいのではないかと、思っておられる方もいらっしゃると思います。何で岡野は「ビルマ」を使い続けるのか、と。余談

ですが、私は ATOK という漢字仮名変換ソフトを使っていて「ビルマ」と打つと「ビルマ《地名変更→ミャンマー》」と叱られます。

さて、この説明は正しいともいえるし、不適切ともいえます。このあたりの事情を詳細に語ると話が長くなりますし、理解もしづらいですし、あまりいいことありませんので、簡単に説明します。

ビルマ／ミャンマーは現在「ミャンマー連邦共和国（英語呼称：The Republic of the Union of Myanmar、以下「ミャンマー）」という国号になっています。1989 年に英語呼称を Burma から Myanmar に変えました。国連で Myanmar という名称が了承されたため、日本でも国会の決議を通じてビルマからミャンマーと名前を変えました。そのミャンマーの人口は約 6,000 万人、その中で我々が「ビルマ族」と呼んでいる人たちが約 7 割（4,000 万人くらい）を占めます。その人たちが喋っている、その人たちの固有の言語ということで、私たちは「ビルマ語」と呼んでいます。

ですので「ミャンマー語って言わなきゃいけないんじゃないか」ということでもなく「ビルマ語」で一向に構わないのです。ただ、では「ミャンマー語」は間違いか、というところでもないところが少々ややこしい。

ミャンマー政府の公式見解では国民の総称を「ミャンマー (Myanmar)」、一民族名を「バマー (Bamar)」としています。日本語の「ビルマ」はオランダ語 (Birma) だか何かから江戸時代に入ってきたようです。おそらく Bamar に近い音が元になっていることは間違いないでしょうが、少なくともビルマ語の Bamar と日本語のビルマは直接的な関係はない。英語の Burma ともそうです。関係ないけれど日本語ではこの三つを同一視し、ミャンマーは国に住む民族の総称、ビルマは一民族のことを指すということが定着しています。

ミャンマーという語彙は 12 世紀までさかのぼることができます。ビルマ語が初めて書かれたのは 12 世紀初頭ですが、1190 年の碑文にはじめて{mran'mā}という綴りが現れます（ここでは綴りを{ }で表します）。この{mran'mā}という綴りは現代語と全く同じです。この{r}がその後に音変化を起して/y/となり/myàn.mà/という形ができました（本節のみ、発音を/ /に入れて表します）。12 世紀からずっと「ビルマ族」を指す言葉として用いられてきたと考えて相違ありません。この*/mran.mā/>*/myan.mā/が途中で my->*m->b-という別の変化が起り、/bāmà/という語ができたと考えられています。もちろんこれも元来「ビルマ族」を指す言葉です。ただ Bamar は Myanmar に比べて「崩れた」形式なので、正

式には「Myanmar」を使ったわけです。しかし Myanmar も Bamar も等しく第一に「ビルマ族」を指す言葉でした。

この語が近代国家を形成する際に国を指すようにもなった。英領時代には Burma と呼ばれるようになり、その後いろいろあって 1989 年に国連に国名の英語呼称を Burma から Myanmar に変更しました。この Myanmar が日本語のミャンマーの起源です。日本語の「ミャンマー」は厳密には原語を元になっているわけではありません。ちなみに英語綴りは Myanmar ですが、原語の発音は/myǎmə/「ミャマー」の方が一般的です。

ビルマ語は政府の公式見解に拠ればビルマ族（バマー）の言語ですから、「バマー語」といいたいところですが、さきほど述べたようにバマーよりミャ(ン)マーの方が「きちんとした」形式で、正式には/myǎmə bàḡà/（ミャンマー語？）とありますが、口語は/bǎmə zǎḡá/（バマー語？）ということもあります。これはビルマ語がミャンマーに住む民族の共通語という意識ではないだろうと思います（そのうちそう変わるかもしれませんが）。

ここまでの話をまとめると、ビルマ語のことを呼ぶ際、原語では「ミャ(ン)マー」も「バマー」も使います。言語の使用実態と政府の見解に乖離があることがそもそもの原因であり、ビルマ語の「バマー」と日本語の「ビルマ」（そして英語の Burma）を同一視することも適切ではないのです。日本語としては「ビルマ語」が筋が通っていますが、原語では「ミャ(ン)マー」がより正式だと認識されている、ということです。つまり日本語ではどちらがより正しい、とすることができないのです。

ビルマ語の特徴：系統

次にビルマ語の系統についてお話しします。ビルマ語はシナ・チベット語族に属します。シナというのは China すなわち中国語です。このシナ・チベット語族はシナ語派（漢語派）とチベット・ビルマ語派（藏緬語派）に分れます。この系統というのは元々同じ一つの言語から分れた、という意味ですので、中国語、チベット語、ビルマ語などは親戚の關係に当ります。とはいえ、中国語やチベット語を勉強したことがある方は、ビルマ語を見てもあまり似ているとは思われなんでしょう。分岐をしてから相当に時間が経っていますので、一見して似ても似つかないものになってしまっています。

チベット・ビルマ語派に属する言語は 200 以上あるといわれています。東は敦煌（西夏語）から西はネパール（ネワール語）まで広がっています。とはいえ国語／公用語となっているのはミャンマーのビルマ語、ブータンのゾンカ語、ネパールのネワール語ぐらいでしょうか。東南アジア、インドシナ半島ではベトナム、カンボジアがオーストロ・アジア系、タイとラオスがタイ・カダイ系で、ビルマ語とは系統が異なります。なお西夏語は既に話す人がいなくなっており、死語となっています。

ビルマ語を母語とする人は、先ほど述べたように 4,000 万人強のビルマ族の人たち、そしてミャンマー国内に住む非ビルマ族の人たちです。ミャンマーではビルマ語は公用語であり、教育言語であり、メディアの言語です。少数民族の多い地方都市では民族間の共通語として、例えばシャン州ではシャン語であるとか、カチン州ではジンポー語が使われていますが、そのようなところでも大概是ビルマ語が通じます。もちろん町から遠く離れた少数民族の集落では通じないこともあるようです。

非ビルマ族の中でもビルマ語が母語となっている人も少なくありません。ですので、第一、第二言語話者をあわせると 5,000 万人程度はいるのではないかと思います。

ただ通用地域を見てみますと、現ミャンマー連邦内にほぼ限定されるといっていいでしょう。国境を越えて出稼ぎに行ったり、難民として暮らしている人たちもいますが、ほぼ無視していい数です。日本にもミャンマーの人たちはたくさんいますよ。最近はいだいぶ減ったとは思いますが、数年前に新宿区の HP を見たところ、外国人登録をしているのは中国、韓国・北朝鮮に続いてミャンマー人が第 3 位でした。およそ 1,000 人ほどです。一時は東京近辺で 1 万人を超す、ともいわれていました。今でも山手線に乗っているとビルマ語が聞こえるなんてことがよくあります。

ビルマ語の特徴：音声・音韻

では外形的な話ではなくて、もうちょっと言語そのものについてお話をします。まずは音声と音韻です。ビルマ語は単音節を基調とする声調言語です。単音節を基調とする、というのは、多くの語彙が 1 音節でできているということです。「食べる」「美しい」「家」「畑」みんな 1 音節語です。もちろん 2 音節や 3 音節、そ

れ以上の語もありますが、日本語や英語などに比べると 1 音節語が圧倒的に多いと考えられます。

声調というのは中国語やタイ語、ラオ語、ベトナム語といった言語を勉強した方ならおなじみですね。音の高さやその変化によって意味を区別するシステムのことです。中国語は 4 種類（いわゆる四声）、タイ語、ラオ語は 5 種類、ベトナム語には 6 種類の区別があります。対してビルマ語は 3 種類（4 種類と考える人もいます）で、声調の種類としては少ない方でしょう。低い（低平）、高い（高平）、そして下がる（下降）という調子だけです。

音の高さによる区別、というのは日本語では部分的に、あるいは補助的に用いられています。東京方言の「箸」「橋」「端」などがそうです。ときに高校に教えに行ったりすることがあるのですが、そういう場合に日本語の例を出して説明します。「校舎を出た途端、《あめ》が降ってきた」の《あめ》のアクセントにより異様な情景が頭に浮かんだりする、とか言って。むろん私と同じアクセントパターンの地方でしか使えないテクニックですけど。

声調とアクセントは同じではありませんが、音の高さが意味決定に重要な役割を果たしているということをこういう例を通じて実感してもらっています。

またビルマ語は朝鮮語、中国語、タイ語、ラオ語、カンボジア語などと同じく、有気音と無気音の対立を持ちます。ベトナム語もありますが、あまり多くありません。

ビルマ語には大変珍しい子音があります。チベット・ビルマ系言語ではしばしば見られますが、それ以外だとほとんどないと思われる音です。それは鼻音や側面音、接近音などに無声化した子音があることです。これは大変珍しい。特にビルマ語の場合は *m, n, ny, ng, l, w, y* の全てに無声化音があり、その対立が安定しています。チベット語にもあるのですが、ビルマ語ほどはっきりはしないようです。なおチベットの中心地である「ラサ」の「ラ」の音は *l*（エル）の無声化した音です。

さて音節数が少ないことと声調、あるいは有気・無気の対立とは恐らく関連があります。音節数が少ないと、一つの音節でできるだけたくさんの区別をしなければならない。多音節の場合はいくらでも長い単語を作ればいいけど、単音節が基調の場合は音節内に区別的手段をたくさん持っている必要がある。音節数が少ないから声調などがあるのか、声調などがあるので音節数が少ないのか、それはどちらもいえません。とにかく単音節が基調となっている言語は声調など、1

音節内でたくさんの音の区別ができるようになっているのに対し、多音節が基調の言語では1音節内の区別はさほど多くない、というのは事実です。同じ単音節型でもビルマ語とベトナム語を比べると、ビルマ語は声調の数は少ないけれど、有気・無気の対立は *p, t, k, tʰ, s* と豊富です。これに対してベトナム語は声調の数は多いけれど有気・無気の対立は *t* にしかありません。もちろん母音や他の子音、末子音なども考慮しなければなりませんので単純には比較できませんが、1音節内部で行わねばならない区別がどれぐらいあるのか、というのはある程度限界があるといことは察せられます。なおタイ語では音節数が多い単語（外来語など）の場合、声調があまり意味を持たなくなる、ということがあるようです。

少し地域に目を向けますと、この声調というシステムを持つ言語は東は中国語から東南アジア大陸部に向って広く分布しています。有気・無気の区別を持つのは朝鮮半島から東南アジア大陸部、さらにはインドにまで広がっていることが分かります。いくつか系統が同じ言語群もありますが、言語の系統を超えて地域的に似たような特徴を共有している点はとても興味深いですね。

なお同じ東南アジアでも島嶼部の言語、例えばマレー語、インドネシア語、タガログ語（フィリピン語）は声調も有気・無気の区別も持っていません。

ビルマ語の特徴：類型の特徴

次に類型的な特徴をお話しします。ここでは文法的な特徴という風に考えていただいて結構です。日本語とビルマ語は音声・音韻は全然似ていませんが、文法的には非常によく似ています。例えば「てにをは」を持っていて、それが名詞類の後について他の要素との関係を示す。あるいは指示詞などは前から修飾する、などです。こういった特徴を「膠着的」と言います。膠着というのは膠（にかわ）でくっつけるという意味ですね。語彙的な意味を表す自立語に助詞類がまわりからペタペタとくっつく印象です。トルコ語やモンゴル語が典型的な膠着語と言われます。日本語も名詞が文内の要素となる場合は膠着的です（動詞類は屈折的）。

それから語順。ビルマ語は日本語と同様、SOV 型言語です。本当は V が文の末尾に現れればよくて、S と O との順序について制限はありません。ビルマ語の場合は O が V の直前に現れるのが最も自然ですので、SOV 型といって差し支えないでしょう。述語は動詞だけでなく名詞の場合もありますが、いずれにせよ文末に現れることだけが決まっていますので、私は「述語末尾型」と呼んでいます。

もちろん細かいところを見るとだいぶ違います。例えば数量詞遊離という現象が日本語にあります。「本 5 冊」といっても「5 冊の本」と言ってもいい。格助詞が付くと「本を 5 冊買った」という形さえある。これはビルマ語ではできません。「本 5 冊」の形式しかないんです。あるいは副詞類の現れる位置が日本語に比べて自由ではありません。日本語では「お菓子をたくさん食べた」といっても「たくさんお菓子を食べた」といってもいいわけですが、ビルマ語は前者の語順が普通で、後者の語順はあまり用いられません。

というように細かい違いはたくさんあるのですが、文法的な特徴は大枠においてかなり似通っているといっているでしょう。

「二つの言語が似ている」とは？

ここで「言語が似ている」というのはどういうことなのか、考えてみたいと思います。語彙が似ていたり、文法が似ていたり、あるいは文字が似ている、などというものもあるでしょう。ここでは「言語が似ているかどうか」という話なので書記用の文字の話は除外しましょう。

一般に「文法的特徴が似ている」ということは、日本人にとっては非常に感激するようですが、語彙が似ているというのはほとんど興味を引かないようです。例えば「名前」のことをドイツ語では「ナーメ」と言いますが、これについてはあまり感激しない。実はビルマ語でも *nàmè* (ナーメー) といいます。他にもビルマ語と日本語は例えば「鼻」は *hnà* (フナー) や「井戸」は *yèdwín* (イエドゥイン) が似ているという人もあるようです。私はビルマ語の発音をそれなりに正確に知っていますので、ビルマ語の音と日本語の音は全然似ていないと思うのですが、仮名だけ見ると似ているように見えるようです。ただこのように似ていることは「だからなんだ」という風に、語彙が似ていることは感動を与えません。偶然に似た例はいくらでもあります（例えば、英語の *owe* と日本語の「負う」、英語の *pay* とビルマ語の *pé* 「与える；払う」など）し、借用もありますから。

ところが日本語とビルマ語は同じ SOV だ、ということ、とてもビックリして感激する人が少なからずいます。日本人の多くは物心ついてから習う言語が英語であり、大学に入ると独仏などのヨーロッパ系言語だったり、中国語だったりするので、世界の標準は SVO なのだというような刷り込みがあるようです。SOV の日本語は何か「欠陥品」じゃないか、というようなことを何となく思っている。

日本語は文の最後まで聞かないと肯定か否定か分らない、とか、主語を省略してしまう、とか、英語と比べて欠陥品の証拠がたくさん出されている。だから「日本語は論理的か」などという本が出たりするんです。こういうタイトルは、つまりは「日本語は論理的でない」ということを主張したい雰囲気がありありと見て取れます。日本人はなぜか「劣っている」ということを言われるのが好きな面があるようで、こういう本は売れるのでしょう。

このように日本人は日本語が論理的でなくて標準的でないというコンプレックスが恐らくあって、それで日本語と同じ語順の言語があると必要以上に感動するのでしょうか。「私は英語がよくできなくて挫折した」という体験があったり、英語信仰みたいなものがどこかにあるんだろうと思います。

余談ですが、とても日本語が上手なタイ人学生と話したのですが、彼は中学・高校と英語やフランス語を勉強したのだそうです。英語やフランス語と同様、タイ語も SVO 型です。ところが大学に入って日本語を勉強したら、SOV 型でとてもビックリしたというのです。言語というのはすべからず SVO であって、SOV なんて語順があることを思い付きもしなかった、というようなことのようにです。

さて、SOV に感激する、という日本人独特？の感情の正体は、SOV 型言語が珍しい、という思い込みに依っています。35 年ぐらい前に外務省にお勤めの岡崎さんという方が本を出されまして、その中に朝鮮語（韓国語）を勉強した際の印象が述べられています。岡崎さんは日本語と朝鮮語の特徴を列挙し（語順の話ではないんですが）、両言語が「ただごとではない似方」をしているという印象を強くします。そして日本語と朝鮮語は絶対に関係があるに違いない、とほぼ断定しています。これに類する思い込みは、たとえばこの本についての Amazon のレビューにもたくさん見られます。「文法が似ているというのがこれは大変なことだ」、「偶然で似るはずがない」というわけです。

でも言語学の知識を持っていると、こういう印象論には騙されません。文法的によく似ているというのは実は結構あるわけです。そもそも S、V、O の組み合わせはいくつあるのでしょうか。考えてみたらわかりますけど、SOV、SVO、VSO、VOS、OVS、OSV のたった 6 種類しかないんです。そうか、6 分の 1 なのかって思わないでください。実は世界の言語の半数以上が SOV です。6 分の 1 ではないのです。我々が外国語として学ぶことのできる言語、英語はもちろん、それからフランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、それから、ポルトガル語、そういったヨーロッパ系の言語、それから中国語、そういった言語

がたまたま **SVO** ばかりだったというだけなのです。

ところで世界にどれくらい言語があるかご存じですか？ 大体6,000くらいあると言われています。繰り返しますとその半分以上が **SOV** 型です。無作為に言語を選んだら、半分以上の確率で **SOV** だということです。**SOV** 型言語が珍しいなんてとんでもない、統計的には最も標準的な言語パターンです。ただ話者数を考えると、恐らく **SVO** の方が圧倒的に多いと思います。

この6,000から **SOV** 型を引いた残りの言語のほとんどは **SVO**、つまり世界の言語は **SOV** と **SVO** でほとんど全部だということです。もちろん他の型も存在します。例えばタガログ語やアラビア語は **V** が一番最初に現れる **VSO** 型です。

感激の原因をもう一つ挙げるができるかも知れません。それは「基本語順は変わらない」という思い込みがあることです。多くの人がこの落とし穴にはまっていますが、実は基本語順というのは変わるんです。実例はいくらでもあります。インド・ヨーロッパ語族の中の親玉、権化みたいな言語といえばサンスクリット語ですが、これは **SOV** です。我々が知っているインド・ヨーロッパ系の言語はみんな **SVO** だから、このあたりはみな **SVO** なんじゃないかと思い込んでしまいそうですが、元々の語順は **SOV** だと考えられます。それからシナ・チベット語族の言語のうち、中国語とその諸方言は **SVO**、チベット・ビルマ系の言語はほとんど **SOV** です。ただチベット・ビルマ系のうち、唯一カレン系の言語だけは **SVO** 型です。どうもカレン系言語はモン・クメール系の言語との接触で **SVO** になった、と考えられているそうです。チベット・ビルマ系の言語で中国国内で話されている言語にチノ語というのがありますが、主節は **SOV**、関係節内の語順が **SVO** だそうです（なおドイツ語は主節では **SVO**、関係節内では **SOV** になると言われています）。言語変化はいきなりは起らないので3ヶ月後に日本語が **SVO** になるというようなことは考えづらいわけですが、といって「語順というのは絶対に変わらない」というのも幻想に過ぎないわけです。

また文法的な特徴というのは言語系統を超えて共有される場合がたくさんあるわけですが、そればかりでなく、複数の文法的特徴というのは、その理由はともかく、その分布には偏りが見られます。例えば **SVO** 型の多くは前置詞型ですし、**SOV** 型の多くは後置詞型です。

朝鮮語などとの関連でよく言われることのように、動詞の補助動詞化という現象が指摘されることがあります。例えば「あげる」という動詞が補助動詞化して《恩恵行為》「～てあげる」となったり、「おく」が《準備・結果状態持続》

「～ておく」を表すようになっていたりします。これは朝鮮語もそうなのだそうです。しかしビルマ語でも同じです。この二つはもちろん、他にも「見る」が《試行》「～てみる」となったり、「居る」が《進行》「～ている」となったり、とよく似ています。このような文法化にはある程度の傾向があります。例えば「あげる」が補助動詞化して恩恵行為を表すのは、「あげる」の対象がモノから行為に変わったと考えられます。だから特段珍しい変化ではないわけです。

話をまとめると、文法的に似ている、というのはさして珍しいことではありません。日本語の語順 SOV は英語の語順 SVO よりも標準的だといえるし、語順は変化し得る文法特徴です。

ビルマ語の中に見る言語の一般的特徴とそうでないもの：「分かっていること」は言わない

ビルマ語の特徴に「わかっていることは言わない」ということがあります。日本人の方であれば、わかっていることは言わないというのは納得いただけると思います。ビルマ語の baiʔ(お腹)+sʰà(ひもじい)=tè(事実)、これで立派な文です。誰も「私がお腹が空きました」とは言わない。これは情報量を適当にコントロールしているということなんだと思います。情報量をコントロールしているというのは、「私は」と言うと、特別に私について何か言い出すのかと思ってしまう、ということです。だから主語を言わない。書記言語の場合は発信者と受信者が同じ場を共有していないことが普通なので省略に関しては少し事情が違うでしょうけれど、特に会話の場合は会話の参加者が共有している場に伝達すべき情報のある部分を依存して、流通させる情報量を適切にコントロールする。そうしてコミュニケーション効率を上げていると考えていいと思います。以前に発話した語や内容、指示対象を何度も何度も繰り返し言うことは言う方もエネルギーの無駄だし、聞いている方もいちいちさっき言ったことと同一かどうかを頭の中で思い巡らせなければならない。とても非効率です。

そのように考えてみると、英語だって同じようなことをしています。ただ英語の文法的な制約によってまるまる省略することができない場合がありますので、日本語などで行われる省略の代わりに代名詞を使っていると見ることができます。英語の場合、文の意味を計算するのに語順に依存する割合が大きいので、省略ができないのでしょう。

ビルマ語だとさらにこのような現象がある。 $c^h i n$ (蚊) + $kai?$ (噛む) = $tè$ (事実)、これで蚊に刺された、という意味として解釈されます。日本語のように「蚊に刺された」と受身の形では言わない。そのような表現は不可能ではありませんが。またこの文では動詞の直前に $c^h i n$ 「蚊」があるので、理論的には $kai?$ 「噛む」の目的語としても解釈可能なのですが、我々が住んでいる世界においてそういう状況はまずあり得ない。いま考えている世界に「私」と「蚊」がいて、その間に「噛む」という関係が発生している。そのとき誰も「人間が蚊を噛む」ということを信じないんです。絶対に「蚊が人間を噛む」という状況しか想像できない。だからたとえ「人間が蚊を噛む」解釈する余地が文法的にはあったとしても、それを無視してこのように言っている、と考えていいでしょう。このように「どちらがどちらを」といった情報をヨーロッパの言語ではまず明示します。日本語もどちらかというと明示する方かも知れません。でもチベット・ビルマ系言語ではあまり標示しないようです。常識や状況の支えがあれば格助詞さえ省略（と見なしてよいかどうかは学問的に議論の余地があります）してもいい、というのは英語のような文法が当たり前だと思っている人にはきっと驚きでしょう。

こういう現象についていい加減だと思われるかも知れません。ちょうどこれと逆の現象を見てみましょう。典型的には英語の気候に関する文です。天気だ、とか、雨だ、というのに英語では形式的な主語 *it* と言わなければなりません。私たちにとってみると何とも無駄なことですよ。主語を省略したり目的語を省略すればいいところを、英語は省略できません。どんなことがあっても主語も言わなきゃいけないので、泣く泣く主語を言っている（と、私はちょっと僻みっぽく思ってるんですが）。

英語の場合は、とにかく主語が無いと話を始められないという大変制約の強い言語です。でも、そのかわり楽だと考えることもできる。なぜかと言うと、誰もが間違わない、常識に頼らずにこれが主語だなんて判断できるからです。フランス語もそうです。かつてフランス語は国際的な共通語で、国家間の条約文には正文として必ずフランス語というのが添えられていました。常識や状況に極度に依存しない、という点が便利だったのだと思います。それを「論理的」とすり替えるのは間違っていると思いますが、常識や状況にあまり依存しないでよいとなると、共通語としてはありがたいです。書記言語として文字の問題もあるでしょうけれど。

ビルマ語の中に見る言語の一般的特徴とそうでないもの：なぜ「ここはどこ？」 と言わないか

ところで英語で「ここはどこ？」と何というかご存知ですか？日本語で「ここはどこ？」というのは実に自然な文だと思います。どこもおかしいところはありません。ただ英語だと単純にこのような表現は取りません。

インターネットにはたくさんの翻訳サイトがあります。英語から日本語に翻訳することもできるし、日本語から英語もできる。最近では中国語やらヒンディー語やらまでできる。言語好きにはたまらないサイトですよね。残念ながらビルマ語はまだないようですけど。そのいくつかでこの「ここはどこ？」を英語に翻訳してみました。実に楽しいです、へんてこな英文ができあがって。

一番凄かったのは“Where is it here?”という翻訳文です。さすがにこれはダメでしょう。文法的にアウトです。よくこんな英文を産出して平気でいるなあ、と逆に感心します。ついでですので、この翻訳文を同じサイトで日本語に訳してみたら「それはどこここにありますか？」になりました。なんだか楽しい日本語ですね。日本語としては正しい文のような気がしないでもありません。もとの英文が間違っているのに。これはこれで楽しいのですが、出発点である「ここはどこ？」からは、僅か2ステップではるか遠くに行ってしまいました。

一番多い間違いは“Where is here?”というものです。これは日本語的な感覚からすると正しいような気がしますが、これは間違いです。これも同じサイトで日本語に翻訳してみたら「ここにどこにありますか？」となりました。先ほどの方が日本語として理解できるのは不思議な気がします。

さて正解は“Where am I?”です（異なる状況では別の答えもあり得ます）。“Where is here?”はなぜダメで、どうして“Where am I?”と言わなければならないのでしょうか。

その答えとしてこういうものがあるかもしれません。すなわち英語は人間中心に事態把握をするから、つまり「ここはどこか」というふうに「ここ」というのを客体化して世の中を見るのではなくて、人間（自分）がまづいる。それを中心として事態や状況を把握する、というふうに考えることができるかも知れません。それも悪くはない考え方かも知れませんが、無生物主語の他動詞構文が英語ではよく使われるので、何でも「人間中心」で済ますわけにはいかないでしょう。英語全体を通しての説明力に欠けます。それよりもうちょっと文法に則して考えて

みましょう。なぜダメかというと **here** とか **there** とか **where** というのは副詞という範疇だからなんです。これは英語だけではないでしょうけど、普通は副詞を主語にできません。単純にそれだからダメなんです。“Where is here?”には主語が存在しない。これって言われてみれば単純ですが、意外と本当は深い意味を持っているのかも知れません。

日本語の場合「ここ」とか「そこ」とか「どこ」というのは名詞です。だから「ここはどこ？」が適格な文になるのです。ではビルマ語ではどうか。ビルマ語でもこのような場所を表す指示詞は名詞に分類するのが普通です。というのも格助詞を伴うことがあるからです。ところが **dì**「ここ」とか **bè**「どこ」というのは、単独で主語になることができないので、「ここはどこ」というのは直接的に訳すことはできません。**dì**(この)=**nèyà**(場所) **bè**(どの)=**myô**(町)=**lé**(疑問)「この場所は何という町か？」とか、**qàdô**(我々) **bè**(どこ) **yau?**(至る)=**pì**(生起)=**lé**(疑問)「私たちはどこに至ってるの？」と表現しなければなりません。でもビルマ語の場合は品詞は名詞なので、ここでは別の説明が必要になります。

ビルマ語の場合、空間的な位置を示す語彙の品詞は名詞に分類されます。しかし主語（や目的語）にはなることができない。日本語の場合は名詞で、自由に主語にも何にもなることができる。英語は品詞が副詞に固定されているからそもそも主語になれない。ここで見えてくるのは、機能と品詞の対応が言語ごとに異なることもあるし、品詞が一緒でもそれぞれの言語で使われ方が異なる、ということです。言われてみれば当たり前のように聞こえますけれど、外国語を勉強しているときに「これは名詞です」とか「動詞です」と言われると瞬間に何か理解できているような気がしてしまいます。でも細かく見ると色んなところが違うんです。もちろん「主語です」などという言明も同じで、何となく自分が知っている言語、つまりは母語ですけれど、母語の分類がどの言語にも当てはまる気がしてしまっている。これが上記の「ここはどこ？」が単純に訳せない正体だと言っていいいでしょう。

ビルマ語の中に見る言語の一般的特徴とそうでないもの：形容詞はなくても困らない

もう少し話を進めてみましょう。形容詞はなくても困りませんというお話です。形容詞がないと困りそうな気がしますか？形容詞がない言語を想像してみたい

ただけますか？形容詞がなくなってしまうたらどんなことが起きるでしょう。

実はビルマ語に形容詞はありません。形容詞がないと困りそうですね。大学の講義でこのような説明をすると、ビルマ語以外の言語を専攻している学生たちがたいがい「じゃあ『美しい』とか『静かだ』って表現できないんですか？」などと訊いてくる。そんなわけではないでしょう。ビルマ語では日本語で言うところの用言は全て動詞になります。例えば「食べる」「ある／いる」「美しい」「静かだ」は、すべて＝*tè*(事実)という同じ接辞がついて文になりますから、品詞としてこれらを分ける必要はありません。ビルマ語では *sá*-「食べる」も最上級の形 *?ă-sá-zóun*「一番食べる(人)」にすることができます。

ところで日本語に形容動詞というのがありますね。この形容動詞、英語にはないのですが、これはどうしてなのでしょう？形容動詞はたぶん日本語独特のカテゴリです。たまたま形容詞っぽい意味を担う語群に二つの活用系列がある。だから形容詞の他に形容動詞というものをこしらえているのです。活用形が一系列しかないのなら、形容詞と形容動詞を設定する必要、というか意義はありません。ビルマ語の場合は形容詞的なモノも動詞的なモノも全く形式的に同じなので、形容詞というラベルを持つてくる必要はないのです。

外国語を学ぶときの教訓ですが、品詞というカテゴリーは絶対的なものではないし、それぞれの言語に必ずしも共通しない場合があるということです。日本語の場合、動詞というと動きを表しそうだし、形容詞というとか名詞の性質を述べているように思うのですが、それは多くの場合に当てはまるのですけれど、絶対ではありません。英語の形容詞が日本語の形容動詞であり、ビルマ語では動詞であって一向に構わないのです。

カテゴリーが絶対的でないという例を二つ挙げましょう。日本語と同じ系統である言語の琉球語の一部の方言では(これは本学の大学院生が調査してわかったことですが)形容詞の活用が動詞の活用に合流していったそうです。つまり形容詞独自の活用がなくなってしまったので結果的に形容詞がなくなっちゃったらしいんです。これも本学の先生からのインフォメーションなんですけれど、カナダで話されているネイティブアメリカンの言語には名詞と動詞の区別がないものがあるそうです。セイリッシュという言語です。名詞に過去を表す接辞がつくのだそうです。どういうことでしょうか？

動詞「行く」に過去の接辞がつくと当然「行った」という意味になります。それはわかりやすい。「彼」に過去がつくとどうなるか。なんと「元彼」になるん

だそうです。ああそうか、別に区別する必要ないよねという話です。「Aさんは私の彼だった」って言う時に、「彼」に過去形を付けてあげると「Aさんは私の元彼だ」になる。考えてみるとこの二つの文の意味内容は同じですね。このように名詞と動詞を区別する基準が立てられないんだそうです（根拠は他にもたくさんあります）。世界には色々な言語があるものですね。

ビルマ語の中に見る言語の一般的特徴とそうでないもの：「貸す」も「借りる」も同じでしょ？

ここからビルマ語（だけ）のお話になります。ここでは「借りる」と「貸す」が同じだという話をします。ṇà(私) sà?ou?(本) ḥṇá(賃借する)=tè(事実)は「私は本を借りた」という意味にもなるし、「私は本を貸した」という意味にもなります。「貸す」と「借りる」というのは全く違う事態ですから、これはちょっと驚きじゃありませんか？お金の貸し借りも同じで、ṇà(私) pai?sʰàn(お金) cʰí(賃借する)=tè(事実)は「私はお金を貸した」にも「私はお金を借りた」にもなります。これって困りそうですよね。本ぐらいならいいけど、お金の貸借りがどちらか分からないなんて。「貸してたお金を返してよ」って、いったい何を言っているのか訳分からなくなっちゃいそうですよね。

これにはもう一つ例があります。「教える」と「習う」が同じです。ṇà(私) myāmàzà(ビルマ語) ṭīn(賃借する)=tè(事実)「私はビルマ語を習っている／教えている」のどちらの意味にもなります。動作の方向が逆なのに同じ表現なのです。

でもビルマ語では全然問題ありません。例えば「図書館で本を」と言ったら「借りた」に決まっています。ミャンマーには貸本屋もたくさんあって「貸本屋で本を」なら普通は「借りた」って決まります、その人が貸本屋さんじゃない限りは。

昨日友達に本を貸したんだか借りたんだかよくわからないというそのあたりは微妙な気がしますが、実際にはこれ区別しなくて全然問題ないんです。状況が支えてくれますから問題ありません。それにまあ、借りたものを貸したと言い張る人もいないでしょう。

よくよく考えてみると「貸す」と「借りる」というのはある事態のどっちから見ただかということによって分けられる語彙です。「学ぶ」というのもそうです。「学ぶ」というのは、例えば今ここで皆さんが本当に意味のあることを学んでいるのか若干怪しいのですが、私がとりあえずここに立っていて何か教えていて、皆さ

んはそれを学んでいる。私の目から見たらここで私は「教えている」という立場になるし、皆さんから見たらこれは皆さんが「習っている」という立場になります。でもこれをずっと上のほうから見ると「習う」と「教える」は同じひとつの状況なんですね。「貸す」と「借りる」もそういう関係にあります。立場を排して考えてみると「貸す」と「借りる」というのは同じ状況をどちらの側面から見るかという話なのです。ですからこれは全然困らない。

確かに実際には分ける必要が出てくる状況はあります。ですので、この文に例えば「彼に」という句を付け加えれば当然「貸した」になるし、「彼から」という句を足せば「借りた」になります。ですから実際には区別しようと思えばできます。でも先ほど述べましたように、情報として必要のないものはどんどん省略していきますから、「本を借りた／貸した」だけ言うってことはいくらでもあるわけです。「教える／習う、教わる」についてもそうです。この文を例えば私が発したら、私が大学で教員やってるっていうことを分かる人であれば、ああビルマ語を教えるんだな、習ってるんじゃないんだなっていうことは分ります。こういった動作の方向性がそもそも指定されていない動詞というのがビルマ語にいくつかあって、そのうちの典型的なものをここでは紹介しました。

でも日本語だって結構いい加減ですよ。私の母親がイタリア語を勉強してたりするので、時々いいじって遊んでるんですけど、ビルマ語では「借りる」と「貸す」が一緒なんだよって言うと、腰抜かして「そんなところには行けない」って言われます。でも日本語で「開（ひら）く」というのは他動詞でも自動詞でもありますよね。「風で本が開いた」だったら自動詞だし「彼は本を開いた」だったら他動詞です。形の上での区別はありません。区別がないけど誰も困ってません。「本、開いて下さい」というのは本に命令しているんじゃないくて、その本を開くことのできる状況にある人に命令している文であることは明らかです。貸し借りの問題と自他対応とは違うといえは違うのですが、ひとつの動詞が同じ事態の別の側面を見てるっていうことは、それほどたくさんあるわけではないにせよ、日本語にもあるということです。だからビルマ語で「貸す」「借りる」が別に同じでも特に怪しむべきことじゃないんだよって言いたいんです。でもやっぱり「お金を貸した」のか「借りた」のかっていうのはちょっと気になりますね。

ちなみにこの例で分かるとおり *hjá-*「(本 etc.)を 貸す／借りる」と *cʰi-*「(お金 etc.)を 貸す／借りる」は違う語彙を使います。違いは分かりますか？本とか車などは *hjá-*を、お金とかお米とか醤油は *cʰi-*を使います。最近日本では醤油と

かお米とかお酒とかお味噌とかの貸し借りする人いないかな？私の母くらいはやっていたようですが、今はもういないでしょうね。この二つはどう違うかというと、借りたそのものを返さなければいけない貸し借りと、同じ価値のものを返す貸し借りという違いです。例えば千円の本を借りたとします。これに千円の別の本を返したら意味ないですね、それは返したことになります。でもお金の場合は千円札で借りたものを 500 円玉 2 枚で返しても構わないですね。等価物ならいい、というより、原則として同じ価値の別の物体にならざるを得ない。お米を借りてその同じお米を返せと言われても困ります。ビルマ語にこういう区別はあるけれども、方向については区別がない、ということです。こういうのを見ていると言葉を学ぶというのはなかなか一筋縄では行かないなあと思います。

ビルマ語の中に見る言語の一般的特徴とそうでないもの：殺しても死なないヤツ

本日の最後の話題、私が一番お伝えしたかったことです。「殺しても死なないヤツ」って物騒なタイトルにしてしまいましたけれど、内容も少し物騒です。次の文を見て下さい。nà(私) dī(この)=băgàn(皿) k^hwé(割る)=pà(丁寧さ)=tè(事実)というのはそのまま訳すなら「私はこの皿を割りました」という意味です。一見して同じ事態を指しているように感じられるのですが、実のところビルマ語の文が意味するところと、日本語が意味するところは全く異なります。

日本語で想像してみてください、この「私はこの皿を割りました」という状況を。多くの方は「うっかり皿を割ってしまった」という状況を思い浮かべるのではないのでしょうか。もちろんお皿を床に叩きつけるとか、ハンマーでかち割る、といった状況もないわけではないでしょうけど、手を滑らした、の方が普通に感じるだろうと思います。

ところがビルマ語には「意図的に割った」の意味しかありません。うっかり割った、の意味はどこをどうやってもこの文からは汲み取れません。だからこのビルマ語の文は奇妙な文なんです。

そしてもう一つ決定的な違いがあります。ビルマ語の文の場合、お皿が割れていない可能性もある、ということです。日本語の文「私はこの皿を割りました」の場合、お皿は絶対に割れていないとおかしいのですが、ビルマ語の場合は割れていなくてもこの文を発することができます。これがタイトルの「殺しても死なないヤツ」の意図です。確かに殺したのに、相手は死んでいない、という状況は

日本語の脳みそではどうやっても思いつきません。

これは一体どういうことなのか。仕掛けはこういうことです。日本語の意志動詞は、実は意志が明確ではない場合が多々ある。ただその動詞の表す行為の結果はほぼ実現していることを表します。これに対してビルマ語の場合、意志動詞ははっきりと意志の存在がある。しかしその動詞の表す行為の結果についてはなにも確定的なことは言っていないんです。行為はあった、けれども結果については不問なのです。

軍事政権時代のスローガンに *bădù*(誰) *k^hwé=k^hwé*(割っても)、*dô*(我ら) *mă*(否定)-*kwé*(割れる)というのがありました。直訳すると「誰が割ろうとも、我々は割れない」、つまり「不屈き者たちが国民の分裂を謀っても、我々は決して分裂したりはしない」という意味です。問題は *k^hwé=k^hwé*「割ろうとも」(繰り返しは譲歩節を表します) のところと、*mă*(否定)-*kwé*「割れない」の対比です。*k^hwé*はお皿の例で分かるとおり意志的他動詞「割る」、*kwé*は他動詞から気音が抜けた形で無意志的自動詞「割れる」です。問題は「割る」という行為は実際に生じているのに「割れる」という結果が生じないことです。日本語にはこのような世界はありません。「割った」ら絶対に「割れてい」ないといけません。

これについて私は大変怖い状況を経験したことがありました。私は大学に勤める前に入国管理局などで通訳をして暮らしていたのですが、そのときの体験です。軍事政権時代、ミャンマー人の難民認定申請が非常にたくさんありました。本国で大変な目に遭っている人たちが日本に来て「私は迫害されていますから、保護してください」と法務省に申し出る人たちがいるわけです。そういう人たちのための調査・インタビューを行うのですが、そのとき私が入って通訳をします。そのような通訳をやっているときに、まさにこの2つの違いが表面化した場面がありました。事実をかいつまんで言いますと、あるミャンマー人男性が「私はミャンマーでデモに参加した、そうしたらそこに軍隊がやってきて、それを無理やり解散させようとした、私は逃げたのだが、軍人に追っかけられて、銃剣で私を刺した」と発言したのでそういう風に通訳をした。そうしたら面接調査をしてる方が「どこを怪我したんですか、見せて下さい」と訊いたんです。その傷があれば確かに刺されたということがわかり、証言の信憑性が高まります。

ところがそのミャンマー人の答えは「いや、刺されていない」と言うんです。私はこの言語事実をたまたま知っていたので、そこでハッと気がついて「私の訳が間違っていました」とインタビューを中断して調査官に説明をしました。みな

さんはもうお分かりですよね？彼が言った「私を刺した」の意味するところは、あえて日本語で表現するなら「刺しかかった」あるいは「刺さんとした」というもので、「私」に向かってズイっというふうに銃剣を突く行為まではある、けれどもナイフの切先が自分に触れたかどうかはその証言では言ってないんですね。

これはその場で気づいたからいいようなものの、調査官が質問をしなかったら、そのまま素通りされてしまったことでしょう。あるいは（別に自慢話をしようというわけではないのですが）私がこのビルマ語の言語事実を知らなかったら「いや、刺されていない」と返答されたとき、その調査官の心証はどうなったでしょう。もし私が訂正をしなかったら、嘘の証言をしたと誤解されたでしょう。「軍人が私を刺した」って言っているながら「どこも怪我してない」って、何を言っているんですか？って。「私を刺した」というのは嘘ですね、と。するとそのミャンマー人の発言は全体的に信用できない、ということになりかねなかった。調査官は私の説明を聞いてもいまいち腑に落ちない様子でしたが。

でもこれは本当に怖いと思いました。皆さんいくつかの言語を勉強しておられるかと思うんですけど、動詞が通常の発話において結果を表すのか、表さないのか、確認したことはありますか？中国語はビルマ語と同じなのだそうです。「蛇を叩いて（蛇が）死ぬ」あるいは「蛇を殺して（蛇が）死ぬ」という言い方があります。中学や高校で漢文をやるときに出てくる「兼語文」ですね。ただ多くの場合「殴って、死ぬ」とか「叩いて、割れる」とか、前の動詞が具体的な手段を表していることが多いようです。中国語の場合はこのタイプの文はたくさんあるのですが、結果を言わないことはあまりないのかもしれないかもしれません。

ビルマ語の場合は結果（を表現する動詞）をほとんど言いません。だから例えば「叩く」とか「撞く」と言われると、日本人の頭の中では結果が見えてしまうけど、ミャンマー人の頭の中はそうではない、ということです。この「意志的に行った行為は生じたけれど、結果は生じていない」ということを日本語で表現しようとしてもできません。あえて言うなら「殴りかかった」でしょうか。でも「皿を叩きかかった」とかは言いそうにありません。この微妙な違いに気づくことは非常に重要だけれど、どうも普通に勉強しているだけでは気がつきようがありませんから、言葉の勉強って怖いなあと思うんです。

似たような現象として「アメリカに行ったことがありますか？」という文があります。日本語だと不自然ではありませんが、ビルマ語の場合、ここで *twá:-* 「行く」を使うとちょっと妙な感じになります。*twá:-* は「目的地に着いた」というこ

とを含意しないんです。目的地に向っていったことは間違いないのですが、至ったかどうかについては言及していない。だからビルマ語でこのような意味を表現しようとする場合は *yau?*-「至る」を使わなければならないのです。

「殺しても死なないヤツ」に話を戻します。いま私が指導しているビルマ人の大学院生がいて、ゼミで彼女を含めて日本人の学部生と話をしていた時のことなんですが、ビルマ語はこういう他動詞って結果を含まないんだよね、「殺したけど死んでない」は論理矛盾を起さないんだよね、というようなことを私が言ったのです。そうしたらそのビルマ人学生が「え！だって死ぬまで殺さないと死なないでしょ」って言ったんです。その発言に日本人の学生はみな仰天していました。そりゃそうでしょう、日本語の頭では到底思い付きませんよ、「死ぬまで殺す」という表現など。

1988 年にミャンマーで民主化運動が盛り上がったとき、時の権力者ネーウインが「(デモ隊に対して) 弾が命中するように撃つ」と言い放って世界を驚愕させましたが、考えてみるとビルマ語としては何の不思議もない表現です。「撃つ」だけだと「弾が当たる」という結果を表さないのですから。「命中するように」と言わないことには脅しにならないわけです。

もう一つ例を出します。中学生の頃の話でうろ覚えなのですが、国語の教科書に「ドラヴィダ系の人はお皿を割っても「お皿を割った」とは決して言わない、「このお皿は今日割れる運命にあった」と言う。さもないと責任を取らされるからだ。」といった内容の文章が載っていました。当時は漠然とそんな世界があるのだな、と思っていましたが、今思い返してみると、これって言語の問題なんじゃないかと思ひ当たるんです。今となっては本当かどうかは確かめようがないのですけど。

結果を論理的に含意するかどうか、というのは動作の意志性が明確かどうかということと関係あるのではないかと思っています。日本語の場合、意志動詞であっても意志性が不明瞭ですね。先の例で言うと「割った」は「わざと割った」のか「うっかり割った」のかは分からない。ビルマ語の場合は「割った」といったら「わざと割った」に違いありません。意図が明確なのです。そのかわり過去の形で使っても、言及しているのは意図的に行われた行為だけであり、結果についてはなにも言わない。ちょうど日本語と逆になっていると思われます。

日本語の世界で生きている我々は、言語表現の中にさりげなく「結果実現」が織り込まれていて、行為が行われたら結果が生じるのは当然、という世界に生き

ていることになります。これは言葉を発する上での前提なんですけれど、そういう前提があるということすら知らない、あるいはそうでない世界があることなど想像が及ばない。皆さんが勉強されている言語がどのような言語かは分かりませんが、日本語のこの「常識」を無意識に適用させてもこれまでは問題が無かったのだろーと思います。でもそれは問題が無かったのではなくて、問題を発見できなかっただけかも知れない。ひとつの言語を本当の意味で知るには、もちろん文化を知ったり、習慣を知ったり、歴史を知ったり、そういうことだつてとても重要なんですけれど、それだけではダメで、意外なことに語彙とか文法規則とか、私たちが何気なく当たり前のように受けて入れているそういった部分に実は私たちに见えていない区別があつて、それが原因で誤解を招いているようなことがお互いにあるのかもしれない。そういう怖さについて、今日は私が勉強しているビルマ語を例にとつて紹介いたしました。どうもありがとうございました。

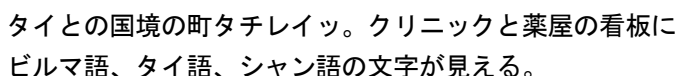
謝辞

チノ語については神戸市外国語大学の林範彦先生、琉球方言については本学大学院・博士後期課程所属の麻生玲子さん、セイリッシュ語については本学アジア・アフリカ言語文化研究所の渡辺己先生、中国語については本学大学院の三宅登之先生にご教授いただきました。ここに感謝申し上げます。また以下の文献を参照しました。(順不同)

参考文献

- 麻生玲子 (2010) 「南琉球八重山波照間方言の「形容詞」認定に関する問題」、日本言語学会第 141 回大会予稿集、pp.242-247.
- 渡辺己 (2008) 「スライアモン・セイリッシュ語の名詞と動詞の分類について」、日本言語学会第 136 回大会予稿集、pp.346-351.
- 長坂覚 (1977) 『隣の国で考えたこと』日本経済新聞社。(1983 年に岡崎久彦(本名)名義で中公文庫刊、2006 年に『なぜ、日本人は韓国人が嫌いなのか』に改題しワックより刊行)

通訳がパニックに陥るとき



... * ●—————● * ...

しかしいくら知識を増やしてもいかんともしがたいケースはある。その一つが方言である。標準語だけでも大変なのに、方言となるとその困難は並大抵ではない。ビルマ語には標準語のほかに大きく4つの方言があるとされるが、実務上これにさらにビルマ語が母語ではない少数民族が加わる。彼らの発音はときに標準の音とは似ても似つかず、またビルマ語能力が不完全なこともしばしばである。

(こちらもだが)。

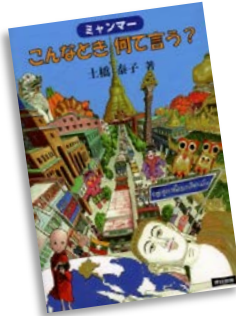
ラカイン (ミャンマー西部の州) 族男性の通訳をしたときのこと。ラカイン方言はビルマ語の古い音を残していることで知られている。彼の話す言葉に訛りはあるものの、しばらくの間は何とか通訳できていた。ところが途中、どうしても地名が聞き取れない。彼の発音は「リングン」。だが「リ」がどうもビルマ語らしからぬ音である。

何度発音を聞いても分からないので書いてもらったところ、なんと首都 (当時) 「ヤンゴン」 のことであつた。旧英名ラングーン **Rangoon** に残っているように初頭音は元々 **r** なのだが、標準方言で **r** は音変化を起こして **y** になっている。彼の発音はいわばかつてのビルマ語の響きなのかも知れない。

知識としては知っていても、その音を聞いたのが初めてだったので私は見当さえつかなかった。ヤンゴンとわかって私もビックリだが、首都の名前が分からない通訳に彼もさぞ心細く思ったに違いない。

ビルマ語・ミャンマーを知るための3冊

・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・



土橋泰子. 2013. 『ミャンマー こんなとき何て言う?』. 連合出版.

本学の非常勤講師を長く務めた筆者によるビルマ語の入門書。ビルマ語もさることながら、そこここに語られているエッセイがミャンマー文化への理解を深めてくれる。

... * * ————— *

* * ...

大澤幸子. 2013. 『聞いて丸暗記! ミャンマー語入門』. 実業之日本社.

ビジネスでの実用を主眼に置いたビルマ語会話入門書。



... * * ————— * * ...



田村克己、松田正彦（著・編）. 2013. 『ミャンマーを知るための60章』. 明石書店.

現在の日本のミャンマー研究者を一堂に集めて編纂されたミャンマーの総合的な解説書。

... * * ————— * * ...

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる』

2012 年 10 月 16 日 第 2 回

「国語になっていない公用語 ～ガリシア語～」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

川上 茂信

こんばんは、川上と申します。今日は『言葉とその周辺をきわめる』の 2 回目として、ガリシア語のお話をしたいと思います。タイトルは「国語になっていない公用語」なのですが、国語というものが何なのか分からないと、国語になっている・なっていないということも分かりませんので、そのあたりからお話したいと思います。



【図 1】スペインの諸言語（坂東&浅香 2005: xvi）

スペインの諸言語：スペインにはいくつ言語があるか

私は、今年（2012 年）4 月から 9 月まで、ガリシア語が話されているスペインのガリシア地方というところに半年行って参りました。スペインというと、もしかしたら暑いところというイメージをお持ちの方も多いかと思いますが、地方によってはそうでもありません。地図でいうとスペインの左上の隅がガリシアです。スペインの夏は、真ん中や南の方はもちろんものすごく暑くなりますが、緯度的に言うと実は、スペインの最南端のあたりがだいたい東京と同じくらいなんです。国の真ん中辺りに首都のマドリードがありますが、これは緯度で言うと盛岡くらい。私が行ってきたサンティアゴ・デ・コンポステーラという街は、北海道の南部、札幌よりは南だけでも函館よりは北といったところにあります。緯度だけで気候が分かるわけではありませんが、スペインの特に北部は夏でも結構涼しいところがあるのです。

スペインは気候的に多様ですが、言語的にも多様な国です。ここで最初のポイント、スペインにはいくつ言語があるかという話になります。今スペインでどれだけの言語が話されているのかという点について情報を見ると、多いのは4つあるという答えです。今日お配りした資料には、最初にスペイン語（スペイン語では **español**）、それから括弧してカスティーリャ語（**castellano**）と書いてあります。これは違う名前ですが同じものを指しています。これがスペインという国家の公用語です。それを一応、タイトルの「国語」ということにすると、スペインの国語はスペイン語である、ということになります。資料ではカスティーリャ語という言い方を主にしていますが、習慣としてスペインで話されている他の言語とスペイン語を比べるときには、あまりスペイン語とは言わずに、カスティーリャ語ということが多いので、プリントでもそういうふうになっています。実際にはどっちを使っても同じことです。

次に、カタルーニャ語があります。これは、スペイン北東部、カタルーニャ地方で話されています。実際には、カタルーニャ自治州をはみ出して、より広い範囲で話されています。日本のニュースでのスペインは、最近では EU の経済危機の文脈で、普段よりは登場回数が多い印象がありますが、その状況も絡んで、今カタルーニャ自治州がスペインから独立しようかという話が出たりもしているところですね。本当に独立するかはわかりませんが、今月（2012 年 10 月）自治州の選挙があって、その結果次第で独立を問う住民投票をやろうと言ってい

る人たちがいて、独立志向が最近急激に高まっている地域です。その背景として、カスティーリャ語とは違うカタルーニャ語が話されている、独自の歴史のある地方だということがあります。

4つのうちの3つ目として、バスク語が挙げてあります。バスク語はスペイン北部と、さらにフランス側でも話されています。これはスペイン語とは似ても似つかない、まるで系統の違う言語で、非常に難しい言語とされています。落ち着いて見てみれば日本人にはそんなに難しくないかもしれません。ここも独立志向があって、最近までその独立を旗印にしたテロ組織が活動していたのがようやく解散するという話になっています。

そして4つ目が、今日のテーマになるガリシア語です。ガリシアも一つの自治州になっているんですけども、今言ったカタルーニャやバスクと比べると独立志向もそれほど高くありません。独立を標榜する人たちはいますが、社会的にはほとんど影響力はありません。そういう地域ですが、話される言語も、もしかしたら今言った4つの中でカスティーリャ語に一番近いかもしれません。

さて、多い答えが4つだと言いました。つまり他の答えもあるわけです。資料には『スペインとポルトガルのことば』という本の中にある地図を載せておきました(図1)が、ここには言語の名前が10書いてあります。このうちポルトガル語とミランダ語はポルトガルで話されているので、これを除くとスペインでは8つの言語が話されているという勘定になります。一体何語があるのか見てみると、まずカタルーニャの南、バレンシア州にバレンシア語があります。カタルーニャの西にはアラゴン州があり、そのごく一部ですが、アラゴン語が話されています。それから、バスクとガリシアの間には、この本の地図の言い方ではアストゥリエス語、普通はアストゥリアス語という言語があります。さらに、カタルーニャの中にアラン語というがあります。そういうことで、最初に挙げた4つプラス、バレンシア語、アラゴン語、アストゥリエス語、アラン語で、合わせて8つということになるわけです。では4つと8つでどっちが正しいのか、と言いたくなるかもしれませんが、言語の数え方というのは実は言語学者によって色々違ってきますので、どの数え方が客観的に一番正しいということはないのです。7つという人もいますし、8よりも多く数える人もいます。実は、ガリシア語も数え方の問題を抱えている言語のひとつです。

スペインの諸言語：スペインの公用語

先ほど、スペイン語、つまりカスティーリャ語がスペインという国の公用語だと言いました。国全体の公用語は1つだけです。資料に、現在のスペイン憲法の文章があります。スペイン語がお分かりの方はちょっと見て下さい： *El castellano es la lengua española oficial del Estado.* は「カスティーリャ語は国家の公用スペイン語である」ということで、ちょっと変な日本語ですが、実を言うと、原文もちょっと変なスペイン語なのでそのまま訳してあるのです。カスティーリャ語はスペインという国家の公用語で、この言語を知る義務と使う権利があるととなっています。

憲法のその次の条文にはカスティーリャ語以外の言語もそれぞれの自治州で決めれば公用語にできます、という規定があります。この憲法は1978年にできたのですが、その憲法をうけて自治州が生まれていき、現在17の自治州に分かれています。スペイン語以外の公用語は要らないという自治州は、自治州の公用語を決めていないのですが、自治憲章の中で公用語の規定を設けた自治州もあります。それがカタルーニャ、バレアレス、バレンシア、バスク、ナバラ、ガリシアです。

カタルーニャ州は真っ先に自治憲章を作ってカタルーニャ語を公用語にしました。そして2006年に自治憲章を改正して、そのときに非常に狭い範囲で話されている言語ですが、アラン語も公用語になりました。それから地中海にあるバレアレス諸島、これもひとつの自治州で、カタルーニャ語を公用語にしています。そしてカタルーニャの南隣にあるバレンシアですが、これはバレンシア語というのを公用語にしました。しかし、このバレンシア語というのは大多数の研究者の意見ではカタルーニャ語の一種、つまりカタルーニャ語の方言だというふうに考えられています。名前が違うだけだと。でもバレンシアの言葉はカタルーニャ語とは別で、バレンシア語という別の言語だと言っている人たちもいるので、その人たちにとっては別の言語ですね。それからバスク州のバスク語。その隣にあるナバラ州の一部地域でもバスク語が公用語になっています。そしてガリシアではガリシア語が公用語です。これらはそれぞれの自治憲章の中に明記されています。言語の名前が挙げられていて、〇〇語はこの自治州で公用語である、という具合です。ただし、全てカスティーリャ語プラス〇〇語という言い方です。

先ほど見た言語の中では、アラゴン語それからアストゥリアス語（あるいはア

ストゥリエス語）は、それぞれの自治州で公用語になっているわけではありません。憲法には、いろいろな言語が話されている状況の中、言語的な多様性は尊重しましょう、文化遺産としてしっかり守っていきましょうという規定があります。それに沿って、例えばアストゥリアス語は公用語にはなっていないけれども、自治憲章の中でしっかり守っていきましょうとされています（憲章ではバブレという名前が使われています）。

ここまでで確認できたことは、スペインの言語には、法律上のステータスが異なるものがあるということです。最初にスペインには言語が4つと言われていたのは、カスティーリャ語（スペイン語）、カタルーニャ語、バスク語、ガリシア語でしたが、これらは自治州の公用語になっている言語です（ここではバレンシア語はカタルーニャ語の一種と考え、比較的最近になって公用語として認められたアラン語を除いています）。

自治州の公用語になっている言語というのは、もちろんいきなりポッと公用語になるわけではなくて、言語としてのそれなりの歴史があるのです。公用語になっていないアストゥリアス語やアラゴン語は、特に書き言葉が発達していませんでした。最近ではこれらの言語を振興しようという動きがありますが、公用語になっている言語とは、やはり歴史的な差があります。しかし、将来アストゥリアス語なりアラゴン語なりを、もっとみんなが使うようになれば、スペインの言語は8つだとか7つだとか9つだとかが常識になるかもしれません。

ガリシア語とは：系統

本題のガリシア語に入りましょう。系統的にはガリシア語はラテン語が変化した言語、ロマンス諸語のひとつです。元のラテン語からそれぞれ、カタルーニャ語、アラゴン語、カスティーリャ語、アストゥリアス語、そしてガリシア・ポルトガル語が分かれたのです。ガリシア語とポルトガル語は、ラテン語から直接分かれたのではなくて、元々はひとつの言語（ガリシア・ポルトガル語）だったというふうに考えられています。地図で見てもわかるとおりに、イベリア半島の西側、ポルトガルとガリシアを合わせた西側の部分、そこで話されていた言語があり、後になってポルトガル語とガリシア語になったということです。分かれたのは14世紀くらいだと考えられています。

このような経緯があるので、ガリシア語がポルトガル語とは別の言語だと認め

られるようになったのは、実はそんなに昔のことではありません。今もまだガリシア語はポルトガル語の方言だという人もいます。ちょうど、カタルーニャ語とバレンシア語の関係と似たものが、ここにもあるわけです。ガリシア語はポルトガル語とは違う、という人たちと、いや、ポルトガル語の一部だ、という人たちがいて、これが単に科学的・学術的な論争で終わればそれだけの話なのですが、実際には政治的な立場が関係していて、一筋縄ではいかない状況です。

ガリシア語：ポルトガル語とどのくらい似ているか

ポルトガル語とガリシア語とカスティーリャ語がどのくらい似ているかを比べてみます。スペイン語とポルトガル語は似ていると言われていて、見方によっては一体本当に別の言語なのかと言ってもいいくらい似ている。ネイティブ・スピーカー同士だとなんとか通じ合ってしまうという話もあります。そこにガリシア語を入れて比べるとどうなるのでしょうか。

数の言い方を 1 から 10 まで、左にポルトガル語、真ん中にガリシア語、そして右にカスティーリャ語を置いてみると、全体にかなり似ていますね（表 1）。しかも、ポルトガル語とガリシア語の方がやっぱり似ていて、カスティーリャ語だけ違うというところがあります。

【表 1】三言語の 1 から 10 まで

	ポルトガル語	ガリシア語	カスティーリャ語
1	um, uma	un, unha	uno, una
2	dois, duas	dous, dúas	dos
3	três	tres	tres
4	quatro	catro	cuatro
5	cinco	cinco	cinco
6	seis	seis	seis
7	sete	sete	siete
8	oito	oito	ocho
9	nove	nove	nueve
10	dez	dez	diez

1はポルトガル語が **um, uma**、男性形と女性形があります。ガリシア語も **un, unha**、男性形と女性形があります。カスティーリャ語も **uno, una** と2つあります。2になると、ポルトガル語は **dois, duas**、ガリシア語が **dous, dúas** で男性形と女性形があります。カスティーリャ語は区別がなく **dos**、ここはポルトガル語とガリシア語が似ていますね。3は **três, tres, tres** で同じ。4は **quatro, catro, cuatro** で、これは寧ろ、カスティーリャ語とポルトガル語が似ていて、ガリシア語だけちょっと違います。5と6は同じ。7、8、9、10はポルトガル語とガリシア語が同じで、カスティーリャ語は違う。ただし、綴りが同じでも発音が少し異なる場合があります。5の **cinco** の最初の音と **dez, diez** の最後の音は、ガリシア語とカスティーリャ語では [θ] で共通ですが、この音はポルトガル語にはありません (**cinco** の最初が [s] で **dez** の最後は [s] または [ʃ])。

文法的な面も見てみましょう (表 2)。まず、定冠詞です。「本」は、ポルトガル語では **livro**、ガリシア語やカスティーリャ語では **libro** ですが、それに定冠詞をつけると、それぞれ **o livro, o libro, el libro** となります。ポルトガル語とガリシア語は **o** で綴りは同じ、カスティーリャ語は **el** で違う形です。それから、人称代名詞 1 人称単数形の「私は」はポルトガル語とガリシア語は **eu**、カスティーリャ語では **yo**、これも明らかにポルトガル語とガリシア語の方が似ています。3 人称単数女性形の「彼女は」もやはりポルトガル語とガリシア語では **ela** で同じだけれども、カスティーリャ語では **ella** という風にちょっと違います。さて、「私は～だ」という、動詞が活用している部分はどうかというと、ちょっと微妙です。ポルトガル語は **sou**、ガリシア語では **son**、スペイン語では **soy** で、みんな似ているけどちょっとずつ違いますね。

【表 2】三言語の表現

	ポルトガル語	ガリシア語	カスティーリャ語
その本	o livro	o libro	el libro
私(男)は日本人だ。	Eu sou japonês.	Eu son xaponés.	Yo soy japonés.
彼女はガリシア語を話す。	Ela fala galego.	Ela fala galego.	Ella habla gallego.

それから、「話す」の 3 人称単数形はポルトガル語とガリシア語が **fala**、カスティーリャ語では **habla** です。語源的には同じラテン語の単語から来ているので

すが、変化のしかたが違うのでこんなに見た目が違うようになってしまいました。

「ガリシア語」も、ポルトガル語とガリシア語では **galego** ですが、カスティーリャ語では **gallego** で、これは「彼女」の場合と同じで綴りの上では **l** がひとつかふたつかという違いですね。

このように、3つの言語は良く似ていますが、ポルトガル語とガリシア語がより近いということが分かります。しかし、ガリシア語とカスティーリャ語の方が似ている点もあるのです。ひとつには、ガリシア語はスペインの中で話されている言語ですから、カスティーリャ語の影響が避けられないということがあります。何世紀もの間、カスティーリャ語とガリシア語は同じところで使われていて、言語接触の状態にあるわけです。

例えば「おはようございます」はどう言うかという、基本的には3言語とも同じで、「良い日をあなたが持ちますように」という言い方をします。ポルトガル語では **Bom dia** です。文字通りには「良い (**bom**) 日 (**dia**)」。一方カスティーリャ語では **Buenos días** で、なぜか複数形で言うのです。なぜなのかについては色々説があるのですが、決定的なことは分かりません。さてそれでガリシア語はどうかというと **Bos días** で、複数形です。つまり、カスティーリャ語と同じパターンですね。半年滞在して聞いていると、単数形で言っている場面にも時々遭遇しましたので、絶対ではありませんが。

「ありがとう」は、ポルトガル語では **Obrigado** これは男の言い方、自分が女性であれば **Obrigada** になりますけれども、それに対して、カスティーリャ語では **Gracias** という言い方をします。ガリシア語では、カスティーリャ語によく似た **Grazas** です。

ガリシア語：音声

インターネットのテレビで実際の音を聞いてみましょう【音を出す】。最初がポルトガル語、次がカスティーリャ語、最後がガリシア語でしたが、ガリシア語はどちらに似ているように聞こえましたか？さきほど文字で比べて、ポルトガル語の方が似ているという説明をしましたが、聞いた感じとしては、カスティーリャ語の方が似ていますよね。ただし、テレビでニュースを読むアナウンサーの発音はカスティーリャ語に近くて、カスティーリャ語の喋り方をガリシア語でやっているようなところがあります。フォーマルなガリシア語については、カステ

ーリャ語がモデルになっている部分が少なからずあるのです。ですから、似てるとは似てないというのも、いろんなレベルで考えなければならないことになります。

音声面で、ポルトガル語とガリシア語に共通していて、カスティーリャ語とは異なるものとして母音を見てみます。カスティーリャ語は母音の数が5つで、日本語と発音上の微妙な違いはありますが、数は同じです。日本人学習者にとっては有り難いですね。それに対して、ポルトガル語やガリシア語では、母音は少なくとも7つあります(ポルトガルのポルトガル語は8つと言った方がいいのかもしれませんが、少なくとも7つ)。カスティーリャ語や日本語と異なる点は、エとオに2種類ずつあるということです。狭いエ [e] と広いエ [ɛ]、それから、狭いオ [o] と広いオ [ɔ] があります。例えばポルトガル語とガリシア語では、beber「飲む」という動詞で「私が飲む」bebo [e] と「彼が飲む」bebe [ɛ] でbeのeの音が変わります。一方カスティーリャ語でも「私が飲む」はbebo、「彼が飲む」はbebeですが、エはひとつしかありませんからbeの発音はどちらも同じです。オについても同じことが言えます。たとえばcorrer「走る」という動詞では、綴りの上では3言語とも「私が走る」はcorroと「彼が走る」はcorreになります。しかしポルトガル語とガリシア語ではcorroのcoは狭いオ [o]、correのcoは広いオ [ɔ] という区別があるのに対して、カスティーリャ語ではそういう違いはなくて、どちらのcoも同じ音で発音します。

それから、ポルトガル語では区別するけれどガリシア語で一緒になってしまう音もあります。「低い」という単語は、ポルトガル語はbaixo、ガリシア語はbaixoといってxのところは同じ音 [ʃ] です。それに対して「人々」はポルトガル語でgenteとなつて、最初の音は [ʒ] です。ところがガリシア語ではxenteで [ʃ] で始まります。ポルトガル語では有声音の [ʒ] と無声音の [ʃ] が区別されますが、ガリシア語には [ʒ] がなくて、たいてい [ʃ] になります。ちなみにカスティーリャ語ではbajoとgenteでどちらも[x]という音になります。具体的な音は異なりますが、摩擦音に有声と無声の区別がないという点でガリシア語とカスティーリャ語が似ているということになります。

もう少し、ガリシア語とカスティーリャ語に共通する点を見てみます。例えば「広場」ポルトガル語でpraçaでçaの子音は普通のsの音です。ガリシア語のprazaとカスティーリャ語のplazaのzaは英語のthのような[θ]で発音します。ただし、この例ではlとrの違いがあつて、ポルトガル語とガリシア語がpr、カスティーリャ語がplですから、単語全体で見れば、ガリシア語はポルトガル語

とカスティーリャ語の両方に似ているわけです。

また、ポルトガル語には **b** と **v** の区別があります。だからワインは **vinho** というふうに唇を噛みますけれども、ガリシア語とカスティーリャ語にはこの音はなくて、**v** で書いても **b** と同じ発音です。ガリシア語では **viño**、カスティーリャ語では **vino** です。なお、母音間の子音はポルトガル語 **nh** とガリシア語 **ñ** が **[ɲ]** で同じでカスティーリャ語の **[n]** とは異なります。

それから、ポルトガル語には鼻母音がありますが、ガリシア語とカスティーリャ語にはありません。「心・心臓」はポルトガル語で **coração** ですが、この最後のところ、サウンという鼻にかかる音 **[sẽũ]** になります。これはガリシア語とカスティーリャ語にはなくて、**corazón** の最後は **n** の子音として発音します。ガリシア語では **[θon]**、カスティーリャ語では **[θon]** で少し違いますが、ポルトガル語の **coração** と比べれば似たようなものです。

このように、ガリシア語とカスティーリャ語の共通点も少なくありません。常識的には、やはりスペインの同じところで使われているんだから似てくるのは当たり前だと考えられるのですが、学問的に影響関係を証明することは実はかなり難しいのです。そこで、ガリシア語とカスティーリャ語が似ている点について、それをカスティーリャ語の影響と考えるかどうかは研究者によって意見が異なります。ガリシア語とカスティーリャ語がたまたま同じ変化をたどったと主張する人も多いのです。

標準ガリシア語の成立：現代標準語成立までの流れ

現代の状況に至るまでの歴史を振り返っておきましょう。中世、ガリシア語は非常に盛んに宮廷で用いられていました。もちろんガリシアでは普通にガリシア語が使われていたわけですが、ガリシアの外でも使われることがあったのです。13世紀から14世紀にかけて、詩を作る言語として重用されていました。その例として13世紀にカスティーリャ王国のアルフォンソ10世という王様が編纂した聖母マリアを称える讃歌集があります。メロディーの記録も残っていて、今でもいろんな人がそれを演奏していてCDもたくさん出ています。当時、南仏のいわゆるプロヴァンス語が詩作の言語としてよく用いられていましたが、ガリシア語も似たような機能を果たしていたのですね。

ところが16世紀以降、ガリシア語は書き言葉として衰退してしまいます。普

通に生活している人たちがしゃべるという意味ではガリシア語が使われ続けていたけれども、書き言葉はカスティーリャ語に取って代わられてしまうのです。ここが、ガリシア語とポルトガル語と、兄弟でも随分違うところで、ポルトガル語がポルトガルという国の言語として発展していくのに対して、ガリシア語は取り残されてしまう。

19 世紀になると、ロマン主義の風潮とナショナリズムの高まりの中、ヨーロッパ各地で、自分たちの言語をしっかりと守って、それで例えば文学も書こうという動きが起こります。スペインではカタルーニャ語の復興や、バスク語の振興運動が起こります。ガリシアでも文芸復興の動きがありました。ひとりだけ有名な詩人の名前を配布資料に書いておきました。ロサリア・デ・カストロ Rosalía de Castro という女性で、1837 年から 1885 年で長生きはしませんでしたけれども、ガリシア文学にとってはなくてはならない存在です。サンティアゴ・デ・コンポステーラの近く、パドロンという街で生涯を終えました。彼女が住んでいた家が記念館になっています（図 2）。



【図 2】ロサリア・デ・カストロ記念館

廃れてしまった書き言葉を復活させる、しかも質の高い文学として復活させるのは非常に難しいということが想像できますが、それがロサリアの作品によって始まるのです。1863 年に彼女がガリシア語で書いた『ガリシアの歌』という詩集が出版されて、それがガリシアの文芸復興のスタートラインだと言われています。その後いろんな詩人が出て、さらには詩以外の文章も書かれるようになります。実際には、それ以前ガリシア語で書くことが完全にゼロだったわけではなくて、18 世紀の終わりくらいから少しずつ新聞記事などでガリシア語が書かれる

ようになっていたのですが、質の高い文学が書かれるということは重要で象徴的な意味を持っています。文芸復興は、その点で非常に大きな出来事だったのですね。

そして 1931 年に、スペインはそれまでの王制から第二共和制に移行します。共和国の枠組みの中で、ガリシア語をガリシア地方の公用語にするという動きが本格化しますが、結果的には 1936 年に内戦が始まってしまい、実現には至りませんでした。カタルーニャでは内戦が始まる前にカタルーニャ語が公用語になり、短い期間ではあるけれども実際に公用語として使われました。ガリシアの動きはそれより遅かったので、内戦によって実現が阻まれたのです。内戦後のフランコ体制では、かなり徹底的にカスティーリャ語以外の言語が弾圧されて、公的な場で使うなどとはとんでもない、もちろん学校で教えたりはしない、ということになります。これはガリシア語に限らず、カスティーリャ語以外の言語が全てそういう目に遭ったのです。

1975 年にフランコが亡くなり、民主化が達成され、先ほど紹介した憲法ができ、それにしたがって自治州が公用語を定めるという道筋ができました。これは、第二共和制下、地方言語の公用語化が実現していたという歴史があり、それを復活させるということでもありました。ガリシアの場合、自治州の憲章ができ、ガリシア語が公用語になったのが 1981 年のことです。

ところで、公用語であるからには例えば公文書はその言語で書かなければいけませんよね。ということは、ちゃんと書き方が決まっていなといけません。綴り字の規則などが決まっていなと正式な文章として書くのは難しい。ところがガリシア語の場合、公用語になったのは 1981 年ですけれども、その前に準備段階があるにせよ、綴り字の規則を定めた正書法が提案されたのが 1982 年のことです。それまでは皆好き勝手に書いていた、という言い過ぎですけど、統一された書き方がなかったのです。もちろん主要な流れはいくつかあったのですが、公式の綴り字が決まったのがこんなに遅いということは、ガリシア語が標準語として機能し始めたのも遅いということです。

標準ガリシア語の成立：標準化に対する 2 つの態度

そこで、標準化に対する 2 つの態度という話をします。ガリシア語はポルトガル語の一種、つまりポルトガル語の方言だと考える人たちにとっては、書き方を

ポルトガル語に似せるべきだ、ポルトガル語をモデルにして綴りを決めなければいけないと言います。一方、ガリシア語とポルトガル語は別の言語だと考える人たちは、特にポルトガル語風にならうとはしません。ロサリア・デ・カストロを含めて、19 世紀以来書かれてきた伝統が一応ありますから、基本的にはそれに従おうと言います。しかし、簡単に想像できますが、この伝統はカスティーリャ語の書き方に近いのです。そして、どちらが結局正式なものとして認められたかという、後のほうです。つまり、独立した言語として、結果的にはカスティーリャ語に似た書き方をするようにしたのです。

この 2 つの立場の対立は、正書法がなかなか決まらなかった原因のひとつでもあります。そして、正書法が決まった後も、論争が続きました。今では、この正書法がほとんどの人に受け入れられていますが、ポルトガル語風に行っている人たちも少数います。この対立を象徴しているのがガリシアを指す言い方です。ガリシア語でガリシアは普通 **Galicia** と言います。これはカスティーリャ語と同じ形です。それに対して **Galiza** [galíθa] と言う人もいるのですが、これはポルトガル語の **Galiza** [galíza] にならった形です。**Galiza** という形は、中世の文献に見られるので、ガリシア語にある形である考えられますが、現在では圧倒的に **Galicia** が多いのです。しかし、**Galicia** という形がカスティーリャ語と一致してしまうので、これを嫌って **Galiza** を使う人たちもいます。



【図 3】正書法に従わない書き方

たとえば、サンティアゴ・デ・コンポステーラの街中で見かけた、若者にデモを呼びかける独立派のチラシ（図 3）ですが、**manifestaçom juvenil** と書いてあります。若者の（juvenil）デモ（manifestaçom）という意味ですが、今の正書法にしたがえば **manifestación xuvenil** になるはずです。語尾を-ción のかわりに -çom と書くのは、ポルトガル語の **manifestação** に近い形ですし、**juvenil** はポルトガル語と同じ綴りです。真ん中あたりには「独立派（independentista）」と書いてあって、下の方には **Galiza** も見えますね。政治的立場と語形の関係が非常にストレートに出ている例です。

全体としては正書法の問題は解決したと言ってよいのですが、このように、政治的主張とリンクして別の書き方をする少数派もいるという状況です。

ガリシア語の現在：データから

さて、ガリシア語は長いことカスティーリャ語の陰に隠れていたというか、文学も書かれなくなっていたし、社会的にもガリシア語をしゃべる人たち自身が、ガリシア語をしゃべることを恥ずかしく思うような意識が生まれていました。いい仕事につくにはスペイン語がちゃんとできないといけない、自分がしゃべっているガリシア語なんか価値の無いものだ、という意識、劣等感を持つようになってしまったわけです。その劣等感は近年ずいぶん薄まって来てはいるのですが、実際にガリシア語が話されなくなっているというデータもあるのです。

【表 3】母語（2004 年）（Real Academia Galega 2007: 33）

最初の言語	(%)
カスティーリャ語のみ	36.2
カスティーリャ語優勢	25.9
ガリシア語優勢	15.1
ガリシア語のみ	20.6

1992 年に行われた調査では、母語は何か、つまり何語でしゃべることを覚えましたか、という質問に対して、60%はガリシア語が母語、と答えていたようです。それに対して 2004 年の調査になると、ガリシア語のみで話すことを覚えたというのは 20%ぐらいしかいない（表 3）。両方しゃべって、最初からバイリンガルという人の中で、ガリシア語の方がちょっと勝っているかなというのが 15%

くらいで、合わせても 35%くらいしかいないのです。最初にしゃべったのはカスティーリャ語という人は 36%いて、バイリンガルだけどカスティーリャ語の方が勝っているという人が 25%もいます。つまり、カスティーリャ語が自分の最初の言語だという人たちの方が多くなっているわけです。

【表 4】ふだんの言語 (Real Academia Galega 2009: 41)

ふだんの言語	1992 年 (%)	2004 年 (%)
カスティーリャ語のみ	13	25.9
カスティーリャ語優勢	26	35.3
ガリシア語優勢	30.5	22.9
ガリシア語のみ	30.5	16

生まれて最初に覚えた母語が何語かということと、成長して普段実際に何語を使うかということは別の問題ですが、普段使う言語のパーセンテージを見てみると、1992 年には普段ガリシア語だけで生活している人が 30%いたのに、2004 年には半分の 16%しかいない (表 4)。普段カスティーリャ語しか使わない人が 26%いる。ガリシア人のなかの 4 分の 1 はガリシア語をほとんど使わない、そういう状況になってきているということです。これはガリシア全体で一様なわけではなくて、居住地の人口別で見ると、5000 人以下の小さな町では、ガリシア語だけで生活している人たちが半分近い 40%、それでも半分に達しないのですが、人口 5 万人以上の都市になると、ガリシア語だけ話すという人が 6.2%しかいない。35%はカスティーリャ語しか話しません (表 5)。

公用語にはなったものの、ガリシア語を使う人が減っていて、特に都市部では少ないというのがデータから言えることです。

【表 5】人口別ふだんの言語 (Real Academia Galega 2009: 51)

	-5000	5001- 10000	10001- 20000	20001- 50000	50001-
カスティーリャ語のみ	8.8	20.3	24.5	25.5	35.6
カスティーリャ語優勢	20.7	29.3	40.6	37.5	40.1
ガリシア語優勢	29.5	27.2	23.2	22.6	17.6
ガリシア語のみ	40.5	23	11.3	17.6	6.2

ガリシア語の現在：印象

サンティアゴ・デ・コンポステーラは人口9万ぐらい、都市部ということになります。半年間の滞在では、カスティーリャ語が多く聞こえますが、ガリシア語が先細りというほどでもないような気がしました。というのも、実は15年前にもサンティアゴに1年滞在したのですが、そのときよりは街で聞こえてくるガリシア語が多いという印象を受けたのです。

それから、公的な場面でのガリシア語の定着ははっきりしています。つまり、公用語ですから、正式な儀式ではガリシア語が使われますし、特に政治家がガリシア語を使うようになっています。選挙用あるいは議会で答弁するのに、15年前よりもガリシア語でしゃべる政治家が多くなっている印象です。

ただし、公的に使われるということと皆が普通に使うということは別だということなのでしょうね。公的な場面で使うということと、劣等感がなくなっていくということはリンクしていて、ガリシア語が自然に出てくる率は、外国人が街中を歩いていると分かる範囲では増えているのかもしれませんが。しかし、全体として増えているかと言うと、データによれば、そんなことはないわけです。

私が街中で聞き耳を立てていて気がついたことは、例えばクラシック音楽の演奏会に行くと、人々はガリシア語をしゃべっていないですね。そこで配っている演奏会のプログラムはガリシア語で書いてあるのですが、もちろん人々はガリシア語で書いてあるのを普通に読んで理解しているのですが、しゃべるのはカスティーリャ語です。つまり、気取った雰囲気のある場所ではガリシア語は聞こえないということがひとつ。それから、小さな子どもがガリシア語をしゃべっているのはサンティアゴではちょっと聞こえませんでした。それと関連して、親が小さい子に話しかけているのは大体カスティーリャ語でした。これはどういうことかと言うと、子どもがガリシア語を覚えられないということです。ですので、さきほどのデータが示していたように、母語としてガリシア語をもつ人が減ってきていることは想像できます。そういう子どもたちも、学校に行くようになってからガリシア語を覚えるのですが、カスティーリャ語が優勢になるのは避けられないでしょうね。

また、テレビの放送などでは原稿を作りますから標準的なガリシア語が聞かれますが、街中で聞こえてくる、自然な会話では、カスティーリャ語とガリシア語が混ざります。聞いているとガリシア語とカスティーリャ語のどちらなのか、よ

く分からないこともありました。もしかしたら、ガリシア語にない音を持っているカスティーリャ語の単語は避けるということはあるかもしれません。例えば「働く」という単語はカスティーリャ語では **trabajar** [trabaxár] と言いますが、ガリシア語には [x] の音はありません。ガリシア語では **traballar** と言いますが、カスティーリャ語で喋っているように思えるのに **traballar** が出てくるのが再三ありました。

それから、ガリシア語には母音が7つあるわけですが、カスティーリャ語風に5つしか区別しない人たちが出てきていると言われています。私もテレビのガリシア語で母音の聞き取りが難しいので困っていたのですが、これが原因のひとつだったようなので、ちょっと安心しました。これは明白にカスティーリャ語の影響ですね。

参考文献

- 坂東省次&浅香武和（編）. 2005. 『スペインとポルトガルのことば』. 同学社.
- Real Academia Galega. 2007. *Mapa sociolingüístico de Galicia 2004. Vol. I: Lingua inicial e competencia lingüística en Galicia*. A Coruña.
- 2009. *Mapa sociolingüístico de Galicia 2004. Vol. II: Usos lingüísticos en Galicia*. A Coruña.



ガリシア東部の都市リバデオの広場

… * ◆ ————— ◆ * …

「北国」のヤシ

本文でも触れたが、ガリシアはスペインの北西端にあり、夏も 40 度を超える南部とは異なり、過ごし易い（内陸のオウレンセは少し暑くなるが）。しかし、驚いたことに、ガリシアの至る所に（と言えるほどいろいろなところを見たわけではないが）ヤシの木があるのだ。北国のガリシアに、なぜ南国に生えるヤシの木が？、と最初に旅行で訪れたときには不思議な気がしたものだった。そのうち、いろいろなところにヤシの木があるので、驚かなくなり、理由を探求しようという気も薄れてしまった。研究者としてあるまじき態度だが、それから四半世紀ほど後、今回の滞在中にこういう話を聞いた。

ガリシアのヤシの木は、移民・出稼ぎで中南米に渡り、そしてスペインに戻った人々が、かの地を懐かしんで植えたものなのだという。ただ、ガリシアの気候のせいで、実は大きくなり、食用などにはならないそうだ。

ガリシアと中南米

ガリシアは、特に 19 世紀以降移民の送り出し地域だった。中南米の一部では、スペイン人のことを **gallego** 「ガリシア人」と呼ぶ言い方がある。それくらい、ガリシアからの移民が多かったということだ。そして、故郷に帰ってヤシを植えることができた人たちは、移民先で成功した人たちだろう。ガリシアのヤシには、中南米に対する懐かしさとともに、植えた者のステータスを表すシンボルだったに違いない。

ガリシア語にとっても、中南米は重要だ。1906 年に王立ガリシア語アカデミーが設立されるが、それに大きく寄与したのがキューバ在住のガリシア人たちだった。また、ガリシア語による出版が困難だったフランコ時代（特に初期）に、検閲を経ずにガリシア語の書籍が出版できたのは中南米だった。現在、アルゼンチン、ウルグアイ、ベネズエラ、キューバ、メキシコなどに、まとまった数のガリシア語話者がいる。

ガリシアを知るための3冊

・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・



坂東省次、桑原真夫、浅香武和（編著）．2011. 『スペインのガリシアを知るための50章』．明石書店.

1冊丸ごとガリシアを扱った本として貴重。言語、歴史、文化から、グローバル化時代のガリシア社会まで、幅広いテーマを扱っている。書名に「スペインの・・・」がついているのは、ガリシアの知名度の低さを物語っていて、その意味でも興味深い。

... * * ————— * * ...

坂東省次、浅香武和（共編）．2005. 『スペインとポルトガルのことば』．同学社.

スペインとポルトガルの諸言語を扱った本で、現代スペインにおけるガリシア語の位置づけを知ることができる。巻頭言はサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の教授が書いていて、ガリシア語による原文が掲載されている。



... * * ————— * * ...



ロサリア・デ・カストロ（桑原真夫編訳）『ガリシアの歌』（上巻 2009 年、下巻 2011 年）行路社.

ガリシア語文芸復興の端緒となった Cantares Gallegos の日本語訳。抄訳はこれ以前にも存在していたが、完訳はこれが初めて。詩を翻訳で読むのは難しいが、日本語でロサリアの世界に触れることのできる文献として貴重。

... * * ————— * * ...

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる』

2012 年 10 月 23 日 第 3 回

「マダガスカル語でもない、フランス語でもない、日本手話
とも違う、独自の混成言語マダガスカル手話の世界」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

箕浦 信勝

まず最初に、ありがちな誤解から

みなさんこんばんは。東京外国語大学、正確に言うと大学院総合国際学研究院の准教授箕浦信勝と申します。今日はマダガスカル手話のお話をいたします。何でいきなりマダガスカル手話かという感じがするかもしれませんが、途中は私の説明でやりますが一番最後にマダガスカル手話の実際のネイティブの人の動画をお見せしようと思っています。その前に手話というものを聞いたことある人もいるだろうし、特に日本手話に関して聞いたことがある方もいらっしゃるだろうし、手話はよくわからない、他の大きい言語、英語とかフランス語とか、あまり大きい国の言語じゃなくてビルマ語とか、そういうのはちょっと聞いたことがある、でも手話はよく知らないという方もいらっしゃるんじゃないかなと思って、まず、手話を全く知らない人を対象にお話しようと思っています。タイトルはキャッチフレーズとしてつけたんですが、あまり正確ではないですね。羊頭狗肉なところがあって、マダガスカル語でもないフランス語でもない、日本手話とも違う、独自の混成言語マダガスカル手話の世界というんですが、マダガスカル手話はマダガスカル語ではないんです。フランス語でないのは実は結構当然で、マダガスカルは確かフランス語圏ですよ。それを知っている方いらっしゃるかも知れないですが、例えば聞こえる人の場合には学校教育を高校レベルあるいは大学レベルまで受けていれば、大学レベルではフランス語なしに教育を受けることはできないですから、マダガスカル語とフランス語両方使えるようになります。一方聾者、聾者というのは、耳が聴こえないだけでは聾者にはならないんですが、耳が聞こえなくて手話を第一言語としている人たちは、まずフランス語をほとん

ど使いません。聴者と聾者がいて、聴者は教育程度が高ければフランス語とマダガスカル語両方が使えるようになります。教育程度があまり高くなければマダガスカル語、それも標準語ではなく方言だったりします。一方、聾者はフランス語をほとんど使いません。ただ、最近話が変わっているみたいで、首都の聾学校を出た子どもが高校卒業最終試験というのがあるんですけれども、皆さん聞いたことあるかも知れませんが、フランスでバカロレアという試験がありますけれども、同じような試験がマダガスカルにもあって、去年あたり聾学校の生徒がバカロレアとったというんですね。バカロレアとるためにはマダガスカル語だけでなくフランス語もできないといけないので、最近の聾学校はフランス語も教えているんだと思います。ただ、以前はそんなことはなくて、例えば私の協力者、他の先生方はインフォーマントという言い方をなさっているかも知れませんが、通常日本の言語の世界では言語情報を教えてくださる人のことをインフォーマントといいます。でも英語圏では最近インフォーマントとは言わなくなっていて、なぜかと言うとインフォーマントというのは密告者という意味があって、最近そういう映画もあります。ですので、英語圏の人は **language consultant** なんていいますね。私は言語調査協力者と言っているんですが、簡単に協力者と言います。私の協力者の場合は、フランス語がほとんどわからないです。文字で書いたマダガスカル語は結構わかります。自分でも書けますが、聴者と同じレベルで書けるかというところとちょっと違うんですね、やっぱり。それから、話せるかどうか。実は日本の聾者は人によっていろんなばらつきがあると思うんですけれども、日本語が喋れる人、全然喋れない人、いろいろなグラデーションがあると思います。ちょっと日本の聾者の状況からするとかなり過酷な状況です。というのは、日本の聾の人が例えば役所に行った時とか、医者に行く時とか、公的な資金でお金を出してもらって通訳の人を使うことができるのですが、マダガスカルの労働者が普段の生活で通訳を使うことはできません。首都は通訳者何人かいるかな、首都はちょっと多い方ですね。ただ地方にいくと、1つの大きな街に通訳者が1人とか、ゼロだったりしますので、そうなるちょっと日本の聾者はすごく嫌がると思うんですが、聞こえる人が喋っている口の形を読む読唇術と、聾者の訛りは出るんですけれど、音声言語をしゃべるということができる人はできます。私の協力者はかなりできます。政治的な色合いもちょっとあったりして、それはあまり聾者の前で言いたくないんですが。日本の聾者の場合は政治的なこともあって、口でしゃべることは口話というんですが、口話はやらない、政治的意図からでき

てもしない人もいます。マダガスカルの場合それでは生活できないということです。フランス語の話がちょっと長くなりましたが、日本手話とは違うという話はこれからします。混成言語というのはキャッチフレーズとしてつけたんですが、混成言語ではない言語なんて地球上には無くて、何らかの混じりつけは絶対にあるんですね。外来的な要素がどんな言語にもあります。でもこれは何語から来ましたよ、何手話から来ましたよというのが割と分けてみることができるので、マダガスカル手話の場合は混成言語的かなとは思いますが。

手話って世界共通でしょ？

手話って世界共通でしょ？という誤解があって、これはどういう誤解かというのと、手話というのはジェスチャーなんだから、ジェスチャーだったら世界共通でしょうという風に思われる方がいらっしゃるんじゃないかなと思います。ですので、その反証として、常識的な誤解を打ち破るためにお見せしたいものがあります。日本手話とアメリカ手話とマダガスカル手話で大体同じ意味の手話単語を今からお示しします。それで何の意味か想像してみてください。2つ挙げます。分かる人は言わないでください。わからない人は考えてみてください。

まず1つ目。日本手話【手話】。アメリカ手話【手話】、マダガスカル手話。これはちょっとジェスチャー的かも知れない。【手話】。何か思いつく人いませんか？全然わからない？（受講者：知ってます）知ってます？日本手話をご存じなんです。今のはお母さんという意味なんです。何で日本手話でこれがお母さんで、アメリカ手話でこれがお母さんなのかという話はすればできるんですが、した方がいいですか？しない方がいいですか？どうしましょう？（受講者：してください）しますか？では手短に、日本手話では、「女」【手話】、「男」【手話】。これ差別的だっていう人いますが、ジェスチャーが入ってしまったのではないんです。あと、頬に指をつけると血縁関係の意味になります。それで血縁関係の女、まず「お母さん」【手話】。「お父さん」【手話】。「両親」はこうなります【手話】。これが日本手話のかたち。アメリカ手話は頭の下半分が女で、上半分が男なんです。なので、本当はもっといろんな語源があると思うのですが、今はこういうことが説明されていて、「お母さん」【手話】、「お父さん」【手話】です。関係ある単語をやると、例えば「おばあさん」【手話】、「おじいさん」【手話】とか。マダガスカル手話はこのままなので、おっばいなので。でも実はこれ意味は

もうちょっと広くて、「お母さん」という意味の時と、「女の人」という意味の時と、それから「ミセス」というのがあります。それをちょっとあとから言いますが、3つ区別して使いましょうという動きもあります。それは置いておきます。

もう一つ。日本手話が分かる人はわかってしまいましたが。まず日本手話【手話】。それからアメリカ手話【手話】。マダガスカル手話【手話】。何だと思いませんか？（受講者：全然わからない）全然わからない？これ、木なんです。木の幹と枝ぶり【手話】。これも木の幹と枝ぶり【手話】。これは【手話】マダガスカル手話。【手話】お母さんもいろいろな意味がありましたが、マダガスカル手話では「木」とか「草」とか「緑」とかみんなこれなんです。聾者の中にも何で単語が少ないのか？を問題視している人たちがいます。

手話は世界共通にすべきでは？

手話は世界共通にすべきでは？これ結構言われます。「手話やってます」「えー、手話って世界共通にしたら便利じゃん」ってね。英語勉強しなくて済むしと言われますけれど、それはその根底にいろいろな誤解があって、1つは手話は人工言語でしょう？という誤解がある。どういう人工言語かというと、聾児、耳の聞こえない子どもは言葉を持っていないくて、じゃあ誰が言葉を教えるかって言うと、聞こえる人、聴者である先生たちが会議して話し合っって作った手話を聾児に教えてそれで言葉が初めて生まれるというそういうイメージがあるんじゃないかと思うんですが、それは全くの誤解で、そういうプロセスを経てできた手話は無いんです。もともとあった手話を聴者がいじくりまわして、例えば英語に近づけちゃったとか、日本語に近づけちゃった手話はあるんですけど、聾者たちが使う手話はこういうプロセスを経てできているわけじゃないんです。次の下向きの矢印の下ですが、他国の聾者、聴者からのインプットがある場合もありますが、手話のほとんどの部分はその地域の、あるいはその国の聾児たちが生み出してきたものです。このへんの話は、マダガスカルの話ではないんですけど、もしお読みになりましたらスティーブン・ピンカー『言語を生み出す本能』上下巻というのがありますのでご参照ください。これは1970年代、中央アメリカのニカラグアで初めて建てられた聾学校で、それまでニカラグアの手話というのは無かったんですね。ですが、聾学校ができたときに、それは聾学校の先生が教えた訳じゃなくて、子どもたちが独自に手話を生み出していったんです。最初のところは恐ら

く言語学者は観察していないんですが、割と早いうちにニカラグアに言語学者が入って、言語が生まれる瞬間は取れなかったんですね。瞬間よりちょっと後の段階で、こうやって生まれたんだろうなということを調査して記録したというところがあります。それが1つ。スティーブン・ピンカーに紹介されています。スティーブン・ピンカーのニカラグアの話で言うと、聾児たちが手話言語とはまだ言えないホームサイン、ホームサインというのは本当に必要最低限の、「お腹すいた」とか、「ママ」とか、「おしっこ」とか、非常に語彙数が少ないんですよ。聾児一人しかなくて、まわりは聞こえる大人たちだけだとね。何でもかんでも喋れるような手話はできないんですね。そういうホームサインを聾学校に持ち寄ったんですが、聾児がひとつのところに集められたわけですね。そこで集団生活の中で、それこそ聾児が複数、ティーンの大いなる聾児じゃなくて年齢の低い聾児、小学生レベル、レベルっていうのは年齢ですが、の聾児が集められるとその中で言語が生まれてくるんです。どんどん単語も増えていくし文法もどんどん整っていくんですね。それも最初の世代で完全な言語にはならないんですね。世代というのは通常の日本語の意味の *generation* という世代ではなくて、*generation* という世代は親から子へ子から孫へ、そういう *generation* なんだけれどそうではありません。手話で世代というときは大体10年単位、10年単位の世代のことを *cohort* と言うのですが、日本語で *generation* とは違うちゃんとした訳語があればいいんですが、10年単位の *cohort* というのがどうやらあるらしいと言われていて、何番目かの *cohort* で割と語彙もすごく豊かになったし、文法も整ったということが見て取れるんだそうです。一番最初に1970年代に聾学校に入った人たちはやっぱり後々の *cohort* の聾児よりはより豊かではない手話しかできないんだそうです。そういうところがあります。私はマダガスカルでは調査していませんけど、それと似たようなプロセスがあったんじゃないかと思います。ただ、恐らくニカラグアはそれほど外部からの、聴者が、先生が押し付けたインプットはあまりないと思うんですが、マダガスカルの場合は、ノルウェー人の聞こえる先生が、聴者の先生がいたんですね。手作業、いわゆる木工とか裁縫、洋裁、洋裁仕事を教える先生方だったんですが、そういうのを教える先生方がいて、その人達がノルウェーから持って来た手話をちょっと教えています。ただ、先生が聴者なので、それが、私としての感想なんですが、それほどたくさん語彙を知ってたわけではなさそうなんですね。それが他の国とちょっと違うところなんですけれど、ノルウェー手話の単語がちょっと残っているというふうにノルウェーの

聾者がマダガスカルに来たときに聞いたことがあります。ノルウェー手話のオンラインの辞典があるんですが、それをみると、例えば基本 100 単語を比べてみてもそれほどノルウェー手話とマダガスカル手話は似てないんです。なので、ちょっとノルウェーの聞こえる人、それもノルウェーの手話を知っていた聞こえる人からのインプットはちょっとあったんですが、それほど大きな影響ではなかったのではないかと考えています。後に書いてありますけども、ノルウェー手話とマダガスカル手話の比較研究、これはやらなきゃいけないなと思っているんですけど、それこそ、基礎語彙 100 単語で何%が共通しているのかという数字を出さなければいけないと思っているんですが、やりかけて途中でノートをうっちゃってあるんです。というのは、本当にノルウェー手話から外来語として持ち込まれたから似ているのか、それともジェスチャーだから似ているのか、よくわからないところがあるんですよ。いくつかね。それで、どう判断すべきかというのがちょっとわからなくてうっちゃってあるんですが、いずれ論文にしなければとは思っています。

手話は地域の音声言語を二次的に「転写」したものだという誤解

手話は地域の音声言語を二次的に転写したものだという誤解が結構あるんですが、これは違うんです。転写した風な手話のバラエティがある手話はあるんですが、日本手話にも日本語寄りのバラエティがあったりするし、それからアメリカ手話にも英語寄りのバラエティがあったりします。通常聾者同士がしゃべるときには、マダガスカル語を二次的に転写したような手話は使っていないです。最初の文、2004 年の記憶からと書いてありますが、初めてマダガスカルに行ったのが 2004 年なんですね。すごい幸運だったんですが、2004 年のある金曜日に首都の聾学校に行っただけです。そうしたら、聾の先生が出てきて、私もアメリカ手話だの国際手話だの、日本手話は出さなかったと思うけど、ゴニョゴニョっと出して、そうしたら色々と話が通じちゃって、来週月曜日から地方に行ってマダガスカル聾者連盟の大会があるから一緒にバス乗って行きましょうと言われて、来週の月曜日の 6 時に来なさいと言われて一緒にバスで行っちゃったんです。そういう幸運がありまして、いきなり聾者の中に放り込まれて、その中で手話単語をいくつか、最初は恐らく 100 語もいかなかったと思うんですけどね、ちょっと身につけたときに、教えてくれた聾者じゃなくて、他の聾者が、私がちょっとマダ

ガスカル手話の単語ができるのを見て、「あなたはマダガスカル手話を勉強し終えましたか？」と言ったんです。し終えるわけじゃないかと思うんですが、一年目にしてね。資料2ページをご覧ください。大文字で書いてあるのはこれはマダガスカル手話に対応する音声マダガスカル語のラベルというものですが、マダガスカル語とマダガスカル手話、切り取り方、それこそ単語の守備範囲、意味の守備範囲が全く同じではないんですけど、近いところがあるので、よくやるのはその地域の音声言語、あるいは書記言語のラベルを使って手話単語を代表させるということをします。例文(1)と(2)です。

- | | | | | |
|-----|------------------------|----|----------|-------|
| (1) | IANA(IX ₂) | TT | MIANATRA | VITA? |
| | あなた | 手話 | 学ぶ | 終えた |
- 「あなたは手話を勉強し（始め）終えましたか？」

- | | | | | |
|-----|------------------------|----------|----|-------|
| (2) | IANA(IX ₂) | MIANATRA | TT | VITA? |
| | あなた | 学ぶ | 手話 | 終えた |
- 「あなたは手話を勉強し（始め）終えましたか？」

(1)か(2)か、どっちで言われたか忘れてしまったんですが、今考えてみると、マダガスカル手話としては例文の(1)も(2)も両方共正しいんです。どっちでもいいんですが、印象としてはっきり残っているのは最初の単語は「あなた」、「手話」「学ぶ」か、「学ぶ」「手話」か、どっちだったか覚えていないんですね。忘れちゃったんですよ。どっちもマダガスカル手話として正しいです。ただ、「終えた」っていうのだけが最後なんですね。ちょっとそれを両方とも表出してみますね。それで、「終えた」っていうのが完全に全部を終えちゃって何もかもわかるという意味の終えたじゃなくて、おそらくはちょっと勉強しましたか？ぐらいの「終えた」なんですよ。これはちょっと文法用語でいうと、完了の意味なんですけれど、完了というのは全て終わったという意味だけではなくて、ちょっとしたくらいでも完了というのが使われることがあるんです。例えば(2)の下に（参照：ロシア語等の完了アスペクト動詞「ちょっと～した」）というのがありますが、未完了ではなくて、ロシア語だと未完了と言うかも知れないけれども、未完了じゃなくて完了アスペクトで表したりするわけですが、それと似たように全て終えたという意味ではなくて、ちょっと終えたくらいのニュアンスかなと思っています。この「終えた (VITA)」っていうのは、本当に終わっちゃったという意味でも使うんですよ。

(1)をまずやってみますね。単語1つずつお示しします。まず「あなた」【手話】、

本当は皆さんを指さなきやいけないんですけど、一箇所だけね。まず(1)をやってみます【手話】。もう一回【手話】。(2)をやるとこうなります【手話】。でも VITA に当たる「終えた」という手話単語【手話】が最後にあって、焦点が当てられているかな。焦点って何？というところもあるんですが、焦点、強調ですね。強調的なところがあって、それが最後に来ます。これを例えばマダガスカル語に直訳してみたのが(3)。

(3) *vita ve ny fianaranao tenin'ny tanana?*

終えた か？定冠詞 学び-あなたの ことば-リンカー-定冠詞 手
「あなたは手話を勉強し（始め）終えましたか？」

これ本当に言ったら、完全に学び終わっちゃった、もう何でもできちゃう、そういう意味にしかないのかも知れないし、それともマダガスカル手話で(1)あるいは(2)で言ったようなちょっと勉強しましたかというような意味になるのかちょっとわかりません。(3)は音声マダガスカル語なんです。語順が全然違うのがわかりますか？それを見ていただきたいんです。「終えた (*vita*)」が一番最初なんです。ちょっとグロス、日本語の説明を全部読むことはしないでお願いします、マダガスカル語でもしこれが言えるとしたらこうなるんですね。*vita ve ny fianaranao tenin'ny tanana?* というふうになるんですけれども、見ていただきたいのは、「終えた (*vita*)」が一番最初にある。それから終えたという文の焦点であり疑問の焦点であるものには *ve* っていう、日本語の「〜か」にあたるようなものが後についています。*vita ve ny fianaranao tenin'ny tanana?* 別の用語で聞いたことがある人は黙っててくださいね。情報の量、付け加えられる情報の量が、マダガスカル手話なんですけれども、小さいところから始まって大きくなる。これは何かというと主題と呼ばれるもので、主題というのは何について語るか。その後にコメントというのがあるんですが、コメントというのはどんな新しい情報を付け足すかということなんです。その中で更に、コメントの中で強調されるものが焦点になります。後に変なことが書いてあるんですけど、思い出し主題と書いてあるんですけど、マダガスカル手話は主題が文頭に来るのが基本なんです。時々主題が文末に来ることがあるんです。思い出し主題というものです。これあたりまえじゃないかと思うかもしれませんが、マダガスカル語といってもこれ標準語の文法なんです。音声マダガスカル語、それもいろいろな方言をみたらまた違うかも知れませんが、標準語の文法に従うとマダガスカル手話と逆方向なんです。主題で、コメントで、焦点が一番前っていう。何で思い出し

主題が文末に来たかということ、音声マダガスカル語の文末の主題の影響で来ちゃったのかなという気はするんです。でも完全な影響を受けていれば、音声マダガスカル語のパターンを写したパターンになるはずなんですが、なってないんです。まず何について話すかということを述べて、それについて付け足す情報は後から入れていく。でも音声マダガスカル語はそうはなってないです。

マダガスカル手話の来歴：アンツィラベ聾学校 Fo. Fa. Ma

マダガスカル手話の来歴ですが、アンツィラベというのは首都じゃないんです。首都から車で3時間くらい南に行ったところなんです。ちょっと距離がわかりませんが、首都もアンツィラベも中央高地という高原地帯です。ですから、これもちょっと関係ない誤解なんです、夏にマダガスカルに行くと言うと、何でそんな暑いところに行くのって言われるんですが、8月のマダガスカルの中央高地は暑くないですよ。寒いんです。高さが1200メートル級なんです。アンツィラベはもうちょっと高いんですね。だから8月はさらに寒いみたいです。南半球だから冬は冬です。でも、海岸地帯は高度がそんなに高くないので、結構暖かいんです。ですが中央高地は寒いんです。8月は寒いんです。それで、フランスの植民地だった時代があって、フランス人たちも保養地としてアンツィラベを使っていたんですね。フランス人の別荘がたくさんあったみたいです。1960年にアンツィラベの聾学校 Fo.Fa.Ma という何かの、頭文字にはなってないですね、二文字ずつとってきたものなんですけど、最後の Ma だけはわかるんだけど、Ma は聾って意味で、marenina というんですけれど、Fo.Fa は何だか忘れてしまいました。1960年って何の年でしたか？世界史の質問ですが、どなたか。これは知ってる人言ってみてください。世界史全然わかりませんか？（受講者：独立した年じゃないですか？）そうです、アフリカ諸国が大独立、たくさんの国が独立した年なんです。その独立日時と聾学校ができた日時の前後、後だとは思うんですけどね、ちょっとそれは私はきちんとは調べていないです。いずれにせよ、アフリカ諸国が大独立、たくさん独立した年にルーテル教会によって創立されたんです。そこにはマダガスカルルーテル教会だけでなく、ノルウェーのルーテル教会からの援助もあったんですね。当初やはり聾者が社会に出て行くためには手仕事を身につけなければいけないということで、木工や裁縫などを教えたんだそうです。その過程の中でノルウェー人の聴者の先生が手話単語をちょっと伝えたいなんですね。でもそれにしてはそんなに多くない感じがするんです。別な話

をすると、私、歴史が弱いところなんです、アメリカ手話というのが、わざとアメリカ手話の略語使いませんが、これはどうやってできたかというのがわかっていて、最初にコネチカット州ハートフォードという州都にアメリカ最初の聾学校が作られて、そのときに本当は同じ英語のイギリスから聾学校の先生を連れてきたかったんだけど、イギリスから来てくれる人がいなくて、フランス人の先生が行ってもいいよと言って来たんです。その人は聾の先生です。聾でフランスの聾学校で教えていた **Laurent Clère** という人です。その人がまずはフランス手話で教えたんです。書く言葉としては英語を教えて、**Laurent Clère** が教えたわけじゃなくて、英語を教えて。でも手話はフランス手話を教えていた。現在のフランス手話とアメリカ手話との語彙の共通のパーセンテージはどれくらいかということ 50%くらいあるんです。それに比べたら、ノルウェー手話とマダガスカル手話は 50%も絶対無いです。ですからそれは私がきちんと数字を出さないといけないんですが、次に 1880 年ミラノ会議からの口話主義の影響は少ないと書いてありますが、何があったかということ、1880 年にミラノで会議があったんです。それは何かということ、当時国連ということ国際連盟でしょうか？国連主催でも何でもなくて、聾学校の先生たちが諸国から集まってきたんですね。それまでは聾学校というのは手話で教える聾学校もあったんですが、手話で教えていても子どもたちは聴者と話せません。だから読唇と口話を教えなきゃいけないと決議したんです。それで口話主義に転化した国がすごくあったんですね。アメリカもそうだったし日本もそうでした。それは多かれ少なかれ 100 年より短かったかも知れない国もあるかも知れないし、100 年より影響が長かった国もあると思うし、日本はまだ影響が残っていると思いますけれども。マダガスカルは恐らくミラノ会議の口話主義の影響は少なかったんですね。なぜでしょう？ノルウェー人の先生たちの先見の明があったのか、聾学校では口話及び読唇というのを無理強いすることはやっていないみたいです。だからノルウェーがどうだったか、ノルウェーの聾教育の歴史がどうなってるのかはちょっとわからないですけど、そのあたり何か秘密があるかもしれないです。そこはまだ全然解き明かしていないとか、私、歴史家じゃないので、やれることに限度があるんですね。ちょっとその辺も掘り起こさなければいけないのかも知れないです。ノルウェーから数人の先生、6 人くらいって言われてます。皆さん引退してノルウェーに帰ってたんですよ。ですがここ 4~5 年でその先生方がどんどん亡くなっているんですね。だからもう行って聞くこともできないです。そうになると歴史を掘り起こすとなるとノ

ルウェー側にはもう知っている人が恐らくいないので、マダガスカル側の古い昔のことを知っている人に聞いていろいろな歴史的なことを再構築するしかないかなという気がします。それは本当は歴史家がやるべきことなんですが、でも私はあんまりそれに力を入れてやっていません。誰かがやらなきゃいけないとは思っています。

多くの国で手話というのは聾学校ができたことによって生まれているんです。それはだからさっきのニカラグアと同じで、聾児が集まることによって、それぞれ断片的な手話、あるいはホームサインというのを持ち寄って、それがどんどんお互いに共鳴しあって、単語の数も増えるし、文法も整理されていくんです。でも、フランスはそういう過程を経ていなくて、聾学校ができる前にパリの街角で聾者同士が手話でしゃべっていたらしいんですよ。それこそ聾教育の一番最初はフランスだったんですけど、カトリック教会の神父さんが街角で聾者同士が喋ってるのを見ていて、でも聾者に教育が施されていないというのも知っていて、教育しなきゃいけないんじゃないかと思いついて、聾教育を始めたというのが最初なんですね。だからフランスだけは聾学校で手話ができたわけじゃないんです。ですが、マダガスカルも恐らく他の多くの国々と同じように、聾学校で手話ができた感じがします。聾コミュニティにいますと、1960年以降に学校に通った人よりはもうちょっと年上の人がいるんですね。やっぱり手話が拙いんですよ。すごく単語数も少ないし、安定していないし、やっぱり現在のマダガスカル手話の話者じゃないんだなあって感じがします。なので、マダガスカルの場合も聾学校で手話ができたんじゃないかなと思われます。

マダガスカル手話の来歴：首都のアカニニ・マレニナ聾学校

マダガスカルのは首都はアンタナナリブというところなんですけれど、その首都にアカニニ・マレニナ聾学校というのがあって、マダガスカル手話を豊かにしようとして手を加えているんです。それはちょっと人工的な加工なんですね。さっき言ったようにお母さんと女とミセスが同じ単語だと言いましたが、それを変えようとしていて、例えば、どっちがどっか私も覚えられないんですが、女をこうしようとしたのかな【手話】。けれどそれは非常に難しいんですよ。こういう風にしようと、アカニニ・マレニナ聾学校先生方が決めたんです。それは聾の先生もいるし聴者の先生もいるんですが、この形は広まるんですが、ただ、母親と女

というのを分けて認識するというのがやはり聾者には難しく、マダガスカル手話の中ではこれは1つのカテゴリーというか、仲間なんです。そういうふうに分類されているので、新しくこれ【手話】の代わりにこういう形【手話】が入れられたとすると、どうなるかという、これ【手話】が両方の意味で使われてしまうんですよ。お母さんと女っていうね。これ【手話】もお母さんと女という意味で使われる。だから、単語数は増えたけれど区別できるようになっていないという、そういう状況になっています。単語の二重性・多重性というのがあって、それはだから首都の聾学校が手を加えていって、それが必ずしも意図したとおりには、なっているところもあるんですけど、なっていないところもあります。

マダガスカル手話の成分：他言語に依存しない独自の部分

他言語に依存しない独自の部分。ほとんどの部分はそうだと思います。ですから、1960年に聾児たちが集められてその中で手話を生み出していったんですね。ノルウェー手話からの影響もちよっとはあるんだけれども、それに依存しないでマダガスカルで独自に生まれたものがほとんどだろうと。その起源はジェスチャーかも知れないけれど、しかし、場当たりのジェスチャーとは違って言語化しています。固定化しているんです。

マダガスカル手話の成分：「系統と関係なく」手話諸言語に共通した部分

「系統と関係なく」手話諸言語に共通した部分というのがあって、例えば素動詞、無一致動詞といわれたりすることもあるんですが、素動詞と一致動詞と空間動詞というのがあって、その区別はあるんですね。ただ、私の協力者が去年、2011年まではあまり一致動詞、空間動詞を出してくれなかったんです。それは私が外国人で、それに加えて聾者ではないし、人に難しいことを教えちゃいけないという先生としてのプロの勘があって、簡単なものしか出してなかった感があるんですね。それが今年になって一気にわーっと出てきちゃったんです。一致動詞というのは、皆さん例えばヨーロッパの言語で主語の人称と数で変化するという言語はご存じかも知れないですが、手話の場合、一致する場合には主語とだけ一致するということはあまりなくて、主語と、間接目的語があれば間接目的語と一致する、2箇所一致します。場合によっては主語と間接目的語じゃなくて主語と目的語と一致する動詞もあるんですが、例えば、「手話る」って書いていますが、マ

ダガスカル語でラベルをつけられなかったんですね。手話というのは元々の形こうなんですけれど【手話】、それがあつた人が私の協力者に向かつて手話で表現したときこうやってやっているんです【手話】。逆になつてゐるんですよ。これはだから3人称の主語と1人称の間接目的語に一致してゐるっていうね。そういうのがあつたんです。

次、空間動詞というのは空間的位置と一致するんです。日本の手話教育方面ではCL(シーエル)とよく言うんですけど、完全と一緒にじゃないんですけどCLというのとかぶるところがすごくあるんです。マダガスカル手話の例、後でお見せするもので出てくるんですが、説明しやすいのはアメリカ手話や日本手話です。

次の類別述語構造、**classifier construction**。類別というのは、物の形状でいろいろと分類するというのを類別というんですけど、名詞類別というんです。例えば日本語だと助数詞というのは類別に使われますよね。例えばビール一本と言ったりとか、一杯と言ったりとか、あるいは一缶と言ったり一樽と言ったり一ケースと言ったりします。あるいは一つ。一つというのはちょっと形がわからないけれど、一番何にでも使える形ですね。東アジアとか東南アジアですと数詞と一緒に類別するものが使われることが多いんですが、手話の場合には動詞と一緒に類別するものが使われることがあつて、それは手の形で類別をします。日本手話を習つてゐる方は聞いたことがあると思いますし、もし日本手話を教育する場面に行けばこれはCLと呼ばれてゐるんですが、他国でCLという言葉はなくて、**classifier**の最初の二文字がclなんですけれど、だからこれは類別辞**classifier**ですよということをさっき言つたラベルで書くときに、CLって書くんです。それを見て日本の手話教育者及び手話研究者が、これはCLと呼ばれるものなんだなということでCLと呼ぶことが多くなつてゐます。ただ、外国に行つてCLと言っても通じないです。まず、アメリカ手話の例で、これ【手話】人なんです。人の形は手話によつてちょっと違うんですけど、これ【手話】は乗り物なんです。ちょっと見てください【手話】。こうやってやると、これは人のことで、例えば「車などが曲がつていった、人の横を車が曲がつていった」、そういうことを表すことができるわけなんですけれども、何で空間動詞と関係あるかという、空間動詞というのは空間的位置と一致するんです。ですから、これ【手話】は人がここにいますよ、それとの位置関係で車なり乗り物が回りこんできましたよということを示します。

次は日本手話の例です。「私」「世界」「旅行」「嫌い」「類別辞：飛行機・落ちる」

というのは、「私海外旅行嫌い。飛行機が落ちるから」というのは、これは私が調査してたんじゃないんです。日本の聾者が勝手に喋っていて、私はちょっと追いついて行けないんでただずっと見ていただけだったんですけれど、そのときにある聾の人が言ったんです。この日本手話の例文、おもしろいので見てください。こうなります。「私」はこうです【手話】。マダガスカル手話では「私」はこう【手話】なんだけど、日本手話の場合、これ【手話】でもいいです。諸外国に行くとこれ「鼻」という意味になっちゃったりするんですが。「私」【手話】、「世界」【手話】、「旅行」【手話】、「嫌い」【手話】、なぜかと言うと、飛行機が落ちるから、「飛行機」ってこの形【手話】かこの形【手話】なんですね。「飛行機が落ちる」ってこうやります【手話】。だから、手の形は名詞的なものを分類していて、あとは動きが動きを表す。これ【手話】は落ちる。でも飛行機は実際には縦には落ちないでしょうが、それは言語なんですよ。通常の飛行機は縦に落ちて行かないだろうけれど、言語としては縦に落ちていきます。今のを日本手話でやってみるとこうなります【手話】。それで、何が言いたいかというと、飛行機が落ちるというのを少なくとも日本語だったり英語だったりしたら、2つの単語が必要ですね？飛行機という名詞と、落ちるという動詞が必要なんですが、これは日本手話では一緒に表現することしかできないんです。

資料に「モノローグ（一人語り）」を挙げましたのでご覧ください。アンタナナリブのアンバトゥフツィで、昨日夫と息子の2人がバイクに乗ってまっすぐな道やくねくねとした道を行った。バイクに乗って行くってこうだったと思うんですね【手話】。こういう空間動詞だったと思うんですね。そういう移動というか、空間的な動きを言語化、手話化しているところが、見て取れるんじゃないかと思います。

次に素動詞です。素動詞というのは一致なくて無一致動詞と言ったりするんですが、素動詞、例えば「仕事」という名詞、それから「働く」が同じなんです。これは謎で、日本手話で名詞と動詞が同じ手指の動き、手指動作で表されているも、論理的に矛盾しないかなと思うんですが、マダガスカル手話でそれはつらいものがあるんですね。なぜかと言うと、主語・目的語・動詞の語順が日本手話は割と一定しているからです。主語・目的語・動詞の順番になるんですが、それを例えば何かが主題ですよということで前に持って来たりとか、焦点ですよということで後に持って行ったりということがあります。そういう基本語順というのがありますが、マダガスカル手話は基本語順がよくわからないんです。基本語順

がわからないのに、何が動詞か、何が名詞かがはっきりとわからないというのはこの言語大丈夫かなという気がするんですが、私自身がそこはまだわかっていないんです。「仕事」「働く」が同じなんです。もしかしたら違うかもしれないです。アメリカの手話研究者は絶対違うはずだと私に詰め寄ってくると思うんですが、今のところ何が違うかよくわかりません。マダガスカル語の単語をあたかも発音するかのように口を動かす、マダガスカル語口形というのがあるんですが、それはちょっと違うんですけれどね。ですが、例えば調査協力者はマダガスカル語口形使うことが結構多いんですが、全部にはつけないです。音の方は全然付けません。だから必須じゃないんですね。ロール・シフトとか、**referential shift** というのがあって、一人語りの際に会話を描写することがあるんですが、そのときに会話の中の3人称や2人称が1人称に憑依するんです。落語で熊さんと八さんの会話みたいな。アメリカ手話でロール・シフト表現するときというのは結構いっぱいあって、体勢がこっち向きとこっち向きで変わっちゃったりするんですが、日本手話でロール・シフトする人はほとんど動かなくて、姿勢がちょっとかわるだけだって言ったりするんですけど。ただ、私の協力者は割と向きをちゃんと変えてくれるんですよ。それはだから外国人で聴者の私に向かってわかりやすいようにしてくれるのかも知れないし、マダガスカル手話のロール・シフトがそうなのかも知れないし、ちょっとわからないです。ただ、彼女にロール・シフトという概念は恐らく無いでしょう。まだ私が手話言語学の文法を教えるという場面は無いので、これから必要になってくるんじゃないかと思うんですが、だからそれは文法としては知識としては知らないと思うんですが、ただネイティブとしてできるわけです。例えば英語で **he was like...**とか **she was like...**と言うと、その後彼女は言いました、彼は言いました、と言ってその後真似して言うんです、憑依したみたいだね。淡々と言うんじゃなくて、口調まで真似て言うんです。それが日本語だと「～みたいな」、それはでもあまり真似してる感じじゃないですね。(s)**he was like...**みたいなのは近いんですけど、ただ、「～みたいな」の時に口調まで大げさに真似してやるかはわからないですね。「こんにちは」「こんにちは」「なにか新しいことありますか」「新しいことありません」、っていうのを、AさんとBさん、熊さんと八さんでやってみますが、こうなります【手話】。そういうのが、日本手話にもアメリカ手話にもあるし、マダガスカル手話にもあります。これは初めて今年見て取れたというか、ビデオも撮れたんですけどね、去年まで無かったんですよ。今年初めてあるって思ったんです。会話文はあったこ

とはありましたね、去年までね。ただちょっと違うのは、一人語りで、今年はデータの出方がちょっと違ったんで、はっきりとしたロール・シフトが見えたんじゃないかなと思うんです。

マダガスカル手話の成分：音声・書記マダガスカル語からの影響

部分的に語順、それで、これは結構連続体をなしていて、マダガスカル語の語順とすっかり同じ手話もあり得るし、それからマダガスカル語からすっかり離れた反対側の極の手話もあり得るんです。それは2つ別々にあるというよりは、連続体じゃないかなと私は思ってるんですけどね。語順の話も後から出てくるんですが、まず先に語彙の話で、兄弟の分類、これはほとんどマダガスカル語そのままなんです。

(4) 語彙の「範疇化」(きょうだい等)

a. ANABAVY

異性の女きょうだい

b. ANADAHY

異性の男きょうだい

c. RAHAVAVY/RAHALAHY

同性のきょうだい

d. ZOKY

年上のきょうだい

e. ZANDRY

年下のきょうだい

ただちょっと違うところがあります。姉兄弟弟っていう分類と違うんです。これはマダガスカル語とすごく近くて、まず、ポリティカリー・コレクトに女性を先に出しちゃったんですけれど、通常だったら男を先を書くでしょうけどね。「異性の女きょうだい」はこうなります。ちょっと見てください【手話】。私の異性の女きょうだい、それは合ってる。【手話】というのは私の異性の女きょうだいという意味です。「私の」が後に来ます。「異性の男きょうだい」、これは私は自分のこととしては言えないんですけども、ロール・シフトしている時には言えるでしょうが、自分のこととしては言えないです、私の異性の男きょうだいというのは。だからこれは私が言ったら変。ロール・シフトのときは言えるけれど、そうでなければ変です。それから、きょうだいで二つ単語が並んでいますが、マダガスカル語では「同性の女きょうだい」と「同性の男きょうだい」というのは、

RAHAVAVY というのと RAHALAHY というので分けるんですけど、これはマダガスカル手話では一緒なんです。こうなります【手話】。【手話】って言ったら、私からしたら「同性の男きょうだい」の意味しかないです。あとちょっと別の体系で、これは a~c と d,e でちょっと分かれていて、「年上のきょうだい」というときはこうやるんです【手話】。「年下のきょうだい」【手話】ってやるんですけどね。これらはさっきの性別と関係のあるものと一緒に使わないんですよ。一緒に使えば、どっちの性別で年上か年下かってわかると思うんだけど、一緒に使わないんですよ。私の協力者の語りの中で、寧ろ「年上のきょうだい」、「年下のきょうだい」というのはすごく出て来て性別はわからないんです。まだそれはどういうふうになっているのか、親族関係があるのかっていうのを知っていればわかるし、知らなければ知らないで済んじゃうっていうそういう問題なんですね。

語順その他がすごくマダガスカル手話的なものと、マダガスカル語に寄っちゃったもの、マダガスカル語に寄った文体のことは日本で言われているような言い方で言うと、マダガスカル語対应手話と言ってみたり、あるいは、手指マダガスカル語と言ってみたりね。

- | | | |
|-----|------------|----------------------|
| (5) | ANDRO | MAFANA (マダガスカル手話) |
| | 日 | 暑い |
| | 「(今日は) 暑い」 | |
| (6) | MAFANA | NY ANDRO (手指マダガスカル語) |
| | 暑い | 定冠詞 日 |
| | 「(今日は) 暑い」 | |

「(今日は) 暑い」というのは、「日」「暑い」というんですが、手話の方非常に自然なマダガスカル手話です。こうなります【手話】。「日」は【手話】、「暑い」は【手話】。口形つけてもいいですね【手話】。それに対して、手指マダガスカル語、(6)の方は、わざとマダガスカル語と対応させて、語順が逆になると同時に名詞に定冠詞がついています（「暑い」「定冠詞」「日」）。定冠詞はマダガスカル手話には無いというか、あまり使わなくていいんですが、音声マダガスカル語に近くなると出てくるんですね。マダガスカル手話ではあまり要らないんですけど、音声マダガスカル語に近くなると、この定冠詞、英語の the にあたるものが出てくるんです。こうなります【手話】。これは、(5)は単語が2つだけなので、そんなにバリエーションはあり得ないんですけど、もっと単語が増えてくればものす

ごくマダガスカル手話的な文体が、実はマダガスカル語にすごく近いんじゃないかという文体から、いろいろな振れ幅があると思うんですね。私の協力者の場合、日によって違うんですよ。すごくマダガスカル語寄りになる日もあるんですね。何のときにそうなるかという、新聞読んできたときとか、スピーチという文化がマダガスカルにはあって、人前でスピーチをやるというときに、一生懸命内容を考えて、そうやってスピーチをやるんだけど、そのときに何故かわざとマダガスカル語っぽい手話にするんです。日本の聾者で日本手話を使う人はそれはやらないと思います。でも、日本の聾者の中に、そういう傾向、だから日本語に近く、それこそ肩肘張った正式な場所では日本語に近くしゃべる人もいないことはないんですね。私の周りにはあまりいないんですけども、マダガスカルはそれをちょっとやるみたいです。

マダガスカル手話の成分：ノルウェー手話からの影響

さきほど話しましたが、ノルウェー手話からの影響は恐らくフランス手話とアメリカ手話の 50%より類似、共通点が少ないだろうし、そのパーセンテージを出すこと、どういうところが似ていて、違うかというのは今後研究していかなければならないことです。

マダガスカル手話の成分：音声フランス語からの影響

音声フランス語からの影響はすごく少ないです。さきほど言ったように、聾者がフランス語を知らないので少ないです。ですが、時々マダガスカル語口形とかフランス語口形というのが使われることがあって、手指動作と一緒に口の形をつけることがあります。例えば、問題、試験の時の問題じゃなくて、嫌なこと、まずいことの問題です。普通は口形をつけるとすれば、マダガスカル語口形 (olana) を付けてこうなります【手話】。けれど、フランス語口形 (problème) 使うこともあります【手話】。すごく少ないです。すごく少ないですが、たまにあります。

マダガスカル手話の成分：音声ノルウェー語からの影響

これは何で？と思うんですが、音声ノルウェー語からの影響で、ノルウェー語口形を見ることがあります。「聾」という単語はこうなんですけれど【手話】、こ

れにマダガスカル語口形 (marenina) つけると【手話】。これをやった人は首都の人ではなく、マジungaという車で 16 時間くらいかかるところの聾の人なんです、この手指動作にノルウェー語口形 (døv) をつけるんです【手話】。何でノルウェー語口形なんかつけるの？もしかしたら、これは推測でしかなくて、本人に聞けばいいんですが、聞いていないんですけれど、ノルウェーの先生が、【手話】のときにノルウェー語口形つけてたのかなと思います。

マダガスカル手話における諸問題：単語数が足りない

さきほど言ったように、女・お母さん・ミセスが同じだったり、木・草・緑が一緒だったりするので、増やさなければと首都の聾学校のアカニニ・マレニナ聾学校 (Aka.Ma) の人が考えていて、人工的に増やそうとしています。それを広めようとしています。日本は対照的で、日本は全日本ろうあ連盟は新しい手話単語をどんどん作ってるんですね、人工的なものをね。それに対して、Dpro というちょっと世代の若い人たちが集まっている組織があって、そこでは、人工的に作るんじゃなくて自然に増えていくよという考え方の人がいて、それは割と対立項になっています。日本ではね。マダガスカルでは、聾者の社会参画によって自然に増えるはずと私は思っているんですが、皆さんあまり思っていないです。確かに、女とお母さんとミセス、木と草と緑が自然に分かれていくということはもしかししたら無いかも知れないですね。ちょっとわからないです。

マダガスカル手話における諸問題：人為操作による語彙項目の二重性・多重性

でも、単語を増やすだけではなく単語を入れ替えてしまうというのもあって、それが人為操作による語彙項目の二重性・多重性です。二重性・多重性というのは、まず伝統的な手話単語があって、それをアカニニ・マレニナ聾学校が簡単にしてしまうとして簡単にしたのがあって、これなんですよ。

	伝統的手話	Aka.Ma 手話
(7)	a. ALATSINAINY 月曜日 (定規日)	b. ALATSINAINY 月曜日 (L 日)
(8)	a. TALATA 火曜日 (編み物日)	b. TALATA 火曜日 (T 日)
(9)	a. ALAROBIA 水曜日 (鋸日)	b. ALAROBIA 水曜日 (R 日)

- | | | |
|------|---------------------------|--------------------------|
| (10) | a. ALAKAMISY
木曜日（縫い物日） | b. ALAKAMISY
木曜日（K 日） |
| (11) | a. ZOMA
金曜日（雑巾日） | b. ZOMA
金曜日（Z 日） |
| (12) | a. ASABOTSY
土曜日（膝叩き日） | b. ASABOTSY
土曜日（S 日） |
| (13) | a. ALAHADY
日曜日（祈り日） | b. ALAHADY
日曜日（祈り日） |
| (14) | a. 16
c. 666 | b. 16
d. 666 |

例えば(7)月曜日ってこうなんです。伝統的手話をやっていきます【手話】。月曜日【手話】、火曜日【手話】、水曜日【手話】、木曜日【手話】、金曜日【手話】、土曜日【手話】、日曜日【手話】。ラベルの方をみたら、もしかするとアラビア語を知っている人は似てると思うかもしれない。音声マダガスカル語にはアラビア語が入っています。アラブと関係があった時期もあるんです。マダガスカル手話では定規（月曜日）だの編み物（火曜日）だののこぎり（水曜日）だの、縫い物（木曜日）だの雑巾（金曜日）だの、膝叩き（土曜日）というのは何をしてるか説明は聞いていないんですけど、祈り（日曜日）はもちろん日曜日だから。そういう伝統的な手話単語があったのに、アカニニ・マレニナ聾学校はそれを簡単にしてしまおうということで、それこそマダガスカル語の中から、一文字だけとってきて、それを使うやりかたをしています。「月曜日」は ALATSINAINY なので、「L の日」なんです。それから、「火曜日」は TALATA だから「T の日」。これは指文字っていうやつで、それです。「水曜日」は ALAROBIA で「R の日」、「木曜日」は ALAKAMISY なので「K の日」、それから「金曜日」は ZOMA なので「Z の日」、「土曜日」は ASABOTSY の「S の日」、日曜日は「祈りの日」【手話】なんです。日曜日だけは伝統的手話が残っているんです。また、数字がすごく違うんですよ。何か違うんです。例えば伝統的な 16 ってこうなんです。まずは 6 と、5 と 5 を合わせて 10 なんです【手話】。その前に、マダガスカル語の場合も数字は 1 の位からやっていくんですよ。日本語と全部逆です。今のが 16 です。666 はどうなるかというと【手話】。6 と 60 と 600 というのが、古い手話なんです。それをアカニニ・マレニナ聾学校はどうしたかというと、両手でやるのは面倒だということで片手にしようというんですね。1〜5 まではいいいけれど、6〜9 というのは恐らくアメリカ手話入れちゃったんですね。なので、で

もそうすると 6 と 3 が紛らわしいんです。それはどうにかなると思っているんでしょうか。16 というのをアカニニ・マレニナ聾学校手話でやるとこうなります【手話】。666 は【手話】。あ、600 は違うんですよ。600 はさっきはこうでしたが【手話】、アカニニ・マレニナ聾学校手話はこうなんです。Z の形を動かします。なぜかという、100 という数字が zato という、Z で始まるので、全然違うんです。実は多重性と書いてあるのはなぜかと言うと、数字が二つの体系で収束しているかという、そうではなくて、いろいろと混ざって無茶苦茶になっています。少なくとも通訳者の人、4 桁、5 桁の数字が出て来ても両方の手話で数字をやるんですよ。すごく大変だと思うんですがやっています。

モノローグ（一人語り）

次にモノローグをお見せして終わりにしようと思いますが、一人語りです。会話ではなくて一人語りです。アンタナナリブのアンバトゥフツィで昨日夫と息子の 2 人がバイクに乗って真っ直ぐな道やくねくねとした道を行った。アンバトゥフツィを散歩するとそこには大きい池、というか水と言っているんですけれど、池と丘がある。登りたければ山の頂上まで登って否かを見渡すことができる。きれいな場所だ。また田舎では魚を網で獲ることができる。大きいのか小さいのか、赤い色の魚、それを食べることができる。食べた。夕方帰宅する。くねくねとした道を行く。息子は家に到着して、空気がきれいで嬉しかったという。言うとか言ったとか、過去か過去じゃないのか区別ないんですが、基本的に無いんです。ですから VITA というのも過去に必ず使うわけじゃないんですね。終わりというのはね。また、お弁当を持っていったが、満腹した。十分に満腹した。お弁当は無くならなかったのだから家に持って帰った。ママにあげて、ママは満腹になった。美味しいものは無くならなかった。それが昼ごはん。おしまい。という話なんですけれど。それを手話単語で一つ一つ並べたのがその前のものなんですね。見ても追えないと思うんですが、ちょっと見てみてください。いきなり始まりますのでわかってほしいので、まあ見てください。【動画を見ながら一つ一つ単語を説明】わかったような、わからなかったような。

以上、取り留めもない話だったんですけどもマダガスカル手話の話でした。以上で終わりにいたします。どうも長らくありがとうございました。



首都アンタナナリブの食堂のお品書き

... * ————— * ...

マダガスカル首都圏は、もちろん他地方から流入してきた人たちも多くいるので、今では民族のるつぽのような状態となっていますが、元来はメリナ族の地域でした。今でも人口の割合から言ったら、首都圏ではメリナ族に会う確立が非常に高いです。そのメリナの文化は、俗に、日本の京都市的でまわりくどいなどと言われることがあります。例えば日本の京都で、「ぶぶ漬けでも」とすすめられて実際に食べてしまった他地方の人が後でぼろくそに言われた、なんていうような回りくどさに似て、メリナの文化でも、「物事を直裁的に言わない」ということがあるのだそうです。しかし、民族的にメリナ族に属する聾者の場合、そのような回りくどさを感じることは、私の場合ほとんどありませんでした。寧ろ、メリナ族の聾者は物凄く直裁的に物事を言ってきます。首都圏の、メリナ族の地域であっても、聾者文化と、聴者文化とは、影響関係にはありつつ、別々に発展している部分もあるのかもしれない。

マダガスカル及び手話を知るための3冊

$$* \cdot \dots \vdots \dots \cdot * \cdot * \cdot \dots \vdots \dots \cdot * \cdot * \cdot \dots \vdots \dots \cdot *$$


飯田卓、深澤秀夫、森山工編著. 2013. 『マダガスカルを知るための62章 (エリア・スタディーズ 118)』明石書店 (東京)

独特な動物相、植物相が有名なマダガスカルであるが、自然科学的な観点だけでなく、歴史、社会、文化、言語など様々な観点から日本の専門家が書き下ろした本。

... * ●—————● * ...

深澤秀夫. 2006. 『自然と文化そしてことば〈02〉特集インド洋の十字路マダガスカル』 (葫蘆舎)

上記の本に先んじていて、また扱っている分野も限られているが、マダガスカルを様々な側面から解説した本である。



... * ●



木村晴美・市田泰弘. 1995. 『はじめての手話-初歩からやさしく学べる手話の本』 (日本文芸社)

日本語対応手話全盛だった手話教育界に、日本手話オンリーで切り込んだ最初の本。

... * ●—————● * ...

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる』

2012 年 10 月 30 日 第 4 回

「様々な“文字”をめぐって ～ナシ語～」

國學院大学文学部准教授

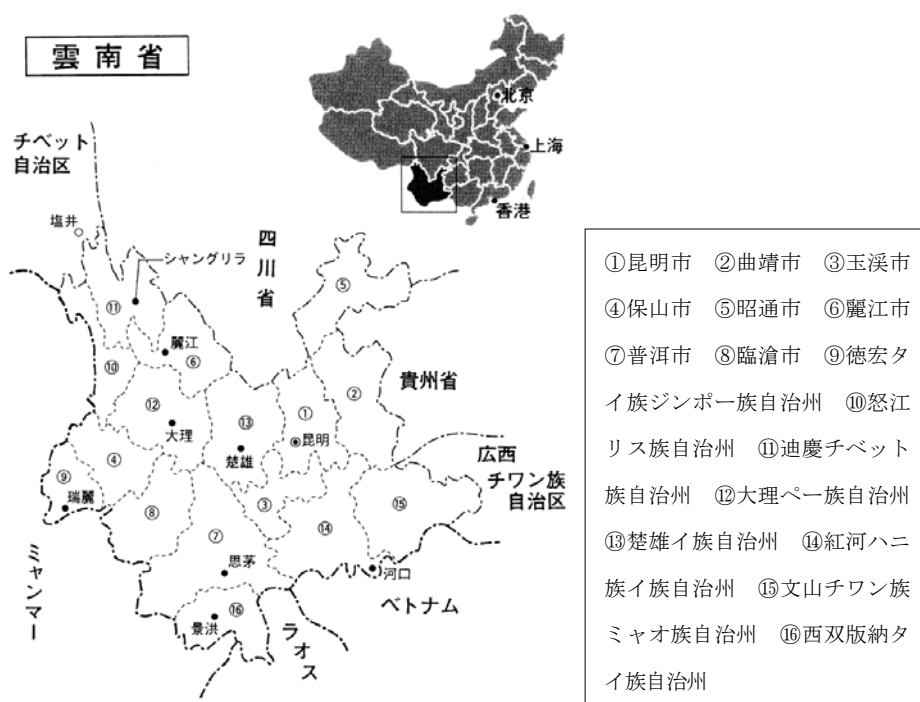
黒澤 直道

こんばんは。今日の講師を務めさせていただきます黒澤と申します。よろしくお願いします。自己紹介から始めますが、私は外語大の中国語学科卒業でして、その後、外語大の大学院に入り、中国の少数民族のナシ族という民族について勉強してきました。97 年から現地に 3 年ほど滞在しまして、ナシ語を勉強したり、ナシ族の伝承を採集したりといったことをしてきました。現在は國學院大学に所属してまして、半分は中国語の教員なのですが、半分は中国の民族の話をしたりしております。今日はこのナシ族について、特に言葉や文字についてお話をしようと思います。まず、基本的にナシ族の言語・文字というものがどういう状況になっているのかということをご紹介しまして、それから文字と言語の周辺について、今どのようなものが現地に見られるのかということをお話しし、その背景についてふれてみたいと思います。

ナシ族（納西族）の概要

ナシ族の「ナシ」は、中国語では「納西」と書きます。これは「ナシ」という発音に当てた文字でして、この漢字の意味が関係しているわけではありません。彼らは、自分たちのことは「ナシ」や「ナヒ」などという発音で呼んでいます。人口は 326,295 人で、これは 2010 年の人口調査の統計です。中国には 55 の少数民族がいて、漢民族と合わせて合計 56 民族が住んでいるのですが、民族それぞれの人口がかなり違ってまして、ナシ族はそこ中でいうと大体真ん中位の規模と思われます。この真ん中くらいという規模がまた微妙なところで、私はこれも言語や文字の状況と関わっているのではないかと思っています。次に、彼らはどこに住んでいるかといいますと、それは雲南省の西北部でして、この辺り

は海拔がかなり高い地域です。



上に中国全体の地図がありますが、その一番黒く塗られているところが雲南省です。雲南省は、ミャンマー、ベトナム、ラオスと国境を接する省で、その雲南省を拡大したものが下の大きな地図です。この雲南省自体が、日本とほぼ同じ面積がありますから、非常に大きいのですね。その中でナシ族が住んでいるのが、⑥の麗江という市でして、雲南省の中で言うと西北部ということになります。右にそれぞれの行政区の名称を挙げておきました。麗江市から北の方に上がっていくと、そこはもうチベット人のエリアになります。そして、チベット自治区が更に西北に接しております。麗江市自体はチベット自治区とは接していないのですが、やはり標高は高く、その中心地は海拔 2400 メートル前後です。それから、麗江市の北にあるのが迪慶、中国語では Dìqīng (ディーチン) と言うのですが、ここはチベット族が中心となっている自治州です。この迪慶州ですとか、雲南省の北の四川省の一部の地域や、さらに、ちょっと離れますがチベット自治区の一部の地域にも、少しナシ族が住んでいます。ただ、ナシ族の居住の一番の中心になるのは麗江市です。

中国では、1つの民族の中で更にそれがいくつかに分かれる場合、つまり、より小さいエスニック・グループに分かれる場合に、それらを「支系」と言うのですね。ナシ族の場合には、ほとんどが「ナシ」という人たちなのですが、他にも「モソ」（あるいは「ナ」）という人たちがいます。「モソ」が「ナシ」とどのような違いがあるのか、次に写真でお見せします。



ナシの住居と衣装



モソの踊りと衣装

左の写真が典型的な「ナシ」の民族衣装です。この方は私が行った時に一番お世話になった一家のおばあちゃんです。一方、右が「モソ」です。ところで日本では、意外にこちらの「モソ」の方が有名なのですね。彼らは「母系社会」の民族であるということでは知られています。もっともそれは彼らの中でも一部の習慣で、彼ら全員がそうであるということではないのですが。それでもモソは「母系社会」で、結婚の仕方に特色があって、いわゆる「通い婚」、つまり男性が夜だけ通って朝に帰るという、日本のかつての平安貴族のような風習が残されているということによく注目されたりします。ですが、モソの人口は大体4万人くらいしかありません。ナシ族全体のおよそ32万人から、モソの4万人ほどを引いた人口の、ほとんどを占めるのがナシなのですね。この二つの支系の文化にはかなりの違いがありまして、今言ったような社会の特徴も違いますし、また言葉については、両者の6〜7割は共通なのですが、3〜4割は通じないのですね。ナシの人に聞いてみても、彼らの感覚では、モソの言葉は7割くらいはわかるということです。このように両者の文化の違いは大きいのですが、中国では、政府が認めた

公式な民族としては、どちらも同じ1つの民族ということに決めているのです。

次に「麗江古城」などの世界遺産について説明します。「古城」というのは、中国語では「古い街」、つまり「オールドタウン」という意味なのですが、麗江の旧市街が1997年にユネスコの世界文化遺産に指定されて、この関連でも、時々、日本では世界遺産関係の番組などで取り上げられます。それから、今日ご紹介するナシ族の文字文献は、やはりユネスコの世界記録遺産（世界の記憶）に指定されています。また、この地域が隣接するところには、「三江併流」という3つの川が並行して流れる場所があるのですね。それが麗江市の西側になりますが、金沙江（長江の上流部）、瀾滄江（メコン川の上流部）、怒江（ミャンマーに流れるサルウィン川の上流部）の「三江」が南北に並行して流れています。この地域は非常に自然が豊かで、世界自然遺産に指定されています。ここにもナシ族が住んでいますので、ナシ族というのは、3つの世界遺産と関係しているのだということをナシ族自身は非常に誇りを持って言ったりするのです。



瓦屋根の続く古城



古城の外れから見る玉龍雪山

ここで麗江古城の写真を紹介します。現在、この地域は急速に観光地化が進んでいまして、なかなかこういう落ち着いた町並みが見られなくなっているのですが、形としては中国の昔の町並みですね。北京オリンピックの時に北京の街の整備でさんざん壊された四合院のような、もっともここは三合院が多いのですが、昔の中国の建築物がたくさん残っている感じです。右は私が住んでいた家の近くでして、直ぐ目の前が畑で、近所の人が野菜など作っていました。奥の山が玉龍雪山といって、標高5596メートルの雪山です。未だに人類未踏峰で、これが街のシンボル、あるいはナシ族自身のシンボルにもなっています。街の中は急速に観光地化していまして、日本もそうですけれど、観光地の土産物はどこで

も似たものが売られるというのは中国でも同じでして、僕がいた頃から比べても、どんどん土産物屋のエリアが広がってしまっているのですね。現在では、古い家にもともと住んでいたナシ族が、郊外のマンションに引っ越してきています。元の家の方は外からお金儲けを目当てに入って来た漢民族などに貸しまして、彼らは家賃収入を得て、その収入で郊外の新しい家に住むということが起きています。ですから今旅行に行くと、街の真ん中を歩いていてもナシ族にあまり会わない、ということすら出てきていて、これも大きな問題です。

漢民族の文化の影響は、ナシ族には非常に深く浸透してしまっていて、まず言葉そのものもそうなのですが、それ以外にも住居、食事、風俗習慣、様々な事柄が漢民族の文化の影響を受けています。どうしてそうなっているかといいますと、ナシ族の地域は、元、つまりモンゴルの時代に中央王朝の支配下に入るのですね。その後、明の時代にも同じように支配を受けます。中国の歴代の王朝は、少数民族地域の地元のリーダーを「土司（どし）」という役職に任命します。日本で言えば殿様のようなもので、一種の間接統治なのですが、麗江ではナシ族の木氏という一族が土司に任命されます。この木氏が、積極的に漢民族の文化を吸収しようということをやります。漢文化、特に漢字や漢文ですとか、漢詩などを受容していきます。

さらに、清の時代に入りますと、特に18世紀、1723年に「改土帰流」ということが行われます。これは土司の制度をやめて、中央王朝から役人を派遣して、中央の直接統治にすることなのですね。中央集権の強化です。そうすると木氏も形式的な役職だけを与えられて、実際には力を持たなくなります。この時期に入ると、漢民族の文化がナシ族の一般大衆にも浸透していきます。清は満洲族の王朝ですが、人口では漢民族が多いですから。以上が漢民族とナシ族の関係の歴史的な流れです。ですが、実はこの地域はチベットにも近いのですね。そのためチベット文化の影響もありまして、例えば生活の中に入っているものと、バター茶があります。バター茶というのはチベット人が一日に6回くらい飲むバターが入ったお茶ですが、ナシ族もこれを飲んでいるのですね。ナシ族が飲んでいるバター茶には、くるみをいれたりします。バター茶は、本来チベット人の文化なのですが、ナシ族はこれを吸収しています。

また、チベットの仏教寺院もこの地域に造られてしまっていて、ある時期にはチベット仏教がかなり広まったということがあります。それから、彼ら自身の宗教であるとされる「トンパ教」というのも、その文字は特殊なのですが、儀礼の

やり方とか、そこで使う道具などをみるとかなりチベットの的なですね。ですからこれもチベット文化の影響の下にあるだろうと考えられます。また、先ほどの明代のナシ族の土司は、当時のチベットの方にも勢力を延ばしたりしていますし、チベット仏教の活仏、転生ラマと最近は言うようですが、活仏とも交流をしたりしています。

ところで、ナシ族に関する研究としては、実は「ナシ学」という分野がありまして、「国際ナシ学会」という学会もあります。といっても日本ではこれに関わるのは私以外には数人しかいないのですけど。前回のナシ学会は、2009年に雲南省で行われた民族学・人類学の大会の中の分科会でした。これは「ナシ学研究の新しい視野」というテーマで開かれて、世界各国から100人くらいのナシ学研究者が集まりまして、まるまる5日間ナシ族の話だけをするという、結構、規模としては大きいものなのです。

ナシ語の特徴

ナシ語は言語系統で見ると、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語群のイ語系で、チベット語やビルマ語を代表とするような語群の中に、ナシ語が含まれております。さらに、この語群の中ではイ語という言語に近く、イ語はイ族という民族によって話されております。現在の中国では、イ族は「彝族」と書きます。なお、このイ語には非常に特徴的な文字があることで有名です。このようにナシ語は、いわゆる中国語、つまり漢民族の漢語とは全く系統の異なるものですが、先ほど申し上げたように、ナシ族は古くから漢民族の影響を受けていますので、その意味では漢語からも大きな影響を被っています。

ナシ語の音節は、子音（ただし、子音がない場合もあります）と母音、それに声調がかぶさるという構造で、音節末に子音は来ません。ですから開音節、日本語と同じような音節の構造をしています。大まかに言って、子音が31種、単純母音が11種、二重母音が11種、ただし、数え方もいろいろありまして、特に漢語からの影響を考えると、漢語には二重母音、三重母音があるわけで、それを借用語として認めると、母音の数は増えてしまいます。どこで線引するかが難しいのですが、一応11種という考え方を示しました。それから二重母音のうちの3つは漢語からの借用語にしか出ない。つまり本来のナシ語には無かった母音ということになります。ですから本来は、音節としては単純母音がメインだったの

だろうと考えられています。

ナシ語では声調が4種あります。実際の高さを数字で表しますと55、33、11、13となります。この数字は低い方から1~5と目盛りをふったもので、55というのはスタートが5で終わりが5ですから、ずっと高い音ですね。それから33は真ん中の高さ、11は低い音ですね（これを21とする見方もあります）。それに13という具合に、ちょっとだけ上がるものもあります。ただ、この13は非常に数が少ないので、全体としては高いか、真ん中か、低いかなのですね。そうしますと、中国語、例えば北京語ですと上がったたり下がったりする声調がありますが、それに比べるとより平板な単純な構造をしています。例えば「ナシ族」は、/na11 ʧi33/、こういう音になります。「日本」はなんと言うかということ、これは中国語からの借用語ですが、本来の中国語ですとRì běnとなりますが、ナシ語は/ɹɪ13 pe33/となります。音節末に子音が来ないので、中国語のnが落ち、声調も簡単になります。

文法では、ちょっとだけ日本語に近いと言われるのは語順です。ナシ語の基本的な構造では、主語－目的語－動詞という順で、動詞が一番最後に来ます。例えば、「私は日本人です。」というのは、“Ngeq Reefbei xi waq.”となります（このローマ字は後で紹介する、現在最も実用的と思われるローマ字です）。ngeqは「私」。Reefbeiが「日本」、xiが「人」で、「日本人」はReefbei xiです。最後のwaq、これは「〇〇である」という動詞で、文全体はSOVの形になっています。

現在、ナシ族のほとんどは漢語とナシ語のバイリンガルです。ナシ語しか喋れない人はほとんどいません。全然いないわけではないですが、本当に少しです。彼らは日常的に漢語を話しているわけですが、その漢語はナシ語訛りになります。発音の面では、漢民族にはかなり聞き取りづらいような訛りが出てきたりしますし、文法では、語順が転倒したりします。漢語を喋るときにも、最後に動詞を持って来たりする癖がなかなか抜けないようで、特に都会に出てくると、ナシ語訛りで悩む人もいます。私もなかなかナシ訛りが直らなくて困っているという人に会ったことがあります。

ナシ語は、基本的にはナシ族の家庭内での会話や、ナシ族同士のコミュニケーションで使われるのですが、彼らは文章は基本的に漢語で書くので、書き言葉としてナシ語を使うことはほぼありません。

ナシ語の伝統的な文字

主に二種類の文字が、ナシ語の伝統的な文字としてよく挙げられます。その一つはトンバ文字、もう一つがゴバ文字です。トンバ文字は、儀礼を行うトンバという祭司がいて、彼らが宗教儀礼の中で読み上げる経典があり、その中で使われている文字です。この経典をトンバ経典といたり、ゴバ文字で書かれたものはゴバ経典と呼びます。そしてこうした宗教を、と言っても果たしてこれが宗教なのかという疑問もあるのですが、トンバ教と呼んでいます。

後の「ナシ文字を読む」の節に、トンバ経典の例を挙げておきました。その資料の上に書かれてあるのが経典のトンバ文字で、その読み方を IPA で下に記してあります。これは李霖燦という人が残した研究なのですが、非常に詳しい研究で大変参考になるものです。後で時間がありましたらこれを読みたいと思います。

トンバ文字にはどのような特徴があるかという、まずその形が特徴的で、いわゆる象形文字であるということでは有名なのですが、それ以外の大きな特徴としては、文字と言語が十分に対応しないことがあります。1つの文字が何を表しているのかということが非常に曖昧で、ある場合には音節を表し、ある場合には単語を表し、またある場合には一つの文、甚だしくは一まとまりの文章が一文字になっていたりします。しかもそれが、この時には音を表すとか、この時には単語を表すと書いてあれば良いのですが、それも書いてない。そうしますと、最初から中身を覚えている人にしか正確には読めない。事前に分からない内容があれば読めませんから通信には使えない。ただし、通信に使っているという例もあるのですが、それは相当高度な以心伝心があるようで、普通にできるものではないのですね。では結局、何のためにこの文字を書いたり読んだりしているかというと、儀礼でこれを読み上げるというのが主な用途でありまして、神様にそれを捧げるわけですから、その行為自体に意味を与えているのだろう、ということです。

次はゴバ文字についてですが、これは一文字が一音節を表す文字で、一見すると合理的です。ちょうど日本語のひらがな・カタカナと同じようなシステムで、書いたとおりに読むのですから、これは読みやすいだろうと思われるのですが、実は1つの文字の異体字が何種類もありまして、やはり読むことが大変難しい。かつてゴバ文字の字典も作られたことがあるのですが、1つの音節の字がズラッと並んでいて、容易に記憶できません。また、この文字の形は、漢字やイ族

の文字と似ていると言われていますが、まだあまり研究されていません。それにはゴバ經典の量が少ないということもあるのですね。ゴバ經典は、ナシ族の經典全体の、およそ1割程度しかありません。さらに、象形文字ならば文字を覚えやすいのですが、こちらは意味と関わりのない音の文字で、しかもたくさんあるので覚えづらく、ナシ族出身の研究者もあまり研究ができないという問題があります。これらトンバ經典やゴバ經典には、ナシ族の神話や民話などの口頭伝承や、ナシ族の民謡と関わる内容や、トンバ教の中で行われる儀礼のしきたりや占いにかかわる内容などが含まれています。

ところで、トンバ教というものが今はどうなっているのかといいますと、例えば、トンバ教には本来お葬式もあったのですが、今では生きた形では行われていません。儀礼を行うトンバがどんどん亡くなってしまい、特に多くの經典を読める人は、この数年のうちにほとんど亡くなっていて、今はむしろ若いトンバを養成しようということが始まっています。実際には宗教としての意味はほとんど失っているわけです。一方、麗江古城が世界遺産に指定されてからは観光地化が著しく、特に中国の場合は、いったん世界遺産に指定されると、それを看板にして急激に観光開発が進行してしまいます。世界遺産に指定されたがために、地元が破壊されるような状況も起こってくるのですね。そういう状況の下で、トンバ文字が面白いので脚光を浴びるようになってしまい、トンバ文字グッズとでも言いますか、お土産などにトンバ文字が使われています。【現地で売られている土産物を見せる】これは、雲南省の南の方ではコーヒー栽培をしていて、雲南コーヒーというのがあるのですが、その袋がトンバ文字というものです。トンバとコーヒーとは何も関係がないのですけど。確かに、お土産としては面白いと思うのですが、今ではトンバ文字はこういう観光土産みたいな使われ方をしているということです。

ナシ語の現代的な文字

次に、ナシ語の現代的な文字ということで、先のトンバ文字などとは違って、実際に使えるような文字としてはどういうものがあるのかということをご紹介します。まず挙げられるのは、ナシ語の現代ローマ字、この方式は中国語では「納西族文字方案」といいますが、これがナシ語の最も実用的と考えられる文字です。これは、中国語（漢語）で発音を表記するのに用いるピンインローマ字にも一部

共通点をもたせたものです。この文字は、1957年に草案が作られて、その後80年代に、雲南省の民族事務委員会というところで認定され、それ以降このローマ字を使った出版物が出てきます。これまで出版されたものは30数種類ですが(シリーズ物になっているものもあるので種類としました)、それぞれの発行部数が非常に少ないのです。例えばこれは80年代に書かれた小学校の教科書です。【現物を回覧する】この他には、ナシ語の民謡ですとか、カスタネット劇の脚本ですとか、トンバ經典の内容をこの文字で書いたものもあります。それから、農業技術の解説書、例えばこれがタバコの葉の栽培法です。ただし、実際こうしたローマ字の表記法がどれくらい使われたのかということは、後でお話ししたいと思います。それから、意外に多いのが共産党の文書であるとか、憲法・法律の類、例えばこれは中華人民共和国憲法のナシ語版です。こららが全てこのローマ字で書かれております。(受講者: ちょっとよろしいですか? 声調でlとqとfって使ってるじゃないですか? 中国語とかベトナム語なんかだとちょんちょんやったりするんで、何でこんなlだのqだのfだのを使ったのかというのが1つと、それから、何でl、q、fなのか、何かの略号なのか?) ナシ語のローマ字では、初期の段階では母音の上につける方法もありました。しかしその後これに変わります。こちらの方が印刷の面で言うと簡単なのですよね。補助記号をつけるというのはその文字を作っておかなきゃいけないので。最近ですと、パソコンではこちらの方がむしろ簡単ですね。また、これらは何かの略号というわけではなく、規則として当てただけだと思います。

1つの言語にとって、新聞があるかないかというのは非常に大きなことだと思うのですが、ナシ語の場合には「麗江納西文報」というものがありました。ナシ語で書くと、と言ってもこれは全部漢語からの借用語ですが、LILJIA NAQXI WEIQ BALとなります。ただしこれは年に1号か2号しか出ていない。それもタブロイド版の大きさと4ページしかないで、紙一枚ですね。80年代から始まって合計で82号しか出ていません。中国ではこういう出版物に必ず許可番号というものが要るのです。雲南省内部公刊の許可番号というのがあり、この新聞の番号が131号で、これがないと出せないのですけれど、最後には何故か他の雑誌か何かにこの番号をとられてしまったそうです。象徴的なのは、こういう事業に地元の理解がないことです。新聞があることは非常に大事なことでないかと我々は思うのですが、それがなかなかうまく行かない。

さて、以上にご紹介したナシ語のローマ字はどれくらい使われているかという

ことですが、現状では一部の小学校のナシ語の教育、それから伝統文化の継承運動、こういうものが少しはあり、その中では使われてはいるのですが、十分に普及していると言うわけではありません。これを読み書き出来る人はまだ非常に少ないのです。私はこうした本を作ったりしている人と、ナシ語でメールのやりとりをしているのですが、それが出来る人はその人くらいしかいないのです。この背景としては、彼らはバイリンガルで中国語（漢語）が浸透してしまっている。わざわざナシ語を、それもちょっと変わった規則のローマ字で書くよりは、漢語で書いてしまった方が早いということがあるのですね。

その他の文字・表記法

次に、その他の文字・表記法についてご紹介します。まずは1つは、漢字を使って当て字でナシ語を書くものです。これはかつての日本の万葉仮名、古代日本語を書くために中国の漢字を使って当て字をしたのと同じようなものです。当て字をしたところに、それがわかるように点を打ったりしたものもあります。しかし、こういうものはナシ族の中ではあまり着目されず、資料として出版されているものもありません。

ところが最近、ナシ語のポップ・ミュージック、つまりナシ語で歌う歌が民謡ではなくポップスとして出てきたのですね。それがこの5～6年のことでして、大体2005年くらいから始まったのですが、その中で、ナシ語の歌詞を書くために漢字で当て字をしているのですね。ただし、漢語とナシ語の発音の違いは大きいので、ナシ族の人もその漢字だけでは正確には読めないのです。そのため、同時にわざわざ漢語の訳をつけることが多いです。

他にも文字や表記法はあるかという、これはローマ字の一種ですが、ジョゼフ・ロックと言う人が作った表記法があります。ナシ族の研究を一番したのは、このジョゼフ・ロックというオーストリア生まれのアメリカ人です。1920年代から49年まで、つまり中華人民共和国の成立時期まで現地に滞在し、元々は植物学者なのですが、途中からナシ族の経典を集めて研究した人です。ただし、この人は元々言語学者ではないので、表記のやり方が非常に独特なのです。今になってみると何の発音か分からないものすらあって、かなり混乱を招いています。

また、キリスト教の聖書も、ナシ語に一部分だけ翻訳されたことがありました。1930年代のはじめ、オランダの宣教師のスハルテンという人がここで布教をし

て、聖書の「マルコによる福音書」をナシ語に訳し、上海で出版しています。この種の文字は「フレーザー文字」というもので、東南アジアや中国のリス族などに布教するためにキリスト教の宣教師が作った文字があり、これはその方式を用いています。ただし、ナシ族ではキリスト教はほとんど広まらなかったのもので、これ1冊が訳されただけでした。これは言葉としては、先程の経典ではなく、普段話される言葉で書かれていますので、その意味では、一番早い時期に記録された口語のナシ語のテキストということになると思います。

それから、他にも一部の研究者がナシ語の表記法を作っていて、1つはドイツのサンスクリット学者でヤネルトという人がいて、ナシ族の文字にも興味があったようで、ドイツまでナシ族の学者を招聘して、ナシ語による民話集を作りました。80年代ですのでタイプライターで打ち込んだ文字です。しかしこれも一冊だけ出版して、その後は広まるということはありませんでした。また、日本でも地理学者でナシ族の研究をなさった先生がいて、学習院大のゼミでゼミ雑誌を作って、その中で日本のヘボン式ローマ字に近いものを使っています。ただし、これもこれだけで終わっていますので、これまで一番多く出版され使われているものは、やはり先に挙げたナシ族文字方案ということになります。

ナシ語を学ぶ

私自身の麗江での長期滞在は1997年からで、およそ3年間、ナシ語をゼロから学びました。最初の1年くらいは単語の聞き取りと録音をひたすらやっておりました。何ヶ月かすると発音の体系が分かかってきて、そうして少しずつ勉強していったのですが、この頃に役に立ったのが、ナシ語と漢語の対照教科書で『納漢会話』というものです。これは、単に会話文を、ナシ語と漢語で並べてあるだけで、説明などは一切ないのですが、これがあると随分勉強しやすくなりました。ただ問題は、このナシ語のローマ字は、ほとんどのナシ族には読めないのもので、まずローマ字に従って自分で発音してナシ族の人に聞かせ、それをもう一度言ってくださいという手順で録音しなければならないことです。3年間の最初の1年ほど、そういうことをやりまして、2年目から口頭伝承の採集を始めました。これも難しかったのですが、その後3年目の終わりまで、ひたすらそれをしていました。ただ実際には、そういうものをたくさん採ったり記録したり出来たわけではなくて、できたのはほんの少しなのですが、それを使って博士論文を書きまし

た。

こういう作業をやって分かったのは、まず、伝統文化の語り手がどんどんいなくなっているということです。それからナシ族の場合は、先にご紹介した象形文字の方が立派な文化だという風に、彼ら自身は考えているのですね。ですから、普通の人が語る神話や民話なんかとらなくていいじゃないかと言われてたりするのです。君は何で象形文字をやらないのか、あれをやりなさい、と説教されたりします。そういうことがけっこう障害になりました。それから、ナシ語の中にも方言の差があり、これもかなり難しかったのですけれど、なんとか1つのテキストを取り上げて、それを博論で使いました。それで現在は何をしているかというところ、ナシ族文字方案によって出版されたものはほぼ集め終わっていますので、それを読み、また、口語の辞書がほとんど無いものですから、語彙を整理したり、あるいは文法の用例を集めてその意味を考えたりということをしています。

ナシ族におけるナシ語教育

次に、彼ら自身の中でナシ語はどう教えられているのかといいますと、これは最初は 80 年代から始まりました。それより前には、学校の中は全て漢語による教育で、ナシ語は教えられていませんでした。80 年代以降にナシ語の教育が少しずつ始まるのですが、90 年代の初めまでは、ナシ族がたくさん住んでいるところでは行われていないのですね。むしろ山の奥の辺鄙な地域で行われています。これは何が目的かというと、中国では「掃盲」というのですが、識字運動なんです。文盲撲滅ということですね。彼らは漢語を話せても文字は書けない。つまり文字を使えない人たちなので、その人たちにナシ語の文字を教えようといわれたのですね。一方、中心部の人たちはある程度漢語が書けるので、やらなくても良いということになります。そのため、この運動は中心部ではなく辺鄙な所で行われました。結果として、当時 2000 人余りが文盲を脱したという記録があります。

このように、ナシ族が漢語とナシ語のバイリンガルである地域ではナシ語なんて書く必要がないとされました。一方、リス族という民族が同じ地域に住んでいるのですが、彼らは逆に漢語を書けない人が多いので、リス族の中ではリス語の文字による出版物が多いのですね。この点、ナシ族とはかなり対照的です。しかしその後、私がいた 1990 年代の末からは、ナシ語が無くなっていくという危機感が出てきます。これは世界遺産とも関連しています。世界遺産に指定されて、

外から色々な人が来て、ナシ語はどうなってるのかと言うわけです。そうすると、そういえばナシ語って学校でも教えていないし、もしかして今後無くなっていくのかなということが、自分たちにもやっと分かってくる。それが 90 年代の末です。そこで始まったのがトンバ文化の教育で、象形文字を伝承しようということがまず始まって、その後にそれに付随してナシ語の教育が行われるようになってきます。

2001 年には、ある小学校で正規のカリキュラムにナシ語が入りました。それを「母語課」と言っています。そして 2003 年くらいから、それが中心部の 13 の小学校に広がります。ただ小学校はもっとたくさんありますので、13 というのは全体の中では少ない。コマ数も、週 2 コマくらいしかありません。しかも漢族やチベット族の子どもなど、ナシ語を母語としない子どももいるので、ナシ語と漢語を併用した授業をしています。私は 2004 年にその一部を参観しましたが、先生が教えたのはやはり象形文字なのですね。まず象形文字を書いて、その発音をローマ字で書いて、中国語の意味を書いてという具合です。こういう運動が象形文字に向かうことが非常に象徴的だと思います。これが彼らの伝統文化に対する考え方なのですね。

ナシ語の現在

次はナシ語の現在について、多少新しい情報を交えてお話しします。まず最初に、ナシ語の放送はどうなっているかということですが、これも非常に少ないのです。最初はラジオで始まるのですが、2003 年くらいからテレビ放送になります。ただしそれも一週間に一日、土曜日に 10 分間ほどで、一週間のニュースのまとめをナシ語でやっている。そしてそれが日曜日に再放送される。その程度なのです。それからトンバ文化の講座、これは日曜日に 50 分くらい流すもので、象形文字の書き方・読み方などを教えるものです。ところで、ナシ語のアナウンサーの多くは中心部から非常に離れた地域の出身者です。漢語の影響を受けていない地域の人ほど、ちゃんとしたナシ語を喋れるのだと彼らは考えているので、そのためにわざわざそういう人を採用しているのです。ところがこのニュースは、かなりナシ語の言い回しが凝っていて、一般のナシ族、特に街の若いナシ族にはそれが分からないというのです。全部ではないのですが、難しい言い回しを使うところが分からないといいます。そういう矛盾が出てきているのです。

それから去年から始まった、ラジオの一口ナシ語会話というような番組があります。定時のニュースの後に一日数分間、ナシ語のフレーズを流すもので、これはむしろ子ども向けですね。子どもたちがナシ語を忘れないようにということで、常用の単語や会話文を中心にしています。また、小学校の先生が中心となってナシ語の童謡を集めて、ローマ字で書いたものを出版し、2010 年にそれを DVD にしました。これは現場の先生たちが頑張ったものです。これを今お見せします。

【DVD を再生】字幕に、漢字の当て字ではなく、ナシ語のローマ字が使われたのはおそらくこれが初めてです。

ところで、ナシ語のポップ・ミュージックが結構最近盛んになってきています。もともとナシ族の民謡はあるのですが、これはそれとは一線を画したものです。例えば新しいものでは『二月八』という曲があり、これは 2 月 8 日ということで、この日にナシ族のお祭りがあるんです。【動画再生】これは少しロックバンド風になっていまして、2 月 8 日のお祭りに椿の花を見に行くと約束したのに、君は何で来ないのかという内容なのです。ナシ語がこういうメディア、それもポップ・ミュージックのメディアに乗ってきたというのがこの数年の新しい動きですね。これは結構意味が大きいのではないかと私は考えています。けれども、そこではやはり文字がネックになるわけで、この字幕のようにやはり万葉仮名方式になってしまうのですね。

それから、最近では現地でスター発掘番組のようなものも行われています。最近、若干 13 歳でデビューしたナシ族少女歌手という人がいまして、この子が歌っている歌が極めてナシ族主義的なもので、「ナシ族がナシ語を話さなければ先祖が怒る」と、言ってみればナシ語意識がポップ・ミュージックとつながった 1 つの現われかと思えます。【動画再生】ナシ族がナシ語を喋らなければ先祖が怒り、ナシ族がナシ族の踊りを踊らなければ面子が潰れる、という内容です。

ナシ族の言語・文字の背景

ナシ族の場合、トンバ文字やトンバ文化というものに資本や労力が多く投入されていて、それはやはり観光開発とも絡んでいると思うのですね。これらは注目を引きやすいですからお金になる。一方、より身近なナシ語や、ナシ語で書かれた本や新聞、放送、これらは非常に貧弱な状況にありますね。ただ、その中で唯一目立っているのは最近のナシ語のポップ・ミュージックなのではないかと思っ

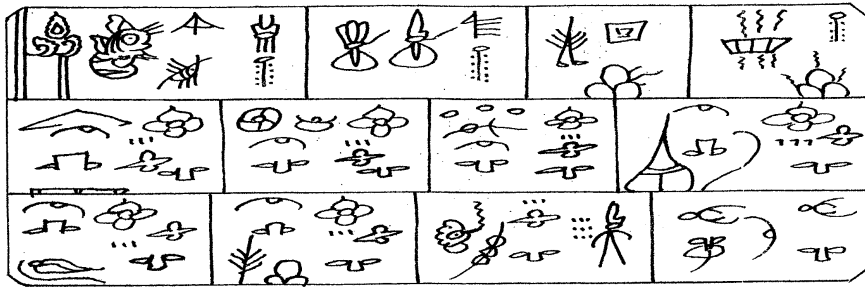
ています。トンバ文化の方は、90年代の末から伝承教育が始まって、組織がたくさん作られるのですね。その中でトンバ文字、踊り、儀礼、それから2003年くらいからは、トンバ文化の教材というものがたくさん出ています。これらトンバ文字や文化の教科書には、一個一個の文字の書き方の練習や、トンバ文字のテキストですとか、儀礼の教材まであります。これこれの儀礼ではここにこういう供え物を置くとか、そういうことまで教科書にしている。伝承が廃れてきているのでそれは仕方がないのですが、こういったものに彼らの労力が非常に多く投入されています。

こうした状況の背景には、古い象形文字ですとか、儀礼ですとか、そういうもののこそがナシ族の伝統文化なのだという考え方があるのではないかと思います。もっとも、一般のナシ族にはその中身はよく分からないのですね。分からないのだけれども、それこそが伝統文化なのだと。「古いものが良い」というのは中国的な考え方ですね。ナシ語の放送でも、先ほど言ったように若い人が分からないような言い回しも使われる。そこにはなるべく「正統的な」ナシ語を求める傾向があって、普段喋っているナシ語は漢語の影響で崩れていると考えているのですね。しかしそれが、最近のポップ・ミュージックに見られるような、ごく普通のナシ語の文化に、最近になってやっと彼らの意識が到達してきたのかなと思います。

ところでナシ族には、非常に知識人が多いのですね。中国では知識人は政治家にもなります。そういう人がかなり多くて、巧みに今の中国の状況に適応していると思います。チベット人などの大きい民族に比べると、人口は少ないのですが、漢民族中心の今の中国の中で、かなり上手く生きています。中国の文化の脈絡に、自分たちの文化を上手くはめ込んでいるようなところもあります。その1つの例としてトンバ文字の書道というものがあります。書道は本来漢字の、つまり漢民族の文化ですけど、ナシ族はトンバ文字を書道作品にしています。トンバ文字は、本来は横書きの文字ですけど、それを中国風の書道作品にして、かつ、その意味を漢字で横に書いたりします。このように、中国文化への適応は非常にうまいのですけれど、その反面、今までご紹介したような日常的なナシ語にはあまり注目が集まらず、これまで十分に実用的な文字が広まっていない背景としてあるのではないかと思います。

ナシ文字を「読む」

次にトンバ文字の資料などを使い、実際の文字がどのようなものかということをご紹介します。



① 從 前 的 時 候 天 上 有 一 個 陰 神 喝 和 會 時 未 生 起 走 會
 時 石 裂 開 說 話 會 時 地 大 上 石 動 盪 出 那 時

(李霖燦ほか『麼些經典譯注九種』国立編譯館中華叢書編審委員会、1978年より)

この資料は、上に經典の文字があり、下がその冒頭部分のナシ語の読みを音声記号で記したものです。この資料の優れているところは、どの部分の発音がどの文字に当たるかを、下の音声記号にも書いてあることですね。多くの句が5音節になっています。儀礼で朗唱されるものなので、一種の韻文になっているわけですね。これを発音しますと、ei la me sherl ni, mee leel zhvl gvl rheeq, Lo Seiq hoq gvl rheeq, ser zzeeq jji gvl rheeq, lv ggee dal gvl rheeq, ddiuq ddeeq zheel lv niolnio tv tee rheeq. となります(音声記号を、一般的な発音のローマ字表記に転写。以下ではカナでおよその発音を示す)。この中でトンバ文字がどのように使われているかといいますと、まず「エラムシャニ(ei la me sherl ni)」の「ラ」の上に虎の絵が描いてありまして、これが經典の一文字目です。ちなみに虎の前にある文字は、經典がここから始まるというチベットの經典の頭に出てくる書式です。「エラムシャニ」というのは「昔々」という經典の中の決まり文句なのですけれど、虎の文字はその2音節目の「ラ」を表しています。実はこれは、虎とは別に関係は無く、「虎」というのがナシ語で「ラ」なので、音を当てている

だけなのです。

次は「ムルチョクジ (mee leel zhvl gvl rheeQ)」これは「天と地が混沌としていた時」という意味で、日本の神話にもあるような、天と地がまだ分かれていない、天と地の混沌とした時という意味なのですが、まず傘のような文字があつて、これが「天 (ム)」です。これは天空の象形文字ですので、なんとなく分かりますね。次に、漢語の訳文では「天下」となっていますが、本来「ル」は地面ですので、「天地」ですね。「地 (ル)」に当たるのは、天の文字の下文字ですが、これは何かお分かりになりますか？これも当て字で、「ル」と読む象形文字を書いています。実はこれは牛の皮膚、皮の下につく寄生虫の形なのですね。発音は「ル」。だから当て字をしているわけですね。次の、「チョク」というところは、漢語訳に「混沌」とありますが、チョクの「ク」のところだけ当て字があつて、それが「天」の右側にある文字です。これはちょっと考えて頂ければ分かるかもしれないですね。何かの野菜を表す文字です。下にあるのは根っこでしょうね。皆さんお買いになるときは根っこはとられているのですが、置きっぱなしにしておくと上の方が割れてくるので、こういう形になるんじゃないかと思います。実はこれはニンニクですね。それから、最後の「ジ」は「時」という意味なのですが、これはトンパ文字の研究者も、何故この文字が「時」を表すのかはあまりよく分からないようです。一説には水時計だと言うのです。水時計の横に点が6個、ここでは数が少ないのですけれど、本来なら6個ずつ描いて、時刻を表しているのではないかと、とかですね。

「ロセホクジ (Lo Seiq hoq gvl rheeQ)」は「ロの神とセの神が唱和できた時」という意味で、最初は神様の名前です。「ロの神」と「セの神」、訳では「陽神」「陰神」とありますが、つまりは男性神と女性神ですね。しばしばセットで出てくる神様がいて、これはその神様専用の文字です。「ホ」は、漢語訳では「唱和」とあります。歌を歌い合っているのでしょう。「ホ」を記すのは、当て字で発音を表す文字で、上の経典の文字だと、先が三角形になっているので分かりづらくかも知れないですが、これは「肋骨」です。「肋骨」の発音が「ホ」なので、当て字をしています。同時に、ロの神、セの神の口からも線が出ています。線は言葉とか歌とか、何かが口から出ていることを表しています。

「サズジクジ (ser zzeeq jji gvl rheeQ)」は、「木が生えて歩くことができた時」という意味です。木に足がありますので、木が歩くということを表します。よく見ると片足を前に踏み出しているようで、動きが入っているのです。それから「ル

クタクジ (lv ggee dal gvl rhee q)」。これは「岩が割れて話ができた時」という意味で、確かに文字では3つの丸がくっついた岩の右側が、口のような形になっていて、言葉を表す線が出ていますね。上には二重の四角があるのですが、これは「箱」という意味の象形文字で、「タ」の音を当て字しています。最後は、「大地と土石が揺れ動いていた、その時 (ddiuq ddeeq zheel lv niolnio tv tee rhee q)」。

経典をご覧くださいと、台形をひっくり返したような形が「地面」で、波線は揺れ動く様を表しています。右下はやはり「岩」ですね。土や石が揺れ動いている、そういう時ということです。

以上が、ナシ族の神話の始まりの一節です。今ご説明したように、ここではかなり当て字が多いですね。象形文字といっても、文字一つ一つの意味は分かりやすいけれども、当て字は単に同音であるだけで、書こうとしている言葉と書かれる文字には全く関係がないわけです。かなりの部分がそういう使い方をされていますから、象形文字だけを見て、絵文字だから意味が分かるだろうと思うと、結局はナシ語が分からないとテキストを辿れないということが言えると思います。

最後に、一言だけですが、ナシ語の会話を皆さんにも少し発音していただこうと思います。この資料はナシ語と漢語の対照になっています。(和即仁編著『納漢会話』雲南民族出版社、1990年より)

Milddo : Neeq eneiq miq lei? (問：你叫什么名字?)

Daqyil : Ngeq Eldeif miq. (答：我叫阿德。)

これは自己紹介ですね。「あなたは何という名前ですか?」。ナシ語の「問い」は Milddo (ミド) です。問いのナシ語は「ニュ アネ ミ レ?」と発音します。neeq が「あなた」、eneiq が「誰」、miq は漢語の「名 míng」から来ているのですが、ナシ語では「～という名前である」という動詞です。最後に疑問を表す lei がついて、「あなたは何と言う名前ですか?」となります。答えは「ガ アテ ミ」。ngeq が「私」です。ではどうぞ発音してみてください。Neeq eneiq miq lei? — Ngeq Eldeif miq.

以上、ちょっと慌ただしかったかも知れませんが、ご清聴ありがとうございました。



観光地化の波は止まらない

… ＊ ◆ ————— ◆ ＊ …

麗江旧市街が世界文化遺産に登録されてから、麗江の観光地化は急速に進んだ。どの社会も時間とともに変容してゆくものであるが、麗江におけるそれはあまりに急激であった。筆者が最初に麗江を訪れたのは 1996 年の 8 月。新市街の福慧路という通りにあったホテルに宿をとった。今では麗江開発の先端に行くこの通りも、当時はまだ舗装されておらず埃っぽく、薄暗い鄙びた食堂がぽつぽつとある程度であった。ホテルの設備はあちこちがガタついていて、古びたソファアーに座るとギシギシと音を出しながら尻が沈んだ。

その後、旧市街の外れにある建物に住むことになり、それからのおよそ 3 年間、ナシ族と交流しながらナシ語を学んだ。この間にも、観光客は年々増え続け、5 月と 10 月の大型連休には、旧市街の狭い通りは人で溢れ、まともに歩くことす

らできなくなった。新市街では古い建物が次々と取り壊され、ピカピカのビルに建て替えられた。旧市街の木造家屋は、外から来た者が経営する土産物店や旅館に改装されていった。それでも筆者の住まいはナシ族の居住地なのでまだ静かな方で、夜の 9 時には暗闇と静寂に包まれていた。

筆者が麗江を離れた 2000 年以降も、観光地化の波は止まらなかった。訪問するごとに、かつての友人や知り合いは旧市街からいなくなっていた。旧市街には、大音響の音楽で客を呼び込むバーや、肌を露出した女性が踊る怪しい店まで現れた。筆者の住んだ住居も、いつの間にか観光客向けの高級な旅館に改装されていた。2011 年に訪れた時、それまで中心の広場で毎夜行われていたナシ族の踊りが見られないのに気がついた。聞けば、もうこの辺りにはナシ族はいないから、伝統的な踊りもできないのだという。

最近では「国連が麗江を壊した」という嘆きの言葉すら、ナシ族の口から聞かれるようになった。世界遺産になる前の麗江を撮影した海外の TV 番組を見て、かつての麗江を懐かしむナシ族もいる。文化遺産の保護のための「世界遺産」という看板が、ナシ族の生きたコミュニティを回復できないほどに壊してしまったのは、皮肉としか言いようがない。

ナシ語とナシ文化を知るための3冊

・*・...†...・*・*・...†...・*・*・...†...・*・



和即仁・姜竹儀編著. 1985. 『纳西語簡志』. 民族出版社（北京）.

中国の学者によるナシ語の概説書。ナシ語の発音、語彙、文法、方言、文字についてコンパクトに述べられ、巻末には語彙集がある。本書に記述されたナシ語の発音は、現在の中心地の発音とはやや異なるものの、ナシ語の学習を進める上で基本となる書である。

...・*・ ————— ・*・...

李霖燦編著.

1972. 『麼些象形文字標音文字字典』. 文史哲出版社（台北）.
2001. 『纳西族象形標音文字字典』. 雲南民族出版社（昆明）.

日本でも人気の高いナシ文字を研究した基本的文献の一つ。1930年代から行われた李霖燦による詳細な調査・研究の成果である。テーマごとに配列されたトンバ文字の字典と、発音順に配列されたゴバ文字の字典を合わせたもの。近年、中国大陸で整理・再版されている。



...・*・ ————— ・*・...



黒澤直道. 2011. 『ナシ族の古典文学』. 雄山閣.

ナシ族の代表的な古典文学作品といえる情死の経典『ルバルザ』を邦訳し、さらにナシ族の文化全般について解説したもの。解説部分の第3章では、ナシ語と文字の特徴、ナシ語による出版物、ナシ語で歌われる近年のポップミュージックなどについて解説した。

...・*・ ————— ・*・...

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をさわめる』

2012 年 11 月 6 日 第 5 回

「フィールドワークと言葉の語彙 ～パミールの言語・ワヒー語～」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

吉枝 聡子

吉枝と申します。専門はイラン系言語で、普段は大学でペルシア語やイラン言語学を主に教えています。ここ 10 年くらい定期的に、同じイラン系でパミール諸語に属する、ワヒー語という言語を調査しています。先日語学研究所から、何か少数言語をテーマにということで話がありましたので、今日はその話をしようかと思います。講座の共通テーマが語彙ですので、まず現地の自然環境や言語環境等の基本的な説明をしてから、特に語彙の面から見えてくる現地のありようを描き出してみたいと思います。

ワヒー語圏・フンザ～ゴジャール地方外観：地理自然条件

まずワヒー語の分布域ですが、タジキスタン・アフガニスタンに分布するワハン回廊、北部パキスタンのギルギット・バルティスタン州北部、中国の 4 カ国にわたっています。ワヒー語は分布地域によって方言差があり、私が調査しているのは、北部パキスタンの通称ゴジャールと呼ばれる、上部フンザ地方で話されているワヒー語です。これを特に、他の変種と区別する意味でゴジャール・ワヒー語と呼んでいます。パキスタン側のワヒー語話者は、アフガニスタンのワハン回廊側からパキスタン側に移住してきたと考えられています。

ワヒー語はパミール諸語に属すると言いましたが、パミールというのはどういう意味かご存じでしょうか。「パミール」という言葉は、一般に「パミール高原」などで日本では知られていますが、ワヒー語では、高度が 4000m を超するような高地にある、家畜が放牧できるような開けた場所をパミール (pomer) と呼びます。つまり、「パミール高原」というのは、「高原」を 2 回と繰り返しているのに近いことになります。サハラ砂漠などと同じですね。

さて、この一帯はどういう地域かといいますと、まず自然条件では、カラコルム山脈と、南側をヒマラヤ山脈の西端、西側をヒンドークシュ山脈に囲まれた、峻厳な山岳地域に属します。カラコルム山脈は、北東部をチベットと接する山脈で、7000m級の山が60座以上あります。最高峰はK2です。

この地域の少し南に位置するナンガ・パルバットは、ヒマラヤ山脈の西端に位置する8225mの山で、北と南の地域を分断し、古くから交通や通商上の大きな障壁となってきました。イスラマバードからギルギット・バルティスタン州に向かう際には、イスラマバード（正確にはハヴェリアン）から中国国境を抜けてカシュガルを結ぶ、1300kmに及ぶカラコルム・ハイウェイ（略称KKH）と呼ばれる道路を通る必要があります。最高地点は中国とパキスタン国境のフンジェラーブ峠（4733m）です。KKHはインダス川とその支流のフンザ川に沿って、山間を縫うように南北に走っています。KKHの建設は大変な難工事として知られていて、実に約20年の工期をかけて開通しました。工期中にもかなりの犠牲者を出したようです。工事の完成は1978年で、その後1986年に一般に向けて開通されました。

ワヒー語圏・フンザ～ゴジャール地方外観：フンザ～ゴジャール関係史

この地域は、1974年のパキスタン併合時までは藩主制をとっていて、ミールと呼ばれる藩主がこの地を治めていました。フンザの藩主が居住していたカリーマバードにあるバルティット・フォート一帯は、調査によりその基礎は12世紀に遡るという報告がされています。しかしながら、現地の人々の移住または定着の経緯については、文字による記録はありません。残っている最古の記録は、4～5世紀の法顕や、7世紀の玄奘三蔵による仏教ミッションに関する記述です。『大唐西域記』には、彼らがインダス川に沿って通って行ったという記述が残っています。仏教ミッションは、途中の藩主国からもてなしを受けながらインダス川沿いに下りていったようで、インダス川流域のチラース近辺の岩には、恐らく彼らの逗留中に描かれた、仏塔その他の岩絵が大規模に残されています。この遺跡に関してはすでに調査が行われていて、ソグド系の文字も確認されています。カリーマバード付近にも類似の岩があって、ここではチベット系文字が確認されています。

その後、この地域はカシュガルやチベット方面と交易を中心に行っていたよう

ですが、19 世紀の後半になりますと、グレート・ゲームの舞台になっていきます。グレート・ゲームというのは、当時のアフガニスタンの争奪を中心とした、19～20 世紀の中央アジアの覇権をめぐるイギリスとロシアのせめぎあいのことです。詳細は今日の話の本筋ではありませんので省略しますが、この地域に関連する事項としては、イギリスがロシアに対する最前線として Gilgit Agency（ギルギット特区）を設置したこと、1893 年に Durand Line を画定したことがあげられます。Durand Line とは、パキスタンとアフガニスタンの国境を確定する、2600km に及ぶラインです。この結果、ロシアとイギリス側の干渉地帯として、盲腸のような奇妙な形をした、ワハン回廊が設けられることになりました。この結果、運悪くここがちょうどワヒーの人たちの居住域だったために、後に国境が画定された中国側も含めると、ワヒー語の分布域は 4 ヶ国に分断されました。

Durand Line の画定後も、この地域は藩主が治めていましたが、1947 年にパキスタンがインドから分離独立し、その後、これらの地域も、1972 年（ナゲル藩主国併合）と 1974 年（フンザ藩主国併合）に藩主制を廃止してパキスタンに併合されることになりました。近年では、中国がインド洋側に流通経路を確保したい意向もあって、中国側の援助を受けながら KKH を通し、現在に至るとというのが大まかな経緯です。

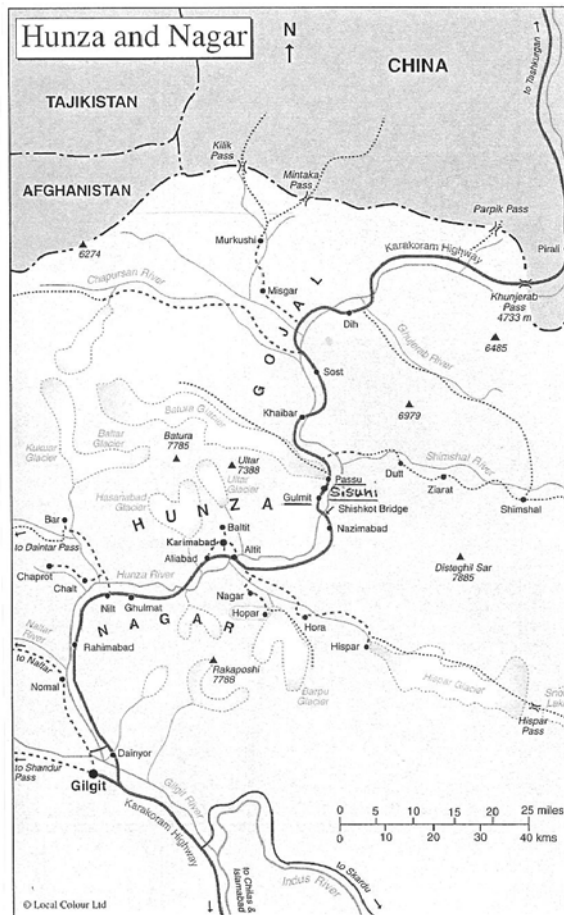
なお、2010 年には、フンザとゴジャールの間にある Attabad という場所で大規模な地滑りが発生し、フンザ川に水深 100m と言われる堰止め湖ができたため、この箇所を通る KKH が水没してしまいました。この天然ダムのために、村の低地部にある家屋や農地が水没するなど、2000 人を超える人びとが被害を受けました。3 年経った今でも KKH は分断されたままの状況です。現在では、KKH を通ってパキスタン～中国へ抜ける場合は、いったん Attabad 湖を船で渡って、車を乗り換えなくてはならない状況になっています。

ワヒー語圏・フンザ～ゴジャール地方外観：民族・言語・宗教構成

□民族と言語構成

次にこの地域の民族と言語構成を見ておこうと思います。ここは、1950 年代にこの地域を調査したオーストリア人の Jettmar という人類学者が「この地域は民族の博物館である」と称したほど、民族が複雑に入り組んで分布している地域です。谷が深く、互いの村の往来が困難で、村落同士が互いに孤立しているためで

しょうか。例えば、私が普段調査をしている、ゴジャール地方の Gulmit 村から
 ギルギットまでは、湖がなければ車を使って数時間で下りられる距離ですが、
 KKH を下るにつれ、どんどん民族と言語が変わっていきます。



フンザ～ゴジャール地図

(Dave Winter, *Pakistan Handbook (Footprint Pakistan Handbook)*, Footprint Handbooks, 1999/8)

民族の分布状況をおおまかに説明しておきますと、まず、北側の、パキスタン・中国国境のフンジェラブ峠に一番近い地域が、ワヒーの人たちが住む地域（一部ブルシャスキーの移住地あり）。Gulmit、Pasu 村を中心に KKH 沿いに村落がありますが、これ以外にも飛び地で、東の Shimshal、西の Chapursan 谷にワヒー村

落があります。その南に、藩主が居住していたカリーマーバードを中心とするフンザ地方が位置しており、ここには、ブルシャスキー（ブルショー）という人たちがいます。ちなみに、彼らの母語であるブルシャスキー語は、系統不明の孤立言語として、言語学者の間では非常に有名です。フンザからフンザ川を挟んで東側にある、ナゲルと呼ばれる一帯もブルシャスキー語の分布域ですが、かつて異なる藩主国に属していたため、現在では宗教が異なります。これよりフンザ川に沿って少し南下すると、シナーというインド系の人たちが住んでいます。このように、この地帯には少なくとも大きく分けて3つの民族グループがあります。ちなみに、ギルギットから西側では、コワール語というインド系の言葉が喋られていますし、中国国境を抜けて東に入った谷では、分布域が分断されたワヒー語に加えて、イラン系のサリコーリー語が話されています。この他に、フンザには、**Dum** と呼ばれる、音楽を演奏したり鋳物加工を生業とする職能集団のような人たちが住んでいて、この人たちが話すドマキ語は、消滅寸前の言語とされています。

□宗教

宗教面では、ゴジャール地方の人たちは、ほぼ全域でイスラーム教シーア派に属するイスマイル派を信奉しています。イスマイル派というのはイスラームのシーア派の一派です。違いについて少し説明しておきますと、イランで国教となっているような、シーア派の主流は、正確には 12 イマームシーア派といいます。つまり、イマームと呼ばれる宗教指導者が 12 代いて、現在では 12 代目のイマームが「お隠れ」状態にあり、世の中が危機に陥った際に現れて救済してくれるという救世主の思想をもっています。これに対して、イスマイル派は 8 世紀に、6 代目イマームの後継者をめぐって派を違えた人たちです。この地域の宗教は正しくはアーガー・ハーン系のイスマイル派で、現在でもその宗教指導者が生きていますと考えています。現在の宗教指導者はアーガー・ハーン 4 世です。彼は現在はパリに在住していて、イスマイル派地域を初めとする多くの地域で、援助を中心とする事業を展開しています。そんなこともあって、現地の人たちは、彼のことをかなりのカリスマ性をもって信奉していて、イスマイル派系の家や店に行くと、必ずと言っていいほどアーガー・ハーンの写真が額に入れて飾ってあります。イスラーム圏では少し珍しい光景ですね。イスマイル派の教義については省略しますが、特筆すべき点を 2 つほどあげておきます。まず、

通常のイスラーム圏では、女性は髪をヴェールで覆わなくてはならないなど、様々な点で女性を厳格に隔離することがよく知られていますが、イスマール派はこの点で非常に緩やかです。女性はヴェールを被らず、髪の色や顔を見せている人がほとんどです。もう一点は、女性に関してアーガー・ハーンが言ったことですが、社会福祉の向上を目指す際には、まず女性に優先して教育をつけることを推進したという点です。なので、イスマール派の地域では、パキスタンの他の地域に比べて、女性の教育程度が非常に高い。また、義務教育はほとんど英語でされるので、この地域の子供達も非常にきれいな英語を話します。

本来はこの地域はシーア派だったようですが、19世紀に藩主がイスマール派に改宗したため、当時のフンザ藩主国の人たちはイスマール派信徒になっています。これに対して、同じ地域でも、フンザ川を挟んで反対側の、ナゲルと呼ばれる側は異なる藩主国でした。フンザとナゲルは互いに対抗していて、ナゲル側の藩主は改宗しなかったため、現在までシーア派として残ったという状態になっています。結果として、ゴジャール地域はほぼ100%がイスマール派、その下のフンザ地域は、かつてのフンザ藩主国は多数派がイスマール派、かつてのナゲル藩主国はシーア派、それ以外の地域では、これらのイスマール派、シーア派、スンナ派が入り交じって住むという状況になっています。

ワヒー語：言語系統

さて、地域の概観が終わったところで、ワヒー語はどういう言語かについて大まかに説明しましょう。言語系統的にはイラン語派です。イラン語派はインド・ヨーロッパ語族に入りますので、かなり広く見れば、英語やイタリア語、フランス語なども遠い親戚ということができます。ちなみに、イラン語派は歴史的に3つの語期に区分されていて、各語期の言語はさらに、分布的な地理関係から西イラン語と東イラン語に分かれています。まず、アケメネス朝ペルシアの成立頃からアレクサンドロス大王の東征によるアケメネス朝ペルシア語の滅亡までは、古代イラン語期と呼ばれます。それからアレクサンドロス大王帝国の分裂、アルサケス朝パルティアからサーサーン朝ペルシアの成立を経て、7世紀にイスラームが成立し、ゾロアスター教を国教としていたサーサーン朝ペルシアがアラブ人の征服によって滅亡、イスラーム化していくまでを中期イラン語期と呼んでいます。中期の東イラン語では、シルクロードの通商用の重要な言語だったソグド語など

が知られています。その後、現在までが近代・現代イラン語期という風に区分されています。

現代イラン語の西側の言語、西イラン語の代表はペルシア語で、この他にはクルド語やバルーチ語などが含まれます。ちなみに、アフガニスタンで話されているダリー語とタジキスタンのタジク語は、言語的にはペルシア語の変種と考えています。現代イラン語期・東イラン語の代表はパシュトー語などが有名です。パミール諸語はこの東イラン語に属していき、この中の1つがワヒー語ということになります。系統的には、ワヒー語は中期イラン語期の東イラン語に属していたホータン語と関わりがあるのではないかとされています。

ワヒー語：言語人口

ワヒー語人口は、パキスタン側以外のアフガニスタン、タジキスタン、中国を含めた4カ国の分布分をまとめて、全体として2〜3万人（Summer Institute of Linguistics International, 2000年による）と報告されています。そのうちゴジャール地域に分布するワヒー語話者の人口はどのくらいかといいますと、統計の取り方に人数が違っているのが実情で、少ない方では大体3000〜9000人、多い統計をとりますと、ここのゴジャールのカウンシルが行った、世帯数調査によるもので10000人程度とされています。これらを考慮すると、パキスタン側に住んでいるワヒー語の言語人口は、6000〜10000人くらいと考えていいのではないかと思います。この地域のワヒー語話者はほとんどが、ワヒー語と、パキスタンの公用語であるウルドゥー語のバイリンガルです。それから、ワヒー語分布域の南にあるフンザ藩主国の言語、ブルシャスキー語も話せる人がかなりいます。

ちなみに、当時のフンザ藩主国の文書・通信用言語には、シルクロードのリンガ・フランカだったペルシア語が用いられていて、ペルシア語による文書も保存されています。ウルドゥー語の影響を主に受け始めたのは、特にパキスタン併合後のようですので、いわゆる長老と呼ばれる年長者の中には、現在でもペルシア語を解する人が少なからずいます。特に、イスマイール派信徒は、イランを起源とすると考えられていて、礼拝などもペルシア語で行ったりしますので、ペルシア語は教養言語と考えられていて、これが分かると一目置かれるという状況です。

ワヒー語：音のはなし

語彙を説明するにあたって、ワヒー語の音の表記について少し説明しておきます。ワヒー語は無文字言語です。ここで用いている表記は、ワヒー語の音を表すために、こちらが便宜上作成した表記方式です。時間の都合がありますので、通常のアルファベット表記ではあまり見かけない、補助記号のみを説明しておきます。ワヒー語の子音を表す記号のうち、文字の下についている点は反舌音という音を表します。例えば、点なしの *t/d* に対して、下に点が付いている *ṭ/ḍ* は、それぞれ *t* と *d* の半舌音を表していて、*t* と *d* より少し口の後ろ寄りで発音します。ワヒー語には、*t, d, ʃ, ʒ, č, j* に対して半舌音が存在します。例えば *šot* と *ṣot* では意味が異なっていて、*šot* は「晩御飯」、*ṣot* は「雪崩」の意味です。

また *y* は咽頭摩擦音という喉の奥の方で出す音ですが、この上に補助記号がつく *ȳ* になると、*y* より口の前寄りで発音する音になります。同様に、*x* は *y* の無声音ですが、補助記号がついた *ṡ* は、*x* より前寄りで発音する音です。

無文字言語の音素を決める際の最大の苦労は、どの音をその言語のスタンダードな発音ととっていいのか、なかなか判断しづらいということです。言語調査は、Gulmit と隣の Sisuni 村から一人ずつワヒー語話者に来てもらって聞き取りをしているのですが、村によって音も違えば単語が違う場合もあります。また個人的な発音の癖もあります。その上、それぞれのインフォーマントが各自の村の代表という気持ちで来ているので、下手をすると「オレのところがスタンダードだ、お前の発音は聞いたことない」と言い合いを始める。こちらもどれをスタンダードな発音としていいのか判断に迷う。今でも非常に苦慮しているところです。

語彙の諸相：自然環境関連語彙

ゴジャール・ワヒー語については、調査を始めて 10 年くらいなのですが、収集語彙数が現在微地名を含めると 13000 語くらいになってきました。今日は語彙を中心という話でしたので、見直すのにちょうどいい機会だと思っています。というわけで、こんなところにこんな単語が、というような種類の語彙を出してみましたので、語彙の諸相から、現地のありようを眺めてみたいと思います。

□地形関連名称——「岩・崖」関連語彙

はじめに、自然環境、特に地形を表す語彙から見てみます。まず、山岳地帯に

属する現地になくはない、「崖」「ガレ場・ザレ場」またはこれに類似の地形を表す語彙をあげてみました。落石の大きさ、歩きやすさと危険度等によって、細かに単語が変わっているのが分かります。

pitk : 崖、大きな岩角、čpaq : 小崖、kor : 石が安定していない険しい崖
 šax : kor などにあるこぶ、越えると家畜が見えるくらいの規模
 yoriŷ / šuy / yor yor : 石が多い場所、qərum (šuy) : ガレ場
 jəromiz / bajri jay : ザレ場、小石があるが歩行可能
 čaş : ザレ場、砂利で滑りやすい場所
 čarž/čaržesn : čaşより大きい落石の可能性、滑落しやすい
 xumreg (jay) : 斜面の上方から落石する場所、より危険、滑落しやすい
 qor qor : 崖崩れエリア、より落石の危険性が高い
 ŷu wotsn : 石泥混じりの場所（特に氷河）
 gungri : サイドモレーン（氷河）

これに関連して、上のような地形の場所を越えて移動し、放牧等を行う際に必要な単語にも、当然多くのものがあります。

pomer : 高地にある開けた放牧地
 mənḡal / mənḡaliŷ : 山・崖上にある休憩できるような広めの場所、山の肩
 hay : 山上の開けた場所
 tangiŷ : 狭隘な場所
 drband : 先が狭隘で通り抜けられない場所（家畜停めに使用する）
 putrumga : 家畜を囲い込む前に一時的に停めて数えることができるような場所
 žrevga : 家畜が上も下へも行けないような険しい場所（žrev- < žrevn 「捕まる、はさまる」）
 priyen : 峡谷の人工歩道
 qila / qilagiŷ : 狭くて歩行が困難な場所
 puḡ kan : 岩場、氷河等を作る、臨時の足場のための置き石
 sman : ケルン（氷河を横断する際等に、道しるべとして石や木などを置いた目印）

□地名

次は地名を見ていきましょう。地名研究は、移住の経緯等、その土地の歴史や本来の地形を遡る際に役立つことがあります。このため、5年ほど前にゴジャー

ル地方の全てのワヒー村落を回って、登記されているような地名に加えて、小字名などの、いわゆる微地名と言われる通称的な地名を調査しました。この結果、ゴジャール地方のワヒー村落 26 村で、微地名が約 3000 語あることが分かりました。彼らの移住の歴史に関連するような地名はなかなか得られなかったのですが、今日の話題のような、各村落の置かれている特徴的な自然環境と結びついた、興味深い微地名がかなり見受けられます。

全体的には、*δur*「岩の裂け目」を含む地名が 140 語、*ŷar*「石」を含む地名が 135 語ありました。*ŷar*「石」を含む地名には、*lup ŷar*「大石」、*sekr ŷar*「赤石」、*pak ŷar*「割れ石」といった形状を示す他に、*bilas ŷar ben*「魔女石下」などの地名もあります。これ以外には、*kək*「泉」(116 語)、*wiyin*「峠」(40 語)、*yaz*「氷河」(28 語)、*skord*「橋」(23 語)、*priyen*「岩崖に作った人工狭道」(22 語)、*tang*「狭い道」(20 語)、*yinaŷn*「鉄砲水」、*čarjesn*「滑落しやすい場所」(9 語)などの種類の語を含んでいる地名が多いですね。

一風変わった、現地の地形をよく表す地名としては、*šač merk* のような名前でしょうか。*šač*は「犬」で、*merk*は「死んだ」なので、「犬が落ちて死んだ（または死ぬような厳しい）場所」でしょうか。これ以外にも、*kirgas wašk*、*kirgas*は猛禽の一種、*wašk*は「疲れた、疲弊した」ですが、鷲鷹も疲れてしまうような険しい場所とか。似たような構成の地名をあげると、*uštər žrešk*、*žrešk*は「捕まった」という意味で、岩場に留まって動きが取れなくなることです。*uštər*は「ラクダ」ですので、*uštər žrešk*は「ラクダが身動き取れなくなった、またはそのような場所」となります。*park žrešk*「ネズミが身動き取れなくなった（ような）場所」などもあります。また *platk*「落下した、滑落した」という語を含む微地名も 23 語ほどあります。例えば、*dowlatšo platk*「*dowlatšo*（人名）が落ちた場所」、*šod bige yaš platk*「*šod big*（人名）の *yaš*（馬）が落ちた場所」等でしょうか。

こうして見ていくと、現地に行かずとも、岩・崖を表す語彙の豊富さや地名からだけで、狭隘で厳しい山間にある村落の状況を想像することは、容易にできるかと思います。また、このような地名がついている場所は、かつては通信や物資の運搬等のために徒歩や馬で抜けたり、また、夏秋に家畜を連れて夏营地へ移動する必要があったために、おのずと、危険度や、反対に水の確保場所、急場に雨風をしのげる場所、といった判断がつくように名称がつけられるようになったのではないかと思います。

語彙の諸相：生業・生活関連語彙

□「石垣・石壁」

現地の自然環境については、先ほどの地形や地名関連語彙でおおよその想像はつくかと思いますが、このような山間の地を開墾・灌漑するための労働に関連する語彙も、当然のことながら興味深いものがたくさんあります。この地方の村落は、概ね、背後に氷河がそびえていて、氷河の端に貼りついたように開けていますので、そのままでは平地はまず確保できません。このために、傾斜地を棚田にして平地を作り、氷河から水路を作って水を引いてきて、灌漑していく必要があります。氷河の端の石の多い土壌ですから、開墾の際には石や岩を掘り返して、掘り返した岩や石を、道や畑の仕切りの石壁や家の基礎に利用します。また、傾斜地にある畑にまんべんなく灌水をさせるための手順も事細かに決まっていて、このための単語も豊富にあります。例として、「石垣・石壁」の関連語彙をあげておきましょう。ワヒー語では、*siz*「石壁」という、いわゆる仕切りの壁と、*vasak*「擁壁」といって、棚田の土を支えながら仕切りの役目する壁、さらにこれが高くなった *sasang*「高擁壁」の3種類があります。ちなみに「石」についても、*pandayi*「うまく形の整えられた石」、「石の目を読む」などの、石の形を形容する語や石を加工するための関連単語があるのが面白いところです。

□伝統的家屋関連語彙

ワヒー村落に行かれたら、是非伝統的家屋を見てもらいたいと思います。彼らの家には、*xun*「家」という単語はあるんですが、「部屋」や「窓」という単語がありません。この理由は、実際に彼らの住居の内部を見せてもらうと、たちどころに分かります。

この地域の伝統家屋は、断熱効果のために外壁が厚くなっていて、一番外の入口を入り、さらにもう一つ入り口を抜けるとメインの生活空間が広がる作りになっています。この空間には、部屋を仕切る壁はなく、様々な高さを持つ段差をつけた *raž* と呼ばれる「段・区画」と、柱によって、細かい区画に分かれています。

正面奥には、倉庫兼食器等を並べる戸棚のスペース (*čkiš*) があり、その手前に *nikard* という一番高い部分があります。ここがいわゆる「カカ座」で、一家の主婦は大体ここに座って、中央に備え付けてある *buxori*「ストーブ兼オーブン」を使って調理をします。この *buxori* 周辺部分を *dildung* と呼びます。*dildung* の左

右の場所は *dildung ben* と呼ばれていて、右側の *dilgung ben* には最も目上の男性、左側は最も目上の女性が座ることになっています。これ以外に細かく段差で区切られた区画 (*raž*) はそれぞれ名称が上～下座の順番が決まっており、何らかの祭礼で招待された客は、その年齢や身分に応じた、適した *raž* に座ることになります。例えば入って左側の段は *pir(e) raž* と呼ばれ、結婚式の関連行事が行われたり、その際に招待された一番メインの客が座る、最も上座の段となります。また、*buxori* から一番遠い、入口に近い右手の段は一番下手で、年少者が座ります。この他、葬式の際に遺体を安置する場所、また結婚式の際に楽隊が座る場所等なども、事細かに決められています。

伝統家屋でもう一つ特徴的なのは、天井の形状です。これは、中央アジアに特徴的な、方型組上天井と言われるもので、幾何学的な模様で木材を積み上げ、上部に採光用の穴 (*ritsn*) が設置されています。側面の壁には「窓」はなく、採光用の「穴」が開いているのみです。

このように、一般の家屋名称に当たり前のようにある、「部屋」や「窓」に対応する単語は、ワヒー語にはないのですが、その代わりに、使われる用途に応じて細分化された、各区画の名称が豊富にあるのです。



ワヒーの伝統的家屋。奥の一段上がった段が *nikard* 「カ力座」、中央の *buxori* 「ストーブ」をはさんで、左右が *dildung ben* となる。天井に *ritsn* 「採光穴」が見える。

□食べ物

(コラムを参照)

□杏関連名称

フンザに行かれたことがある方はご存じだと思いますが、フンザでもゴジャールでも、かなり大規模に杏栽培がされています。ワヒー語では、杏の品種だけでも 20 種類くらいありますし、杏栽培に関わる関連語彙だけでも 50 語を超えます。例えば、杏の実は通常、保存のために果実を乾燥させて **qaq**「干し杏」を作りますが、その「干杏」という単語も製法によって、**prat**「杏の種を片手の指で押し出して乾燥させたもの」、**guli**「種を押し出さずに乾燥させたもの」、それからこれが一番上等ですが、**isqa**「出来のいい杏を両手できちっと実を左右に割って種をとって乾かしたもの」と、それぞれ 3 つ単語が違う。さらに、**balutsaski**「乾かした果実の中に、外皮を割った杏仁の部分に戻して閉じたもの」、というタイプの干杏の名称もあります。また、杏の実は、木の幹を揺するか、枝を長い棒などで叩いて実を落として拾い集めるのですが、これに関連して **wulung**「(収穫のために杏の) 木を揺する」という動詞もあります。

杏がいつ頃から栽培されたかは明らかではありません。が、いわゆるハレの日や祭礼に出される料理には杏を使ったものがあまりないことから考えますと、杏は元来この土地に大量に自生していたものではなく、人々が定着してから増やしていったのではないかと考えられます。

語彙の諸相：社会・文化関連語彙

今度は、こうした自然環境とした、家屋・生業等々のいわゆるハードの部分を見てきた地域の内部では、どのようなコミュニティが存在するのか、という観点から語彙を見てみます。

ワヒー語の語彙を全体的に見直してみても気づくのは、人格や性格を表す単語がやたらと多いことです。それも、一語の訳語で置き換えられるものでなく、例えば、**vexnokuzg**「自分の物を渡す際にいつもいやいやながら渡す癖のある」というような、非常に微細な語彙が見受けられます。「気むずかしい」に当たる語彙でも 10 語近くの単語があって、微妙にニュアンスが異なるようです。これだけ性格を表す語が必要であるということは、閉鎖された社会で、良い意味でも悪い

意味でも付き合いが密であろうことがよく分かります。

反対に興味深いところでは、人の容姿に関わる、特に美醜を形容する単語が極端に少ないことでしょうか。特に女性の容姿に関わる単語や表現は、例えばペルシア語では、それこそ歯が浮くような表現も含めて、多彩なものがありますが、ワヒー語では驚くほど少ないですね。これは何故なのかよく分かりませんが、例えば婚姻に関して言うと、結婚は現在でも働き手の確保という感覚があるようで、結婚相手も若い頃から何となく決まっていることが多く、恋愛結婚はまだ稀なようです。こういうわけで、結婚相手を決定する際には、相手の美醜はあまり優先的な基準にはなっていないようです。こういうことも影響しているのかもしれない。

では、もう少し広いところから、この地域の特徴的な社会組織についてまとめておきます。各村には氏族組織がありまして、その中で、1つの村に多くて10くらいの ktor「父系氏族」があります。これが冠婚葬祭に関わる全ての共同作業の基本単位になります。年中行事に関しては、大まかに言いますと、2月くらいに煤払い、水路開き、3月に播種祭、家を新築する家庭は3月に一斉に地鎮祭をし、6月には夏営地に向かう家畜と羊飼いを送り出す祭り、収穫期には7月に収穫祭、9月には夏営地から下りてきた家畜と羊飼いを迎える祭り、秋は結婚式というのが主なスケジュールです。これに加えて、最大の優先事となるのは葬式です。これらの行事に関連する労働はすべて、村の中で分かれている ktor「父系氏族」が単位となって行います。例えば、同じ氏族の中で物故者が出た場合は、遺族は七日間生産活動にいっさい携わってはならないと決められていますので、その間は同氏族の人たちが交代で食事の世話をし、必要な家事や労働を肩代わりします。

また、各村の氏族の中には必ず šogun ptuk「祭礼を始めることのできる特別な氏族」が決められています。祭礼の中で最も重要な祭りは、3月初旬に行われる taym「播種祭」です。その年の小麦栽培（かつては大麦）は、この祭りで、この氏族が定めている畑に初めて種を蒔く一連の行事を行ってから、他の村民も各家庭で種まきを始めることができると決まっています。播種祭当日は、この氏族に属する人たちは、誇り高く、自慢気に祭礼を取り仕切ります。



taym「播種祭」に向かう人々。よく見ると、šogun ptuk だけが持つことのできる装飾したネコヤナギの枝を持っている。

語彙の諸相：欠如語彙

このように、地のニーズと結びついてメリハリの付いた語彙も面白いですが、一方で、欠如している範疇の語彙もありますね。例えば、現地のエコロジーに存在しないものは、もちろん単語ありません。海とか漁師とか、そういった単語が存在しないのはもちろんですが、興味深いところでは、東西南北を表す方角を表す語彙がありません。何故かという、東西南北が必要ないからです。この地域では、偶然フンザ側が南北に流れていて、川の上流は北、下流は南となります。そして東から太陽が出て来て西へ沈みます。ですので、川の上流、下流、太陽が出る方角と太陽が沈む方角という語彙はありますが、学校の授業で習うような、いわゆる「東西南北」にあたる単語がありません。それから、絶対的な時刻を表す単語もありません。では彼らは伝統的にどうやって時刻を知ってきたかというと、今は時計がありますが、家の天井に開いている *ritsn*「採光穴」から指してくる光が、例えば柱やストーブの一定の場所に当たる時間帯になれば *yipoč*（午前 10～11 時くらい）とか、また異なる方に指すと *yiparz*（午後 3～4 時くらい）という風に、相対的に時間を区分しているようです。例えばここ日が差せば *yipoč* から休憩してお茶を飲むとか。このため、季節に応じて *yipoč* や *yiparz* の時間も

変わってきます。自然なサマータイムみたいになものでしょうか。東西南北や絶対的時刻を指す単語はないけれど、その代わりに、日々の労働形態により特化した単語が使われています。

欠如している、という点では、ワヒー語には、性格を形容する語彙は豊富ですが、社交辞令や敬語にあたる単語や表現も少ないですね。例えばイランでは、そういった社交辞令を表す語彙や表現がペルシア語には事細かにあって、敬語や社交辞令を使わずして人付き合いは出来ないのですが、ワヒー語にはあまりありません。それだけ建前を言わない付き合いをしているということでしょうか。ついでに、現在日本や都市部で問題になっているような、認知症や孤独死といった問題（とそれに類する単語）はまずありません。例えば、いわゆる認知症と呼ばれる人たちはほとんど見かけません。どこの家庭も大家族で、仕切りのない空間で一緒に生活しているために、誰かが常に家の中にいて、祖母が孫の面倒を見て、そこに近所や親戚の人が頻繁に顔を出して何かしら話しかけたりして、会話をする機会が多いからでしょうか。例えば、調査で長老と呼ばれる人たちに会いに行くことも多いのですが、体は弱っていて、例えば目が見えないとか耳が聞こえないとか、足が何とかとか言うんですけど、頭はものすごくしっかりしていて、言葉もよどみなく出ます。体が弱った際に老衰で死んでいくという、最も自然な最期の迎え方をしている印象をうけますね。

まとめ

こうして色々な語彙を紹介してきましたが、これらの語彙からだけでも、次のような現地の状況が浮かび上がってくるかと思います。まず、非常に地理条件・自然環境が厳しい。気温も低ければ、土地も痩せているし、水も豊富には確保出来ないし、制約条件がたくさんあります。また土地は傾斜地ばかりで平地は自ら石を掘り出して確保するしかない。そのようなところで、ワヒーの人びとは、淡々と半農半牧を行っています。最近では耕作作物の種類も変わってきていますが、伝統的な食生活は小麦粉と乳製品が中心ですから、牧畜をしながら農業をするという生業形態が伝統的にあったということと、そして、それを担っているのは、堅固な父系氏族組織で、労働単位の根幹をなしているということ。そして、この氏族組織の中にもいろいろ規律はあるのですが、その一方で、構成員が困ったら互いに助け合う、互助システムがしっかり根付いています。そして、地理条件的

に孤立し、隔絶された社会なので、それなりに付き合いは緊密にあつて、さまざまな性格の形容をするような微妙な単語もあつて、文句を言いながらも、皆それなりに密な付き合いをしているというような姿が見えてくるような気がします。

最後に、文字がない、スタンダードな規範言語がないという言語は、どういう語彙の特徴を示すのか、まとめておきましょう。一つの例ですが、夏営地に行った際に、エーデルワイスとタンポポが並んで咲いていたので、現地の人に、この花は何て言うのか尋ねたら、タンポポには名称を表す単語はあるんですが、エーデルワイスには無いらしいです。どういうことかといいますと、つまり、家畜が食べて、乳がよく出るようになる草、または反対に家畜が食べると毒になる草にも名前がついている。タンポポは、食べると乳が臭くなるので名前が付いていません。でも、見て美しいとか、そういう基準では彼らは全く名前をつけないんですね。例えば地形を表す名称では、その場所どういう形状をしているか、ではなくて、その場所で何をするか、そこで家畜を停めるかとか、ここにいると落石で危ないとか、ここは歩行可能とか、自分がその場所で何らかの社会生活を営むときに、その地形がどういう風に自身の活動にコミットしてくるか、が基準になって命名をしているわけなんです。この事が、百科事典的に語彙の空白を埋めていくような、そしてスタンダードがきちっと決まっている言語の持つ語彙と、圧倒的に違うところでしょうか。

全てその単語が表す「モノ」の機能が最優先で、使わないものは、「モノ」が存在することは認識していても単語は要らない。だから去年の調査では「サナギ騒動」と我々が呼んでいる問題があつて、どう頑張っても蝶のサナギを表す単語がとれませんでした。「幼虫」と「蝶・蛾」を表す語はあるんですけど。何故か「サナギ」は単語がなくて、「あれは何て言うの？英語で pupa って言うよね？」と聞くと、彼らはどういう形状のものは認識していて、ああこれは蝶や蛾になるよね、と言うのですが、単語が結局見つからない。やはり命名の根本が違うのだと思いました。

また、これも今年気づいたことですが、石壁にヒルガオが咲いていて、この花の名称を取り忘れていたのを思い出して、花の写真を撮って彼らに見せたいんです。そうしたら、「こんな花あったっけ？」って言うんです。そこら中に咲いている花なので、必ず見ているはずなのですが、「○○かな？xxかな？」と言って、何の植物か分からないんですね。それで不思議に思って、もう一枚の、細部は確認できないのですが遠くから撮った、全体の写真を見せた。すると、たちどころに名

称が判明しました。つまり、この植物はツタ性で、畑の横に生えてきて、そこに生えている農作物を荒らすのだそうです。なので、彼らは、どこにどういう状態で生えているか、この植物が生えるとどうなるか、については見ているんですが、花の色や形状では捉えていないんですね。日本語だと、規範を決めないといけないので、単語が空欄だとどうしても何かしらのアイテムを埋めていきたいくなる。そうすると百科事典的に、最大公約数をとって、並べてしまう。そうすると我々自身の見方も、例えば花というと植物図鑑の写真で見るような、こういう色で弁がいくつあってと、そういうイメージをしてしまうんですけど、彼らの見方は全く違います。どちらかというとならぬ見方の方が、命名法の本質かもしれない、と思うことすらありますね。

コラム †

ワヒーの食べ物



祭礼によく登場する ruxn tbaq「白膳」(手前左と中央)。
奥に見えるのはナン生地を揚げた čilpek

... * ————— * ...

一般に、伝統的「食」を見ると、その地域の植生や伝統的生業、生活のありようがわかってくる。何らかの理由でその土地の伝統的形態が失われていたとしても、伝統料理や、特に祭礼等で供される、いわゆる「ハレの日」の食事を見ると、かつてその土地が持っていた生業を辿ることが少なくない。

ワヒー村落の「ハレの日の料理」を見てみよう。最も重要な3月の播種祭をはじめとする年中行事や結婚式などでは、数人から10人程度で、一つの tbaq「膳、

盆」(木製あるいは金属製の大型トレイ)にのせた特別料理を供食する。特別料理でもっとも頻繁に登場するのが *ruxn tbaq* 「白膳」。大型で厚目に焼いたナンの上に乳(ヤギ乳が美味とされる)を入れた器を添えたもの。乳の上に溶かしバター(年代物は *ruŋn*、新しい物は *maska*)をかけることもある。結婚式では、多産を祈願して *čamurki* 「細かくちぎった薄いナン+溶かしバター」等と一緒に盛られる。ワヒーの人たちにとって最大のご馳走は、結婚式で出される *talx bat* だ。小麦粉と水に大量のバターを加えて大釜で長時間煮込んだ、ポリッジ(おかゆ)状のもの。これを厚目のナンの上にどんと盛り、茹でたヤギ肉を添えて出す。塩等は加えないので、日本人には「???」という味だが、現地の人たちはさも美味しそうに *bat* をほおぼり、肉は骨を割って髓まで食べる。

最近でこそ南からスパイスの効いたカレー料理が入ってきているが、ワヒーの伝統食も同様に、小麦粉と乳製品のみを組み合わせたオンパレード。加工形態は、大きく、ナンタイプ、ポリッジタイプ、その他、に分類できる。ナンタイプは、製法(焼き方)、イーストの有無、厚さ、材料に乳や油脂を加えたもの、模様、用いられる場面等々によって、20種類ほどの単語がある。おかゆタイプは、基本は *bat* 「小麦粉+水または乳+時々バター」で、仕上げの固さ、祭礼に出す場合、等によって細かく名称が分かれる。

これらの料理には、近年換金作物として導入されたジャガイモはかけらも入っていないし、地域の特産物のように言われる杏もほとんど登場しない。恐らくこれらの作物が導入される以前に地域が持っていた、伝統的な半農半牧から唯一得られる小麦粉と乳製品を、涙ぐましい努力をして形を変え、バリエーションをつけている。しかし、特に乳製品に *qurut* 「乾燥ホエイ」を使う場合は味がどれも似てくるので(ヤギ乳だとかなりケモノ臭い)、区別は食感の違いしかない。色はどれも一様に白っぽいだけだ。

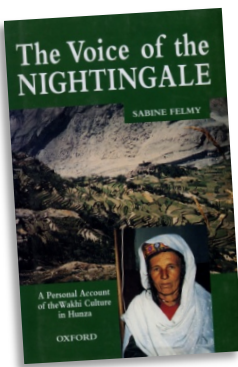
ここ10年の調査で集めた語彙がそれなりにたまってきたので、小さな辞書を作ろうという話になっている。どのようなものにしようか、写真がないと説明しにくい単語も多いので、たくさん載せようと、インフォーマントと話が盛り上がった。当然食べ物も大事なので、あれもこれも写真をつけよう！と意気込んでいたが、そのうち彼がぼつりと言った：「でも、写真だと見分けがつかないよね。味も似たようなもんだし」。現地の人たちもよく分かっているのだ。

ワヒー語を知るための2冊

・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・ * ・ ... ‡ ... ・ * ・

ゴジャール・ワヒー語についてはまだ報告例も少なく、現在入手できるもので薦められる文献は、残念ながら3冊に満たないのが実情。とりあえず、以下の2冊をあげておく。

... * ————— * ...



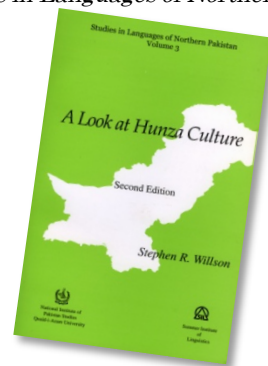
Felmy, S. 1996. *The Voice of Nightingale – A personal Account of the Wakhi Culture in Hunza*, Oxford University Press.

筆者が1977年よりゴジャールに滞在した際の記録および回想記。学術的な報告でなく、言語に関する情報もそれほど得られないが、生活、社会、暦・祭礼、フォークロアなど、ゴジャールの文化が生き生きと語られている好著。

... * ————— * ...

Willson, Stephen R. 2002. *A Look at Hunza Culture (Studies in Languages of Northern Pakistan Volume 3)*, Second Ed. National Institute of Pakistan Studies, Qaid-i Azam University and Summer Institute of Linguistics.

ゴジャールではないが、文化的に共通点が多い、フンザ地方の人類学的調査に関する報告。



... * ————— * ...

平成 24 年度 東京外国語大学オープンアカデミー

東京外国語大学語学研究所 企画

『言葉とその周辺をきわめる』

2012 年 11 月 13 日 第 6 回

「トルコ語とチュルク諸語」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授

菅原 睦

1. はじめに

皆さんこんばんは、菅原です。よろしくお願いします。「言葉とその周辺をきわめる」という題がついていますけれど、あまり「きわめている」つもりはありません。下手に道とか極めたらそれは「極道」ですから気をつけたいものです。このオープンアカデミーのような公開講座は、だいぶ以前、まだ大学が移転する前に西ヶ原のキャンパスで担当したことがあります、そのときには紹介をしてくださる先生がいらして、その方に紹介をしていただきましたが、最近は自分で紹介しないといけないということで、自己紹介をすることになります。こういうところで自己紹介と言っても、「好きな食べ物」だとか「家族構成」とか言っても仕方がない。自己紹介といってもいろんな規定の仕方がありますね。その状況で一番重要な属性というものが当然問題になるわけですし、外国に行ったらまずは「日本人だ」ということが先に来ってしまう。それは望むか否かにかかわらず、別に日本を代表しているわけでもないんですけど、まず日本人だということになります。国内であつても旅行をしていれば、どこから来たんですか、とまず聞かれるのと同じことです。

実は言語についても同じようなことが言えます。いろんな規定の仕方があって、その都度、場面といいますか、目的・状況によって、何が最初に来るかというのは変わるのではないかというところに、今日は最後にもって行きたいと考えています。たまたま昨日、トルコ学会議というものを今度やるから、日本におけるトルコ研究の現状や課題について云々、というメールが来ていたのですが、私はトルコ研究をやっている意識は全くありませんので、関係ないという理由で断るつもりです。実はトルコ研究者ともあまり付き合いはありません。では一体何をや

っているのかというと、専門としてはいつも「言語学」と答えるようにしています。大体専門というのは自己申告ですので、何と言おうと勝手なんですけれど、専門は言語学というふうにいつも言っています。〇〇語学、例えば「トルコ語学」という言い方ももちろんありますが、個人的には使わないようにしています。なぜかというと、ある言語の研究といっても、方法としては言語学しかないわけですから、別に対象とする言語によってやり方が大きく違うわけではありませんから、やはり何語の研究であれ、学としては言語学だろうと私は考えている。〇〇語というのは学ではなくてその対象ですから。これでは自己紹介になっていませんけれども、おいおいわかりいただけるかと思います。

2. トルコ語の特徴：名詞 1（格を表わす要素）

では今日のお話に入っていきたいと思います。前半はトルコ語に関して、後半はチュルク諸語に関する内容をお話しします。まず前半はトルコ語についての話になりますので、何はともあれどんな言語なのか、あるいはご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、多少なりとも説明しておかないといけません。トルコ語は日本語に似ているという風に聞かれたことがあるかもしれません。例えば名詞に関して、格を表す要素はおおよそ次のようになります。

主格	ev 家
属格	evin 家の
与格	eve 家へ
対格	evi 家を
位格	evde 家で
奪格	evden 家から
共同・手段格	evle 家と／家によって

太字で書いた部分がそれぞれの格を表わしているということになります。実はトルコ語の場合、後でもまた触れますが、別に名称も順番も決まっていません。ドイツ語では名詞の格に 1 格から 4 格まで番号がついていたと思いますが、なにせそういうメジャーな言語とは違いまして、業界で確立したやり方というものがないので、その辺ちょっと勝手に違うと思われるかもしれません。ここでは

仮に上のような用語で（実は大学の授業で使っている用語とも違うんですけど）、主格、属格、などを書いておきました。要は *ev* 「家」という名詞に、それぞれ *-in* 「の」、*-e* 「へ」、*-i* 「を」、*-de* 「で」、*-den* 「から」、といった要素をくっつけて、それによってそれぞれの働きを表わす。この点では日本語の格助詞とよく似ているわけです。ただ、日本語の格助詞と大きく違う点としては、それが一種類ではなく、それぞれに形が何種類かずつ揃っているという特徴があります。ここでは詳しく触れる余裕がありませんけれども、例えば「の」であれば、ここでは *-in* という形ですが、実際にはあともう 7 つ、つまり全部で 8 種類の形があって、それらがセットになっています。単語によって、正確に言うと単語の音によってすべて規則的に決まりますから、覚える苦労はそんなにない。規則さえ覚えてしまえば正しい形は非常に素直に作れます。「家へ」であれば、この場合は *-e* となっていますけれども、あともう 3 つありまして、全部で 4 つあるうちから正しい形が 1 つ選ばれてくっつけられる、そこは日本語とは違うところだと言えます。ちなみに、たくさん形があるといっても、「家へ」の「へ」にあたるもの、与格の接尾辞と言いますか、格助詞と言ってもいいのですが、4 つの形があったとしても、別に間違っただけのものをつけたら意味が変わるわけではないことになります。間違っただけから通じないということは恐らくないと思います。もちろん間違っても構わないとは思っていませんが。あるいは文字に書く場合でも、4 つある「へ」はどれも同じ意味を表わしていて、前に来る単語の音によって正しい形が決まるので、例えばそれを 1 つの綴りで表わしても理屈としては何の問題ありません。今は 4 種類の形を発音通りに書き分けていますが、別にこれを同じ形で書いたって特に問題は起こりませんよね。なぜそういうことを言うかということ、トルコはかつて（1928 年まで）アラビア文字を使っていたけれども、アラビア文字による表記では一部にそういう面がありました。ある文法要素について、いろんな形のバリエーション、言語学では異形態と言われるものですが、それらを区別しないで書き表わすということ。それは意図してそうだったというよりは、アラビア文字ではそれらを書き分けるのが難しかったから、たまたまそうだっただけなのかもしれませんけれども、それは別に困ったことではなかったわけです。よく世間では、アラビア文字はトルコ語に向いていないからラテン文字（ローマ字）に変更したと言われてはいますが、それは一面では確かにそうだけれども、すべてがそうではないわけで、今言ったように特に問題がなかった部分もあるんです。そういう点を無視して、アラビア文字がラテン文字に比べて劣った文

字であると決めつけるような主張は、ヨーロッパ中心主義による一面的なものであり、注意する必要があります。

3. トルコ語の特徴：名詞 2（人称を表わす要素）

名詞の格を表わす要素はそんなに特殊なものではないと思いますが、次の人称を表わす要素はちょっと珍しいように思います。

benim evim	私の家
bizim evimiz	私たちの家
senin evin	君の家
sizin eviniz	君たち／あなた／あなたがたの家
onun evi	彼／彼女の家

「私の家」、「私たちの家」、「君の家」などという場合に、英語や日本語だったら名詞の前に「私の」、「私たちの」、「君の」といった要素をおけばそれで完成ですが、トルコ語の場合は名詞そのものにも接尾辞（**太字**で示しました）がついて、両方で表わされます。前の要素は省略できますから、**evim** だけでも「私の家」という意味になります。このように、名詞の後につく要素がその所有者を表わすこと自体はそんなに珍しくはない。アラビア語とかペルシア語を学ばれた方はご存知でしょう。でもトルコ語みたいに、前に置いた場合には後ろにもつく、つまり二重に表わすこともできるし、後ろの方だけで表わすこともできる、というのはあまり他にないかも知れません。ちょっと変わった現象だと思います。これは一種の「一致」と考えることができます。いろいろな言語で、主語の人称と数に合わせて動詞が変わるというのがありますが、あれと同じような感じで、名詞の前にある「誰そのの；何々の」という要素の人称と数に合わせて、名詞自体も変化する。そういう意味で、これは一種の一致であると言えます。ここで言うておいたほうがいいのかも知れませんが、「私」（1 人称単数）、「私たち」（1 人称複数）、「君」（2 人称単数）、「君たち」（2 人称複数。一人の相手に対する丁寧な表現としても使われます）という順序で並べてあります。これは単に私どもの習慣で、これが一般的な配列だというわけではありません。普通にヨーロッパの言語でやっているみたいに、まず単数 1 人称、単数 2 人称、単数 3 人称、

次に複数、としてもいいんですよ。ただトルコ語の場合、1 人称単数の *evim* に対して 1 人称複数 *emimiz*、2 人称単数 *evin* に対して 2 人称複数 *eviniz* というふうに、どちらも最後に *-iz* をつけると「私の家」から「私たちの家」、「君の家」から「君たちの家」というふうに所有者が複数になっているので、その関係が見えやすいようにこういうふうに並べている。学習する側にとってもその方が覚えやすいかな、という配慮でしているだけのことです（3 人称複数の形もある理由でここでは省略してあります）。

4. トルコ語の特徴：動詞の構成

動詞について言いますと、これもやはり名詞に格や人称などの要素が貼り付くのと同様に、ベースとなる形にいろいろ後から付加されて長くなっていきます。

(Biz) *tani-* *-ş-* *tır-* *-il-* *ma-* *-di-* *k.*

私たち (は) 知る－相互－使役－受動－否定－過去－1 人称複数
(私たちは知り合わせられなかった。)

上の例で言えば *tani-* というのが「(人)を知る」という意味の動詞の語幹になります。これに *-ş-* が付くと「(互いに)知り合う」という意味の動詞に変わり、そこに *-tır-* が付くと「知り合わせる」という使役になって、*-il-* が付くと今度は「知り合わせられる」という受け身の意味になります。*tani-ş-tır-il-ma-* はその否定「知り合わせられない」で、さらに *-di-* が付くと「知り合わせられなかった」という過去の形、そして最後に人称がつきます。「私たち」が主語であれば 1 人称複数主語であることを表わす要素 *-k* が付きます。人称を示す要素が動詞の場合にもあって、これは日本語と違う点ですが、「知り合わせられなかった」というところの並び方は日本語と非常によく一致していますね。もしそれに何か理由があるとすれば、論理的にそれが一番自然だからなのでしょう。このように必要な要素を後へ後へと貼り付けていくことによって長い動詞を作れるというのが、発想として日本語によく似ていると思います。なお要素を並べる順序は決まっています、勝手に入れ替えることはできません。

5. トルコ語の特徴：語順について

語順に関しては2つだけ例をあげておきます。

Japonlar	için	Türkçe	öğrenmek	kolay mı?
日本人 [たち]	にとって	トルコ語 (を)	学ぶこと (は)	簡単 か.

Japonlar「日本人たち」、これは複数形ですが、日本語では「日本人たちにとって」という言い方は少し不自然なので「たち」は括弧に入れました。için「にとって」。Türkçe「トルコ語」。さきほど名詞の格を表わす要素で「を」にあたる形が出てきましたが、ここでは使われていません。öğrenmek「学ぶこと」。「は」や「が」に相当するものはないのでこのままで主語になっています。kolay は「簡単」という形容詞で mı は疑問の助辞です。「にとって」が için という 1 語で表わされていますが、全体ではまさに直訳で普通に日本語の文になっているといえますか、語順がこの程度まで一致していますね。だからトルコ語は勉強しやすい、覚えやすいと思います。あまり宣伝するつもりはありませんが、簡単なことは簡単で、学ぶ際の苦労は少ないと思います。

もう一つ注目すべき点として、動詞の連体形にあたるものがあります。

Türkçe	öğrenen	Japonlar
トルコ語 (を)	学んでいる	日本人たち

「トルコ語を学んでいる日本人たち」と言う場合には、英語のように関係代名詞による関係節を使うのではなく、öğren-「学ぶ」という動詞の連体形相当の形が用いられます。日本語の場合と違って連体形専用です。今の日本語では、動詞の場合は連体形＝終止形ですから、連体形専用という形はなくなっていますが、トルコ語の場合には連体形専用の öğrenen「学んでいる」（あるいは「学ぶ」、「学んだ」）という形があります。これを用いて、Türkçe öğrenen Japonlar「トルコ語(を)学んでいる日本人たち」というように「関係節＋名詞」に相当する表現が作られるということです。ですから関係代名詞はありません。

以上、トルコ語文法のごく基本的な特徴をいくつか述べましたが、以下ではもう少し個別的なトピックを2つ選び、皆さんに紹介したいと思います。ただ、は

じめの方でも言いましたけれど、メジャーな言語の場合と違って説明の仕方はひと通りではありません。なぜかと言いますと、例えば日本語を外国人に教える場合、我々が学校で習うような国文法の枠組みでは普通教えないと思います。用語の問題もあるでしょうが、そもそも日本人が日本語の仕組みを理解するにも、国文法の説明の仕方というのはいろいろと問題があるように私は思います。やはり文法はその言語の仕組みを反映するものであるべきなのに、いわゆる国文法というものは必ずしもそうっていない。トルコ語の場合にも、いろいろ違った立場による説明がありまして、例えばトルコで使われているトルコの学校文法をそのまま持って来て我々が使えるかということ、ちょっとそうも行かないところがあります。同じトルコ語の文であっても、それをどう分析するか、説明するかという点では、立場や考え方によって違った扱いをせざるを得ないところがあります。これだということに 1 つに決まっていなわけです。例えば、上の 2. で名詞の格としてあげたものの 7 番目、共同・手段格とした *evle* 「家と；家によって」は、「～と」や「～を使って」を表す形ですが、これを格とはしない立場があります。どうするかというと、先の例文に出てきた *için* 「～にとって」という語（「後置詞」と呼ばれています）と同じ仲間にする。たまたま前の語にくっついてはいるけれども、格の接尾辞とは違って後置詞という語の一種である、とするわけです。それぞれに一長一短があって、絶対的にどちらかが正しいということは言いにくいのですが、そういったところで立場や考え方の違いが出てくるわけです。

6. トルコ語の「コピュラ文」について

コピュラ文というのは「A は B である」というタイプの文です。かねがねおもしろいと思っている問題なのですが、トルコ語では次のように表わされます。

Ben yorgunum.	私は疲れている。
Biz yorgunuz.	私たちは疲れている。
Sen yorgunsun.	君は疲れている。
Siz yorgunsunuz.	君たち／あなた／あなたがたは疲れている。
O yorgun.	彼／彼女は疲れている。

yorgun というのは「疲れている」という形容詞です。これ自体は変化しません。「私は疲れている」、「私たちは疲れている」、「君は疲れている」、などの場合には、最初の *ben*, *biz*, *sen*, *siz* がそれぞれ「私 (は)」、「私たち (は)」、「君 (は)」、「君たち／あなた／あなた方 (は)」にあたるものですが、それぞれに対応して (つまり一致して)、形容詞の後にも *Ben yorgunum*.とか *Biz yorgunuz*.というふうに**太字**で書かれた部分が付きます。これは何なのかと言うと、英語で書かれた文法書では英語の *be* 動詞にあたるものであるという説明がされることがあります。必ずしも全部がそうしているわけではありませんけれども、これを *be* 動詞として理解するのは確かに自然なことかもしれません。1 つ古い例として、イタリア人 (と思われる) フィリッポ・アルジェンティという人が 16 世紀に当時のトルコ語を記録した資料があるのですが、¹ そこでは次のように書かれています。

Verbo

io sono --- ben im

tu sei --- sen sin

quello e² --- ol dur & der & ter & tur

noi semo --- bis is

voi siete --- sis sinís

quelli sono --- onlár der

手書きで残っているもので、(少なくとも私には) なかなか読みにくいものですが、ちゃんとここでも *verbo* 「動詞」となっています。*ben* に対しては *im*、*sen* に対しては *sin*、*bis* に対しては *is* のように、現代語の場合とほぼ同じもの (母音が違うのは最初に言ったバリエントの 1 つ) が当時もあって、かつそれをこの人はイタリア語の *be* 動詞として理解し説明したことがわかります。ここで 3 人称のところに *dur/der/ter/tur* という形が書かれていますが、これは今日のトルコ語ではなくてもよい要素です。3 人称が主語の場合、*O yorgundur*.とも言えますが、*O yorgun*.というふうに文の最後に何もつけない形の方が普通です。余談になります。

¹Filippo Argenti, *Regola del Parlare Turcho*, 1533.

²原本では *q̄llo* /e/ のように書かれています。

すが、このようなヨーロッパ人による資料というのは大変おもしろいものでして、この本はこういった変化表や語彙のほかに、諺や例文を含んでいますけれど、もう少し後の 1672 年という日付の入ったある書物になると、それはまさに当時の日常会話です。トルコ語会話の非常に生き生きとしたテキストが残されています。本当に当時こうやって喋っていたんだな、ということがよくわかる資料として、非常におもしろいものです。17 世紀ですからそこそこ古いのですが、それでも当時の人たちはかなりの程度まで今と変わらない感じで会話をしていた。このような面白い資料が残っているということは、やはりヨーロッパに近かったトルコならではで、大変に羨ましい話ではあります。

話を元に戻します。形容詞や名詞の後に置かれて主語の人称と数を示す要素を、英語の be 動詞に相当するものだと考える。昔からそういった説明がされてきているし、ヨーロッパだけでなくトルコの学校文法でも同じように説明されることがあります。ただそうした場合、その他の動詞、例えば上で取り上げた *tanı-*「(人)を知る」などとは全く性質が違う、似ても似つかないということになってしまって、やはりよろしくないわけです。一方で、これらを be 動詞とはしない方がいい理由がいくつかあります。1 つは、同じものが動詞にもつくということです。例えば *çalışıyor*「働いている」という形は動詞の現在形と呼んでいるものですが、これが述語になっている場合にも、主語の人称と数に一致して全く同じものが付けられます。

Ben çalışıyorum.	私は働いている。
Biz çalışıyoruz.	私たちは働いている。
Sen çalışıyorsun.	君は働いている。
Siz çalışıyorsunuz.	君たち／あなた／あなたがたは働いている。
O çalışıyor.	彼／彼女は働いている。

ということは、上の「私は疲れている」Ben yorgunum.の-um が be 動詞だとすると、この Ben çalışıyorum.の-um は何かということになります。形は全く同じなので、同じように扱うのか。そうすると前の部分 *çalışıyor* は動詞なのか、違うのかという問題が出てきます。³ トルコの文法は通常これらを区別して、最初の

³ここで *çalışıyor* が英語の現在分詞と同じ働きをしていると考え、これと be 動詞との組み合わせを英語の「現在進行形」と並行的に解釈することはもちろん可能です。

ものは **be** 動詞、後のものは動詞につく接尾辞だという、かなり無理な説明をしています。同じ形であり同じような働きをしているのだから、同じものとして扱ったほうがいいように思えるのですが、最初の出発点から前者は **be** 動詞であるとし、さらにその根底にある考え方として文には必ず動詞があるというところから始めると、どうしてもこうならざるを得ないわけです。しかしそんなふうを考える必要は実はないのであって、これらの要素は単に主語の人称と数を表わすものであると考えて何の問題もないのです。特定の時間も表わしていない。 **Ben yorgunum.** という文であれば、**-um** の部分は主語が 1 人称単数であることだけを表わしており、**yorgun** 「疲れている」というのは形容詞だから時間を持っておらず、他に時間を表す要素は何もありませんから、結果としてデフォルトの解釈として「私は今現在において疲れている」と理解される、という風に説明すれば、一番すっきりする。つまり **-um** は動詞ではなく、主語の人称と数を表わす要素だとしか言いようがない。**be** 動詞であると説明した方が、よく知られている概念だから一見わかりやすいのは確かです。しかしそれではこの言語の仕組みをうまく説明しているとは言えないのです。ですから、表面的なわかりやすさから出発するのは危険である。一見とつきにくい説明に見えても、一致の要素として考えたほうが、この言語の仕組みをよりよく表わせることになるのです。そこまではわりと普通の話なんですけれども、もう一段階進めて、これを「主語」とするとする立場があります。主語代名詞がくっついているのだと。フランス語やイタリア語では代名詞が動詞にくっつくことが知られています。目的語が名詞だったら動詞の後に置かれるのですが、代名詞の場合には接語として動詞の前に来るという現象ですね。あれと似た考え方で、トルコ語では普通は主語が先に来て主語－目的語－動詞という語順なのですが、主語が人称代名詞の場合には接語として述語にくっつく。その場合に、前ではなくて後に付くという説明です。ですから **Ben yorgunum.** 「私は疲れている」という文であれば、**yorgun** が述語・形容詞で、**-um** が主語・代名詞、ということになります。実はこれは歴史的には全くその通りで、本来は主語代名詞が文末にそのまま置かれていました。それが変化していつて今ようになったと考えられているので、そういう意味では文句のつけようがありません。ということは、**Yorgunum.** だけで「私は疲れている」という完全な文なのであり、主語が省略されているのではないということになります。従って、普通は主語として扱われている **Ben** 「私（は）」は主語ではなく、**Yorgunum.**

「私は疲れている」という文のいわば外に、対比や強調のために置かれているものと解釈されます。そのあたりを会話の例で見てみましょうか。

Merhaba, nasılsınız? こんにちは、ごきげんいかがですか。

İyiyim, teşekkür ederim. Siz nasılsınız?

元気です、ありがとう。あなたはいかがですか。

Ben de iyiyim, teşekkür ederim. 私も元気です。ありがとう。

多くのトルコ人がそれこそ毎日のように繰り返している会話です。nasılsınız? 「ご機嫌いかがですか」という表現の-sınız の部分がいま問題にしている 2 人称複数（ここでは一人の相手に対する丁寧な表現）の要素で、ある立場では be 動詞、別の立場では主語の人称・数を表わす要素とされるものです。この第 3 の立場ではこれが主語（接語化されている）であり、nasılsınız? で、完全な、何の省略もない文ということになります。次の İyiyim. 「元気です」というのも同じく、-yim が 1 人称単数の主語であって、これだけで立派な文です。ところがその続きに注目してください。「あなたはいかがですか」と問う場合に、この時初めて対比のために **Siz** nasılsınız? というように、最初の文では言わなかった **Siz** 「あなた(は)」が文頭に用いられる。それに対する答えも **Ben de iyiyim**. 「私も元気です」のように、強調のために **Ben** 「私(は)」が置かれる (de はここでは日本語の「も」に相当します)。確かにこの説明とよく合っていることがわかります。同じ考え方は、動詞が述語になっている **Ben çalışıyorum**. 「私は働いている」のような文にも適用できることは言うまでもありません。

ただしこの考え方は、3 人称を主語とする文に対してはうまくあてはまらないようです。例えば「彼／彼女は疲れている」と言う場合には、上に示した **O yorgun**. という形のほかに **Yorgun**. だけの形もありますが、後者では 3 人称代名詞にあたるものではありませんから、これはやはり「主語の省略」と考えざるを得ない。**Yorgunum**. 「私は疲れている」が主語も述語も揃った文であるのに対して、**Yorgun**. 「彼／彼女は疲れている」は主語が省略された文ということになります。1・2 人称と 3 人称との間に見られるこの違いは、3 人称の代名詞 **o** が接語形をもたないことに理由があります。その意味では、**o** は 3 人称の人称代名詞というよりも **bu** 「これ」や **şu** 「ほらこれ；ほらそれ」と同じく指示代名詞のひとつとみなすのがよいと言えます。さらに次のような文も問題になるところです。

Dünyada en mutlu insan benim.

世界で最も幸せな人間（は）私（だ）。

これは「～は私だ」というタイプの文です。普通に考えるならば、Dünyada en mutlu insan「世界で最も幸せな人間」というのが主語で、ben「私」が述語になるでしょう。ところがおもしろいことに、なぜかここで文末に-im「私は」という要素、be動詞とされたり人称代名詞とされたりしている要素が、必ず付きます。「それは私だ」とか、写真を見ながら「これは私だ」とか言う場合もみな同じで、理屈の上での主語は3人称に違いないのですが、あたかも1人称であるかのように、1人称の場合と同じ要素が文末に現われます。「それはお前だ」であれば2人称を示す要素が文末に付きます。おそらく、述語である1人称や2人称の代名詞に引かれて、それらの人称に一致する要素が現われるのでしょうか、文法的には説明しづらい、イレギュラーな形です。これを、文末の要素が実は主語代名詞であるという立場で説明しようとする結構厄介なことになります。ですからこの「主語代名詞説」は、発想としてたいへん興味深い分析ですが、実際上のメリットはそれほどでもないような気がします。おとなしく「主語の人称と数を表わす要素」と言うに留めておいた方が、今のところは無難であろうと考えています。そのため大学の授業でも「人称の付属語」という呼び名を採用して説明しており、接語化した主語代名詞としては扱っていません。

7. トルコ語の受け身文の特徴

トルコ語に関する最後の話題は、受け身文の特徴についてです。先ほど4.の動詞の構成のところで「知り合わせられなかった」という受け身の例を挙げましたが、元の動詞の語幹と受け身の動詞の語幹を並べていくつかの例を示します。

tanıştır-「知り合わせる」 — tanıştırıl-「知り合わせられる」

iç-「飲む」 — içil-「飲まれる」

oku-「読む」 — okun-「読まれる」

git-「行く」 — gidil-「？」

ağla-「泣く」 — ağlan-「？」

例文は挙げませんでしたが、iç-「飲む」という動詞は、人なり動物がいて、飲まれるもの（水とかコーヒーとか）があつて、誰かが何かを飲む、ということを表わしています。必ずそういう前提があります。içil-「飲まれる」と言ったら、飲み物の方を主語にして、水が飲まれるとか、コーヒーが飲まれるとかいうようになります。両者の間にはそういう関係が成り立ちます。oku-「読む」の場合も同じで、人が文字なり本なりを読む。okun-「読まれる」の方は、文字や本が読まれる、という関係です。そこには問題はないと思います。ちなみにどの言語にも「読む」という動詞はあると思いますが、では文字がなかったときはどうだったのか、考えたことがあるでしょうか。文字ができる前から「読む」という単語があったのだろうかという問題ですね。日本語の場合、「読む」という語は本来は「空気を読む」というときのように「感じ取る、察知する」といった意味で使われていたのが、文字が用いられるようになってから「書かれた文字を読む」という意味でも使われるようになったのでしょうか。トルコ語の oku-「読む」の本来の意味は「呼ぶ」です。古い文献では「呼ぶ」という意味で使われています。もうひとつ面白いのは、Kuran oku-「コーランを読む」と言うと、普通は声に出して朗読することになります。まさに日本語の「読経」と同じです。「読経」と言ってもまずイメージするのは、お坊さんが声に出して唱えている状況でしょう。「読書」という場合とは違って、「読経」と言ったら声に出して読み上げることですが、Kuran oku-「コーランを読む」も同じで、目で読むのではなくて声で唱えることを普通は指します。さて、iç-「飲む」と içil-「飲まれる」、oku-「読む」と okun-「読まれる」に関しては特に変わったことはありませんが、3つ目の git-「行く」に対する gidil-はどうでしょうか。içil-「飲まれる」の場合と同じ接尾辞-il-がついているこの動詞も、やはり受け身の動詞です。

İstasyona beş dakikada gidilir.

駅に 5 分で 行かれる（行ける）。

のような文が作られますが、これも受け身の文ということになります。あるいは、ağla-「泣く」に-n-という接尾辞がついた ağlan-は

O filme ağlanır.

その映画に 泣かれる（泣ける）。

といった文で用いられます。これらの場合は、「水が飲まれる」とか「本が読まれる」というような、動作を受ける対象がそもそもないですね。「行く」も「泣く」も対象をもつ動作ではありませんので、そういう意味では受け身とは言えない。動作の受け手がいませんから受け身というのもおかしい話です。でもトルコ語にはそういう動詞があって、とてもよく使われています。では何を表わしているのかというと、よくある説明としては、İstasyona beş dakikada gidilir.であれば「誰が行っても、誰でも駅まで5分で行ける」というような、動作をする人が誰であるかに関係なく、人々一般に広く当てはまる動作を表わす、というように説明されます。O filme ağlanır.であれば「その映画に対しては誰であっても泣く」と。これらの文には主語がありません。İstasyona「駅に」や O filme「その映画に」はいずれも与格の接尾辞-a または-e を伴っていますから主語ではありません。このような、主語がない受け身の文は、人々一般に広く当てはまる動作、皆によって行われうる動作を表わすというように普通は説明されています。しかしもう一步踏み込んで、なぜそういう表現が必要なのかを考えてみることにしましょう。先ほどもちょっと触れましたが、トルコ語では3人称を主語とする文において主語の「省略」が可能です。

Ali geldi mi? — Geldi.
アリ (は) 来た か。 (彼は) 来た。

こういった例でわかりますように、主語をもたない文、主語を省略した文というのは、日本語でもできるしトルコ語でもできます。英語ではダメですね。英語の場合、命令文以外では主語がない文はあり得ない。そういう意味では、日本語もトルコ語も主語を省略してよい言語だと言ってよいと思います。その点だけを見ると、トルコ語では日本語の場合と同じように主語のない文が作れるんだな、というふうに思いかねませんが、よく見ると実は重要な違いがあります。上の例は、Ali geldi mi?「アリは来たのか。」に対する返答としての Geldi.「(彼は) 来た。」ですが、こういう場合に O「彼 (は)」というのは省略されます。主語を省略できない言語だったら、この場合にも「彼は」という代名詞が必要ですが、トルコ語では代名詞が出てきません。これがトルコ語での主語の省略の基本的なパターンと言えます。つまり、何でも省略してよいわけではない。日本語では「駅まで5分で行けます」と全く問題なく言えます。この場合、誰が行けるのかは普通考

えていませんね。あなたかもしれないし、誰でもいいのかもしれません。でもそういう「駅まで5分で行ける」という主語なし文は、「(彼は) 来た」という主語なし文とは違います。「彼は」というべきところを省略しているのとは違って、最初から主語を考えていない。特定されていない動作主に関して、駅まで5分で行けるということを述べています。日本語ではこういう例はいくらでもありますけれども、トルコ語ではそれにはかなりの制約があって、勝手に省略できない。既に言及されてわかっている場合、O geldi. 「彼／彼女は来た」とは言わないで単に Geldi. 「来た」とだけ言う。そういう省略は構わないんですけど、そうじゃない勝手な省略はできないということで、同じ主語の省略といってもトルコ語と日本語とは実は大きな違いがあるのです。ですから、「(誰が行っても) 駅まで5分で行ける」という意味のことを言いたかったら、トルコ語では単に主語を言わないだけでは具合が悪いので、動詞を受け身にしてしまうことで、誰が行くのかを表わす要素を消すことができるのです。「(誰でも) その映画には泣く」の場合も全く同様です。こうして初めて、誰が行くのか、誰が泣くのかということ特定しない文ができるということになります。そのための手段としてこういう受け身文があるんだということを押さえておかないと、やはり本当にこういう用法についてわかったとは言えないと思います。そう考えることによって初めて、なぜ受け身が使われているのかということが納得できるのです。能動文で「行く」とか「泣く」とか言う限り、トルコ語では「誰が」ということを必ず問題にしなくてははいけない。何らかの形で「誰が」という情報が復元できるようになっていないといけないうですね。そのため日本語の「駅まで5分で行ける」、あるいは「この映画には泣ける」のように、「誰が」に関係なく一般的にそうであると言いたい場合には、能動文ではなく受け身文を使うことになるのです。次のような一見変わった文、Ev barınılan, sığınılan, içinde yaşanan, mutlu yahut mutsuz olunan, içinde doğulup ölünen bir yerdir. 「家とは、生まれ、避難され、その中で生きられ、幸福にあるいは不幸になられ、その中で生まれられ死なれる場所である」では、barınıl- 「住まれる」、sığınıl- 「避難される」、yaşan- 「生きられる」、olun- 「なられる」、doğul- 「生まれられる」、ölün- 「死なれる」と動詞がすべて受け身になっていますが、もうその理由はおわかりでしょう。一般論として言っているわけで、誰でもあるかに関係なくそこに住んで避難して生きて、ということを知りたいときには、能動形では言いづらい。能動形で言う以上は「誰が」ということを問題にしないといけないうので、それが問題になっていないことを示すために全部受け身の動詞

に変えて、わざわざ「生まれ、避難され、生きられ」というような言い方をしているということがわかります。そこをきちんと押さえずに、単に日本語と同じように動詞に接尾辞がついて受け身の形ができる、という理解ではやはり心許ないと言いますか、不十分だろうと思います。受け身の作り方が日本語とよく似ているだけに、それがかえって落とし穴になって、主語の省略に関して日本語とは大きな違いがあることを見落としがちになります。İstasyona beş dakikada gidilir. 「駅に5分で行かれる」は、git-「行く」という自動詞の受け身を用いた文だから「誰でも5分で行くことができる」という特別な意味を表わすのだ、といった説明は、自動詞の受け身が、(例えば英語のように) それをもたない言語の立場からは一見特殊に見える「変わった」形であるという違和感から出発しているところに問題があります。トルコ語としてはなんら特殊ではないごく普通の形ですから、特殊なものとして説明するのはやはり方針としておかしいのです。ある言語現象が「不思議だ、変わっている」という感覚はもちろん言語の研究にとって大切なことではありますが、その言語の話者たちにとっては少しも不思議ではないのだから、研究者はその違和感をなくさないといけなく。そうしない限り外側からの分析にとどまってしまう、その言語の真の姿に迫ることはできないと思います。実は、自動詞の受け身の特徴とされていることが、他動詞の受け身にもあてはまる場合があります。

Burada sigara içilir.

ここで タバコ (が) 吸われる (吸える)。

トルコ語では「タバコを飲む」という言い方をするので、iç-「飲む」の受け身である içil-「飲まれる」が使われていますが、これは他動詞の受け身だから何の問題もないのかというと、実はこれも「誰でもタバコを吸ってよい」という意味を表わしており、その点で自動詞の受け身の文と同じ性質をもっているわけです。たまたまこちらは sigara 「タバコ」という主語の候補があるために「普通の」受け身文として分析できるのですが、同じ性質をもち同じ目的で用いられている以上は、同じ説明が出来ないといけなく。「違和感」というところから出発すると、両者の間の共通点が見過ごされてしまい、説明の一貫性も失われてしまうのです。gidil-による受け身文は「行くという動作が行われる」、içil-による受け身文は「飲む(吸う)という動作が行われる」をそれぞれ意味していると考えれば、よりト

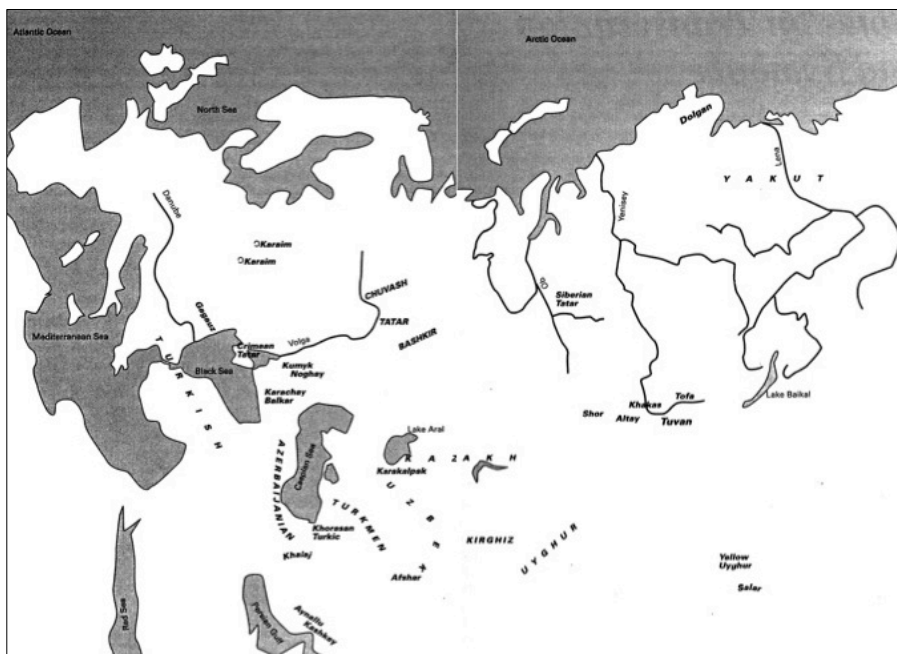
ルコ語に沿った理解ができる。そして主語の省略という現象とあわせて考えることで、このような言い方がなぜ必要なのか、なぜ頻繁に使われるのかがはじめて納得できるのです。

ただ、先ほどのコピュラ文のケースもそうですが、こういった言語学的な考え方をどれだけ実際の教育の場面で活かせるかという、なかなかむづかしいところがあります。ある考え方を教科書に載せたり授業で説明したりすることで、その結論だけが暗記事項になってしまうのはこちらの意図するところではありません。文法というものは決して「覚えたら終わり」ではない。よりよい説明、もっとその言語の仕組みに沿った説明を常に探求していくことこそが、言語研究の大きな部分を占めているのだと思います。

8. チュルク諸語の概観

後半は、話の方向が少し変わって、チュルク諸語を概観します。分布図（次ページ）を載せておきましたので適宜ご参照下さい。「チュルク諸語」というのは、英語で言う (the) *Turkic languages* の日本語訳です。前節までで述べてきたのは「トルコ語」、こちらは英語では *Turkish* です。言語学では *German* 「ドイツ語」と *Germanic* 「ゲルマン諸語（語派）」、*Italian* 「イタリア語」と *Italic* 「イタリック諸語（語派）」とか、最近では *Mongolian* 「モンゴル語」と *Mongolic* 「モンゴル諸語」という言い方もあるようですが、このようにより広い（上位の）単位の名称に *-ic* で終わる形を使うのが通例です。一方でこの *Turkish* : *Turkic* という区別をせずに、どちらの意味でも *Turkish* を使う人もいます。我々としては、せっかくこういう用語があるのだから *Turkish* を「トルコ語」、*Turkic* を「チュルク（諸）語」と訳し分けるのが、単純に誤解がなくてよいのではないかと思います。世の中にはよく、チュルク諸語のことを指して、それらがトルコ語の「方言」であるような言い方をする人がいますが、それは正しくありません。同じように、これらの間の違いは「方言」程度の違いであると言うのも不適切です。言語学の立場では、違いが小さいから方言で、違いが大きいから（別の）言語だとは考えません。同じ系統の中にある言語同士の関係は、みな方言の関係であるというのが言語学での考え方です。ですから、言語学の文脈の中であれば「チュルク諸語」が互いに方言の関係であると言っても間違いではありません。全く正しい。しかし、日常一般に「方言」と言う場合にはどうでしょう。我々が普段「方言」と言う場

合には、標準語・共通語に対する反対概念としての「方言」を意味することがほとんどだと思います。



チュルク諸語の分布

(出典：Johanson, Lars and Csató, Éva Ágnes (eds.) 1998.

The Turkic Languages. London - New York: Routledge, pp. xvi-xvii)

その意味であれば、チュルク諸語を「方言」と言うのは明らかに間違いです。それらの間の共通語にあたるものが存在しないからです。日本語の方言（地域方言）は、いかにそれぞれ違っても、全国どこでも共通語（標準語）の教育が行われています。先生が方言で授業をすることはもちろんいくらでもありますけれども、方言そのものを学校で教えているわけではありません。読み書きや放送も基本的に共通語によっていますから、これと各自の方言とを並行して使っているというのが日本の状況だと思います。方言と共通語に優劣があるのではありませんが、公的な場では共通語が使われるように、使われる場面という点で、後者には前者にはないある地位が備わっています。それに比べるとチュルク諸語の状況は全く違う。大多数の言語は独自の文字・正書法を備えており、教育が行われており、文法書や辞書が作られている、そういう状況です。言語同士が似ている似ていないということとは関係なしに、それぞれが自立した言語としてちゃんと

機能しており、一定の地位をもつものとして扱われているのです。それらに対して、日本語の地域方言を連想させる「方言」という呼び名を使うことはそもそも失礼な話です。繰り返しますが、チュルク諸語全体の共通語というものは存在していません。決してトルコ語が過去にその役割をしていたわけでもないし、今日しているわけでもありません。もちろん今後トルコ語が放送などのメディアを通じて影響力を強めていけば、ある種の共通語的な地位を手に入れる可能性は否定できませんが、現時点ではそうなってはいません。

共通語によって結び付けられていなかった以上、文化的な共通性ということも考えにくい。チュルク諸語が話されている地域の多く（すべてではない！）がイスラム圏に属しているため、イスラム教に由来するさまざまな要素が共有されているのは事実です。しかし広いイスラム圏の中で、チュルク諸語の地域だけに共通するものがあつたかという点、その可能性は低い。「圏」であるためには、それらに共通のものがあつて、しかもその共通のものがそこにしかないことが条件です。従って、チュルク語圏とかチュルク世界といった名称で呼べるような文化圏は、現実には存在しなかっただろうと思われます。同じように「遊牧の伝統」といったことがしばしば安易に言われていますが、定住民としての歴史を長く持っているところも少なくない。遊牧文化は決して全域に共通して見られるものではないため、あまりこれを強調するべきではありません。

以上がいわば外枠の話になりますけれど、もちろんこれらの諸言語がお互いにどのくらい似ているのかは、皆さんも関心があるところだと思いますので、以下いくつか例を見ていきましょう。なお以下でとりあげる言語はそれぞれ異なる正書法を採用しているため、例をあげる際に正書法の表記をそのまま用いると煩雑になるので、一部手を加えた形で示しますが、異なる言語間で同じ音が違う文字で表わされたり、逆に違う音が同じ文字で表わされたりといったことが避けられません。その点をあらかじめご了承ください。

あなたの名前は何ですか。

トルコ語	Sizin adınız ne?
ウズベク語	Sizniñ otinijiz nima?
キルギス語	Sizdin atıñız kim?
サハ語	En ātūñ kimiy?

これを見ると、まん中の単語が *adınız, otiñiz, atıñiz, ātiñ* で似ていますよね。⁴これくらいの似通りはあるということです。おもしろいことに、疑問詞として何を使うかに違いがあって、最初の 2 つは「名前は何」、後の 2 つは「名前は誰」と尋ねています。なおサハ語はヤクート語とも呼ばれ、東シベリアで話されている言語です（先の分布図では YAKUT という名称で示されています）。

あなたは何歳ですか。

トルコ語	Siz kaç yaşındasınız?
ウズベク語	Siz neča yošdasiz?
キルギス語	Siz kanča jaštasız?
サハ語	En sähij xahiy?

もう最後のところはわけがわかりませんが、実はこれも対応しています。*yaş, yoš, jaš* に対して、⁵ *säh*（単独では *säs*）という形はあまりにも違いますから、知らなければこれらがみな同じ意味・同じ起源の単語だということは普通はわかりません。音の間の対応関係はもちろんありまして、その対応関係を知っていれば、我々は一応プロなので、脳内変換によってこれはこうだな、と理解できる部分はあります。そういうのなしでいきなりだったら、これはかなり苦しいところがあります。

あなたは〇〇語を話しますか。

トルコ語	Siz Türkçe konuşuyor musunuz?
アゼルバイジャン語	Siz azərbaycanca danışırınsınız?
ウズベク語	Siz o'zbekcha gapirasizmi?
タタール語	Sëz tatarça söyläšäsëzmë?

はい、私は〇〇語を話します。

トルコ語	Evet, ben Türkçe konuşuyorum.
アゼルバイジャン語	Bəli, mən azərbaycanca danışıram.
ウズベク語	Ha, men o'zbekcha gapiraman.
タタール語	Äyë, min tatarça söyläšäm.

⁴トルコ語の母音 *i* とキルギス語・サハ語の母音 *ï* とはほぼ同じ音になります。

⁵トルコ語の *ş* とウズベク語などの *š* とは同じ子音です。

「話す」という単語は基礎語彙に属するはずですが、語幹で比較するとトルコ語 konuş-, アゼルバイジャン語 danış-, ウズベク語 gapir-, タタール語 söyläş-と、すべて違う形を使っています。あるいは、「はい、わたしは〇〇語を話します」、の「はい」はそれぞれ evet, bəli, ha, äyë という風に、こちらもみんな違っています (ha はトルコ語でも使われることがあります)。

文法に関しては、例えば名詞の複数形をつくる接尾辞には次のような違いがあります。

名詞複数接尾辞

トルコ語	-ler/-lar
ウズベク語	-lar
キルギス語	-ler/-der/-ter/-lör/-dör/-tör/-lar/-dar/-tar/-lor/-dor/-tor

トルコ語だと、名詞に接尾辞 -ler/-lar を付ければ複数形ができます。どちらの形が用いられるかは名詞の母音によって決まり、2 つある候補のうちから正しい形が選ばれるという関係です。一方ウズベク語には -lar ひとつしかありません。バリエーションが存在しないんですね。ところがそのすぐ隣に位置しているキルギス語では、母音が e/ö/a/o の 4 種類に変化するうえに、子音も l/d/t と 3 通りに変わりますから、都合 12 個もある候補のうちから正しい形を瞬時に選んでくっつけることになります。従って「場所」、「ペン」、「日」、「鳥」、「山」、「友」の複数形はそれぞれの言語で次のようになります。

	トルコ語	ウズベク語	キルギス語
「場所」(複数)	yerler	yerlar	jerler
「ペン」(複数)	kalemler	qalamlar	kalemder
「日」(複数)	günler	kunlar	kündör
「鳥」(複数)	kuşlar	quşlar	kuştar
「山」(複数)	dağlar	toğlar	tölor
「友」(複数)	dostlar	dōstlar	dostor

トルコ語では上の3つには-ler、下の3つには-larが付いているのに対し、ウズベク語では全部-lar、一方キルギス語では-ler, -der, -dör, -tar, -lor, -tor というように6つの単語ですべて異なっており、しかもまだこれで全部ではないわけです。

上で「話す」を意味する動詞が言語によって異なることを述べましたが、例えばトルコ語とウズベク語の間にはほかにも次のような語彙の違いがあります。

	トルコ語	ウズベク語	
「手」	el	qol	cf. Tr. kol 「腕」
「右」	sağ	oʻn	cf. Uz. sog 「健康な」 ⁶
「子供」	çocuk ⁷	bola	
「太陽」	güneş	quyoş	
「理解する」	anla-	tuşun-	cf. Tr. düşün- 「考える」
「見つける」	bul-	top-	cf. Tr. tap- 「拝む」
「止まる」	dur-	tõxta-	cf. Uz. tur- 「立つ」
「似る」	benze-	õxşā-	cf. Tr. okşā- 「撫でる」
「戻る」	dön-	qayt-	
「よい」	iyi	yaxşı	
「たくさん」	çok	kõp	
「昨日」	dün	keça	cf. Tr. gece 「夜」
「明日」	yarın	erta(ga)	cf. Tr. erte 「翌日」
「いつ」	ne zaman	qaçon	

いずれも基本的な語彙ですが、互いに全然関係ない（と考えられる）語彙をそれぞれ使っていることがわかります。その経緯は複雑ですが、これくらいの違いは覚悟しておく必要があるということです。しかも違っているばかりか、右側に示したように似た形の単語が違う意味で使われることもありますから話は一層ややこしくなる。例えば5つ目の「理解する」はトルコ語 anla-に対してウズベク語 tuşun-ですが、ウズベク語の tuşun-に形の上で対応するトルコ語の düşün-だとこれは「考える」になってしまい、起源は同じだけれど意味がずれています。そういうことも少なからずあります。それらに外来語が加わり、あるいは同じ外来

⁶トルコ語 sağ にも「健康な」の意味があります。

⁷トルコ語 çocuk 「子供」と同源のウズベク語は çõçqa 「豚」であるとされます。

語に違う意味を与えたりしているわけですから、語彙だけでも話は大変に複雑なことになります。

それではこの複雑な状況に対して、チュルク諸語の全体像を理解する上での手がかりあるいは筋道をどう見出したらよいか。まず動詞の現在形（言語によっては現在未来形）を比べてみましょう。

	私は来る	彼／彼女は来る
トルコ語	geliyorum	geliyor
アゼルバイジャン語	gəlirəm	gəlir
ウズベク語	kelaman	keladi
ウイグル語	kəlimen	kəlidu
タタール語	kiläm	kilä
キルギス語	kelem	kelet
サハ語	kelebin	keler

これを見ると、「私は来る」という 1 人称単数の形と「彼／彼女は来る」という 3 人称の形の両方について、トルコ語とアゼルバイジャン語、ウズベク語とウイグル語、タタール語とキルギス語とがそれぞれある程度の似通りを示していることがわかります。サハ語はこれらとは若干違ってきます。次に数詞の「50」を見てみましょう。

	50
トルコ語	elli
アゼルバイジャン語	əlli
ウズベク語	ellik
ウイグル語	ellik
タタール語	illë
キルギス語	elū
サハ語	bies uon

ウズベク語とウイグル語とが、末尾に子音 **k** をもつ点で共通しています。一方でサハ語は **bies uon** という全く似ても似つかない語形になっていますが、これは何かというと「**5** つの **10**」という分析的な表現です (cf. トルコ語 **beş** 「**5**」、**on** 「**10**」)。他の言語では「**50**」を意味するひとつの単語があるのに対し、サハ語とその近くのいくつかの言語ではこのような分析的な言い方が用いられます。

これらの例からは、地理的に隣接するトルコ語とアゼルバイジャン語、ウズベク語とウイグル語がそれぞれ言語的にも近い関係にありよく似ているということがうかがえます。しかしその一方で、動詞の過去形（および完了形）の比較からは少々違った状況が見えてきます。

	彼／彼女は来た			
トルコ語	geldi	gelmiş		
アゼルバイジャン語	gəldi	gəlmişdir	gəlib(dir)	
ウズベク語	keldi		kelibdi	kelgan
ウイグル語	keldi		kéliptu	kelgen
キルギス語	keldi		keliptir	kelgen
サハ語	kelle	kelbite		

過去の動作の表現では、直接経験か間接経験（伝聞など）か、それが現在と関わりがあるかどうか、などによってそれぞれの言語で複数の形式が使い分けられており、その使い分けの基準もすべて同じではありません。⁸ いま形だけに着目すると、ここでもトルコ語とアゼルバイジャン語には、語頭の子音 **g**-や接尾辞 **-miş** をもつ形式があるという点でやはり共通性が見られます。他方でウズベク語、ウイグル語、キルギス語には接尾辞 **-miş** をもつ形式がありませんが、**-gan** あるいは **-gen** という接尾辞をもつ形式が共有されており、これらはトルコ語やアゼルバイジャン語とは別のグループに属すると判断されます。ところが、これら 3 言語に見られる接尾辞 **-ib** や **-ip** をもつ形式はアゼルバイジャン語にも **gəlib(dir)** として存在します。トルコ語にはこれに対応する形はありませんから、アゼルバイジャ

⁸ 例えばトルコ語 **gelmiş** は「彼／彼女は来たそうだ・来たらしい」という間接経験の形であるのに対し、アゼルバイジャン語 **gəlmişdir** は「彼／彼女は来た（結果ここにいる）」という完了の意味を表わします。なおここに挙げた以外にも、過去における進行や過去における完了などをあらわす形がそれぞれの言語に存在します。

ン語はこの点で両方のグループの特徴をあわせもつことになります。このように、ある言語グループの特徴が別の言語グループの中に部分的に喰い込んでいくという状況がしばしば見られます。ですから、ある1つの基準で分類しても全部の特徴がきれいに揃うわけでは必ずしもなく、重ならない部分がしばしば出てきてしまうのです。一方、トルコ語とアゼルバイジャン語に見られる-miş という形は、実はサハ語の接尾辞-bit と同源です。このことは、起源を同じくする形式が、互いに遠く離れた西アジアと東シベリアだけに残っているということを意味します。これと似た現象は「いくつ」という疑問詞の分布にも見られます。

	いくつ
トルコ語	kaç
アゼルバイジャン語	neçə
ウズベク語	neča, qanča
キルギス語	kanča
サハ語	xas

アゼルバイジャン語、ウズベク語、キルギス語の形はいずれも語末に-çə あるいは-ča という要素をもちますが、⁹ これらは程度などを表わす接尾辞であり、3つの言語の「いくつ」という語はどれも「疑問の要素+程度の接尾辞」として分析できます。語の中身が見えるわけですね。一方トルコ語の kaç は中身が見えません。ka はおそらく疑問の要素と考えられますが、-ç という接尾辞は存在しないので、アゼルバイジャン語の場合などと違って分析できません。¹⁰ 従ってトルコ語 kaç はより古い形と推定されます。興味深いことに、ウズベク語など他の言語では「疑問の要素+程度の接尾辞」という分析的な表現にとって代わられたと考えられるこの形はサハ語に xas として残っています。先にあげた例文 En sähij xahiy? 「あなたは何歳ですか」の xah の部分がそれです。

トルコ語とアゼルバイジャン語の-miş に対応するサハ語の-bit や、トルコ語の kaç に対応するサハ語の xas は、チュルク諸語の分布域の一番外側のところに古

⁹ ç と č はここで同じ子音を表わしています。

¹⁰ 程度などを表わす接尾辞はトルコ語でも-ça/-çe/-ca/-ce という形で用いられますが、末尾の母音 a や e が落ちることは決していないので、kaç の-ç をこの接尾辞と関連づけることはできません。

い特徴が残っている例であるとみなすことができます。以上見てきたことからわかるように、チュルク諸語ではさまざまな言語特徴が複雑な分布を示しており、それらをすべて反映するような整然とした分類の図式を描くのはほとんど不可能に近い。言語の分類というと、枝分かれ状の図（系統樹）を連想することが多いかも知れませんが、この場合にはそれが有効とは言えません。そもそも分類というものは目的があつてのものですから、唯一の正しい分類があるかのように考えるべきではありませんし、分類が独り歩きするようなこともあつてはならないと思います。このことは、もっと広く言語の系統や語族といった問題を考える際にもあてはまるのではないのでしょうか。ある言語が〇〇語族に分類される・属するということが、その言語の第一の「自己紹介」、最も重要な属性である必然性はないのです。まず系統的な特徴づけがないとその先に進めないというような偏った見方は、そろそろ改めていくことが必要でしょう。ほかならぬチュルク諸語の状況が、言語の系統に対するより柔軟なアプローチへのヒントを示しているように私には思えます。以上で私の話を終わります。ありがとうございました。

コラム 十

チュルク諸語の東と西

チュルク諸語がどのような過程をへて現在のような分布を示すようになったかについてはまだ不明の部分が多いのですが、それらの話し手たちはチュルク諸語というものをどのように見ていたのでしょうか。自分たちの言語の「親戚」が別の土地で話されているという認識がいつごろから確認されるのか、というのはなかなか興味深いテーマです。知られている最も古いまとまった言及は、11世紀のマフムード・アル＝カーシュガリーが編纂した『チュルク語諸方言集成』という辞書に見られます。編者のマフムードは各地を旅して回りつつ当時のチュルク諸方言（あるいは諸言語）に関する情報を収集しました。『チュルク語諸方言集成』中で、部族によることばの違いとして記述されているそれらの情報は、チュルク諸語の歴史を研究する上でたいへん貴重なものです。例えば、当時西方に分布していたオグズ族の言語では、「私」を *män* ではなく *bän* と言い、「右」を *on* ではなく *sağ* と言ったことが記されていますが、これは本文で取り上げたウズベク語 *men*, *on* に対するトルコ語 *ben*, *sağ* の関係と正しく並行しており、この相違が少なくとも11世紀のマフムードの時代にまで遡ることが確認されます。

時代は下って15世紀頃になると、西アジアではオスマン語、中央アジアではチャガタイ語と呼ばれる文章語がそれぞれ確立していきます。チャガタイ語による文学作品はオスマン朝でも知られるようになりますが、これが中央アジアとの間で「共通語」の役割を果たしていたとは考えられません。その一方で19世紀末にイスタンブルで刊行されたあるチャガタイ語の文法書は、序文中で「オスマンの甘美なる言語の源流・来歴たるチャガタイ語」のように述べています。このような認識（むしろ誤りです）の背景には、当時広まりつつあった汎チュルク主義の思想があったものと思われます。

トルコ語とチュルク諸語を知るための2冊

・ ・ ・ ...†... ・ ・ ・ ・ ・ ...†... ・ ・ ・ ・ ・ ...†... ・ ・ ・

残念ながら、トルコ語あるいはチュルク諸語について日本語で書かれた概説書で特におすすめるものはありません。各種の辞典・事典項目のうち、適切な専門家の執筆によるものを参照して下さい。以下には英語による代表的な文献を2点あげておきます。

... ・ ・ ・ ◆ ————— ◆ ・ ・ ・ ...



Johanson, Lars and Csató, Éva Ágnes. (eds.) 1998. *The Turkic Languages*. London - New York: Routledge.

Routledge language family descriptions シリーズの1冊として刊行されたもので、チュルク諸語全体の概説とそれぞれの言語の記述を含んでいます。英語によるまとまった概説書として唯一のものであり、まず参照すべき文献と言えます。

... ・ ・ ・ ◆ ————— ◆ ・ ・ ・ ...

Clauson, Sir Gerard. 1962. *Turkish and Mongolian Studies*. London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.

チュルク諸語の研究に偉大な足跡を残した Sir Gerard Clauson の研究の精髓と言うべき本書は、概説書ではありませんが、チュルク諸語の歴史を理解する上で必読の1冊です。著者 Clauson は‘Turkie’という用語を「こんな英語はない」として使わなかったためタイトルが‘Turkish’となっていますが、扱われている内容はチュルク諸語全体に関わるものです。著者はすでに故人となりましたが、その後 C. Edmund Bosworth による導入を加えた第2版が *Studies in Turkic and Mongolic Linguistics* の書名で 2002 年に RoutledgeCurzon から刊行されています（写真は第2版）。



... ・ ・ ・ ◆ ————— ◆ ・ ・ ・ ...

本講座の実施概要は次のとおりです。

東京外国語大学オープンアカデミー 2012 年度後期開講講座

「言葉とその周辺をきわめる」

日時：2012 年 10 月 9 日～11 月 13 日、毎週火曜日、全 6 回、19 時～20 時半

会場：東京外国語大学 本郷サテライト 3 階セミナールーム

日時：2012 年 10 月 9 日

第 1 回 「日本語と似て非なる言語 ～ビルマ語～」

講師：岡野賢二（東京外国語大学大学院准教授）

日時：2012 年 10 月 16 日

第 2 回 「国語になっていない公用語 ～ガリシア語～」

講師：川上茂信（東京外国語大学大学院准教授）

日時：2012 年 10 月 23 日

第 3 回 「マダガスカル語でもない、フランス語でもない、日本手話とも違う、
独自の混成言語マダガスカル手話の世界」

講師：箕浦信勝（東京外国語大学大学院准教授）

日時：2012 年 10 月 30 日

第 4 回 「“文字”のないことばを学ぶ ～ナン語～」

講師：黒澤直道（國學院大学文学部准教授）

日時：2012 年 11 月 6 日

第 5 回 「フィールドワークと言葉の語彙 ～パミールの言語・ワヒー語～」

講師：吉枝聡子（東京外国語大学大学院准教授）

日時：2012 年 11 月 13 日

第 6 回 「トルコ語とチュルク諸語」

講師：菅原 睦（東京外国語大学大学院准教授）

東京外国語大学オープンアカデミー 2012 年度後期開講講座

「言葉とその周辺をきわめる」

発行 2014 年 3 月 20 日

編集・発行者 東京外国語大学語学研究所

代表者 高垣敏博

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

Phone : 042-330-5407

東京外国語大学オープンアカデミー 2012年度 後期開講講座
言葉とその周辺をきわめる

東京外国語大学 語学研究所
2012年10月9日(火)～11月13日(火)
東京外国語大学 本郷サテライト